

学部長裁量経費 平成22年度 教員養成学部フレンドシップ事業 報告書
授業科目名「社会体験実習」「社会教育演習」

ワールド
「信大YOU遊世間」の教師教育学研究 第17集

17th Annual Report on Shinshu University Project "You-you World" in practice (2010)
Pedagogical Research for Teachers



2011年(平成23年)3月
信州大学教育学部

はじめに

信州大学教育学部長 平野吉直

文部科学省のフレンドシップ事業の一環として、平成6年度から始まった「信大 YOU 遊世間」（開設当初は「信大 YOU 遊サタデー」）は、本年度で17年目を迎えました。平成22年度の活動も無事に終了し、この1年間のまとめを『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究』（第17集）として刊行できますことをたいへん嬉しく思います。

今年度の「信大 YOU 遊世間」の活動から特筆すべきこととして最初に挙げられることは、「信大茂菅ふるさと農場」の活動が、地域活性化につながる取り組みとして高く評価され、長野県農業協同組合中央会から11月9日に表彰されたことです。「信大茂菅ふるさと農場」は、10年を越える長きに渡り、茂菅地区の方々や「JA ながの」のご協力を得て実施されてきたものですが、こうした地域と密接に連携した地道な取り組みが評価されたことは、誠に嬉しい限りです。心からお喜び申し上げます。

また、平成22年11月20日・21日にかけては、信州大学教育学部キャンパスにおいて、「第9回 YOU 遊フェスティバル」が盛大に開催されました。地域の子どもたち約130名、その保護者の方々約50名をお迎えし、延べ約200名の学生たちが、さまざまな企画・イベントを準備・実施いたしました。

「信大 YOU 遊世間」は、「信大茂菅ふるさと農場」や「YOU 遊フェスティバル」に加え、「子ども」と「地域」をキーワードにしたいくつもの活動が、年間を通して学生の主体的な参画のもとで展開されています。これらの活動は、「信大 YOU 遊世間」の趣旨に賛同され、ご協力いただいている地域住民の方々、そして「長野市PTA 連合会」「須坂市教育委員会子ども課」「青木村教育委員会」「麻績村教育委員会」「長野市立大岡小学校放課後わらわらクラブ」「長野市湯谷小学校保護者の会」「JA ながの」など、多くの連携団体の皆さまのご支援によって成り立っていることは言うまでもありません。この場をお借りして深く感謝を申し上げますとともに、今後のさらなるご支援をお願いする次第です。

学校教員を目指す本学部の学生にとって、「信大 YOU 遊世間」の企画・運営を通じた地域の方々との交流、そして子どもたちとの直接的な触れ合いは、教師としての実践的指導力の基礎を養う貴重な経験となっているはずです。その大きな学びと成果を今後の社会生活にぜひ役立てていただきたいと願っています。

最後になりますが、土井進教授は、「信大 YOU 遊世間」の指導教員として、長きにわたり、学生に主体的な体験学習の場を提供されるとともに、地域における教育課題等の解決に向けた信州大学教育学部の社会貢献活動を推進されてこられました。そのご努力と継続力に、心から敬意を表します。

も く じ

はじめに	平野吉直 信州大学教育学部長	1
もくじ／凡例		2
第17期「信大YOU遊世間」	片原範子 第17期「信大YOU遊世間」運営委員長	4
第17期「信大YOU遊世間」の運営組織と目的	土井 進 「信大YOU遊世間」指導教員	5
1. 信大茂菅ふるさと農場（11年目）		6
◇実践から得た「臨床の知」		
信大茂菅ふるさと農場11代目農場長の収穫・茂菅が教えてくれたこと・夢のある活動	三石梨沙・土屋克明・松井 遥	12
◇地域協力者からの評価	林部信造 農業	16
	小池 健 JA ながの営農指導部	17
☆JA「にじの懸け橋賞」を受賞☆		19
2. 信大茂菅農業義塾（2年目）		20
◇実践から得た「臨床の知」		
理想と現実の間で感じたこと	肥野沙也加	21
◇参加者の声	橋本 政晴 信州大学教育学部講師	23
3. あっぷるず（11年目）		25
◇実践から得た「臨床の知」		
後輩に伝えたい「あっぷるず」	飯島 理沙	26
4. 湯谷小子どもランド（9年目）		29
◇実践から得た「臨床の知」		
「湯谷小子どもランド」という社会・二年間の関わりの中で	高見澤誠・腰原綾佳	36
◇地域の保護者からの評価	近藤和巳 湯谷小子どもランド 保護者代表	38
	中谷隆秀 湯谷小子どもランド 保護者	39
5. 青木村えがおクラブ（6年目）		41
◇実践から得た「臨床の知」		
人との出会い、そしてつながり	荻原知子・駒村美代	46
◇地域の方からの評価	高田玲子 青木村児童センター所長	47
◇青木村教育委員会からの評価	上原博信 青木村教育委員会事務局	48
6. 麻績村 dE 遊ぼう！（6年目）		49
◇実践から得た「臨床の知」		
子どもの主体的な姿を育むために	小賀坂佳子・三石梨沙	50
◇麻績小学校の先生方からの評価	橋渡久美子 麻績小学校司書	56
	桐澤 久美 麻績小学校非常勤講師	57
7. 信州すざか農業小学校豊丘校（5年目）		59
◇実践から得た「臨床の知」		

つながりあっていく空間、農業小学校・すざか農業小学校のあたたかさ・

農業小学校に参加して学べたこと 入澤清里・鈴木 梢・宮尾 匠……………60

- ◇関係各方面の皆様より 羽生田郁雄 信州すざか農業小学校豊丘校校長……………62
- 友田 一江 信州すざか農業小学校豊丘校事務局……………62
- 須坂園芸高等学校 野菜クラブ一同……………63
- 丸山 暢之 須坂園芸高等学校 野菜クラブ顧問……………64

8. 信州大岡ふるさとランド（3年目）……………65

- ◇実践から得た「臨床の知」
- 信州大岡ふるさとランドの経験を通して 山越 俊……………67
- ◇連携団体からの評価 金澤 仁 大岡子どもプラザ施設長……………67
- 小岩井彰 大岡小学校校長……………68

9. 第9回 YOU 遊フェスティバル（講座内容）……………70

1. みんなで楽しく!!ソーラン節
2. おばけやしきをつくろう!～みんなを怖がらせることはできるかな!?～
3. わたしたちのおやき屋さん
4. タイムトラベラー ～タイムマシン作っちゃいました～
5. 巨大人生ゲーム!!
6. ドロリッチ!
7. ほくほく芋畑牧場 ～バターって作れるんだ～
8. ぶっわぶわだよ バルーンワールド
9. つくってわくわく!楽しい工作
10. 夢のマイホーム☆
11. 子育てを語ろう ～学生の想い・親の想い～

- ◇実践から得た「臨床の知」
- 子どもたちの「できた」「わかった」をみんなで喜べる 藤浦修司……………87

「信大 YOU 遊世間」にご協力いただいている団体・個人のご紹介……………91

編集委員会規程……………92

開かれた「信大 YOU 遊世間」の創造 服部直幸……………93

おわりに／編集後記……………95

表紙解説／第17集編集委員会……………96



凡 例

執筆者が信大生の場合、適宜、専攻名と学年を略記した。以下に「例」と「略称」を示す。

例：「実3」=教育実践科学専攻3年、「言2」=言語教育専攻2年、「心2」=心理臨床専攻2年
 専攻名とその略称

実：教育実践科学専攻	言：言語教育専攻	社：社会科学教育専攻	理：理数科学教育専攻
芸：芸術教育専攻	保：保健体育専攻	生：生活科学教育専攻	障：障害児教育専攻
地：地域スポーツ専攻	野：野外教育専攻	心：心理臨床専攻	院：大学院生

なお、他大学等の参加者についても下記略称を用いた場合がある。

上：上越教育大、横：横浜国立大、茨：茨城大、文：文教大、岐聖：岐阜聖徳大、長：長野大、松：松本大、武蔵：武蔵野大、県短：長野県短大、清・清短：清泉女学院大・同短大、飯短：飯田女子短大

第17期「信大YOU遊世間」

第17期「信大YOU遊世間」運営委員長

片原範子（理数科学教育専攻3年）

1. 第17期のはじまり

今年度の「信大 YOU 遊世間」は、発足前に「引継ぎ」という面でなかなか今期のプラザ長・副プラザ長が決定せず、「今まで代々続いてきた活動を私たちが途絶えさせてしまっているのだろうか」という思いのもと、何度も話し合いをしました。最終的に、2つ以上のプラザを掛け持ちするという仲間が出て、1年間責任を持って活動することができるのか、お互いにすごく不安でした。ですがそんな中でも「やるからにはやろう」「私たちにしかできない第17期にしたい」という思いを仲間を確認しあい、平成22年4月3日に信州大学にて発足式が行われ、私たちの「第17期 YOU 遊世間」が発足しました。

2. 今期の特色

今期は、信州大学教育学部のホームページでのウェブブログが続き、また各プラザで新しく活動する内容がとても多かったと感じます。「子ども主体」として考える私たちの活動が様々な活動の場面で見受けられました。また、平成22年11月9日には長野県農業協同組合中央会様より、「信大茂菅ふるさと農場」の積年の活動が「地域活性化につながる協同活動に功績があった」として、「にじの懸け橋賞」という表彰をいただきました。これも、日頃からの地域の皆様のご協力のおかげだと感じています。

3. 1年間の活動を終えて

私はこの1年間で、「人とのつながりの大切さ」を実感してきました。仲間とのつながり、先生方とのつながり、子ども達とのつながり、そして地域の皆さんとのつながり。どれもが自分を成長させてくれる源であり、どれもが自分を知ることの手がかりになるものと思いました。全体長であることの前に、一人の学生として各プラザ長や副プラザ長が一生懸命考えてくれた企画にたくさん参加してきましたが、その度にいろんな表情をする子ども達を見てきました。中でも、子ども達の笑顔は、やっぱり私たちに元気をくれるし、もっとこんな活動をしてみたいというやる気にもつなげてくれることを改めて実感しました。教師を目指そうとする私にとって、子どものことを1番に考えて企画したり、行動する仲間と過ごした1年間は、これからの私の気持ちや、活動に大きな影響を与えてくれていると実感しています。

「信大 YOU 遊世間」運営委員長としての1年間はこれで終わりますが、これを新たなスタートとして、自分に出来ることや様々な活動に積極的に向かっていきたいと思います。

最後に、この「信大 YOU 遊世間」がまた1年間こうして活動できたのは、地域の皆様のご理解とご協力のもとだと心から思います。私たちを支えていただき本当にありがとうございました。

ワールド 第17期「信大YOU遊世間」の運営組織と目的

「信大YOU遊世間」指導教員
土井 進 (教育科学講座教授)

第17期の運営は、次の表にあげた学生によって実施されました。

- 運営委員長 片原範子 (理数科学教育専攻3年)
- 副運営委員長 高見澤誠 (理数科学教育専攻3年)
- 副運営委員長 三石梨沙 (理数科学教育専攻3年)
- 副運営委員長 藤浦修司 (社会科学教育専攻3年)

(◎プラザ長 ○副プラザ長)

プラザ名	連携団体・協力者	役員	専攻・学年
1 信大茂菅ふるさと農場 (11年目)	JAながの 長野市茂菅地区農家	◎三石 梨沙 ○土屋 克明 ○松井 遙	理数科学教育専攻3年 理数科学教育専攻3年 理数科学教育専攻3年
2 湯谷子どもランド (9年目)	長野市立湯谷小学校保護者会 長野県短期大学	◎高見澤 誠 ○腰原 綾佳	理数科学教育専攻3年 理数科学教育専攻3年
3 信州すざか農業小学校豊丘校 (5年目)	須坂市教育委員会	◎入澤 清里 ○鈴木 梢	教育実践科学専攻3年 理数科学教育専攻4年
4 信大茂菅農業義塾 (2年目)	長野市農業公社	◎肥野沙也加	野外教育専攻4年
5 麻績村 dE 遊ぼう! (6年目)	麻績村教育委員会 おみ図書館	◎小賀坂佳子 ○三石 梨沙	理数科学教育専攻3年 理数科学教育専攻3年
6 青木村えがおクラブ (6年目)	青木村教育委員会	◎荻原 知子 ○駒村 美代	教育実践科学専攻3年 教育実践科学専攻3年
7 第9回 YOU 遊フェスティバル	長野市 PTA 連合会 教育学部附属長野小学校ほか	◎藤浦 修司 ○小賀坂佳子 ○三石 梨沙 ○松田 祐輝 ○町田 香帆 ○佐藤美沙希 ○内川 舜也	社会科学教育専攻3年 理数科学教育専攻3年 理数科学教育専攻3年 社会科学教育専攻2年 教育実践科学専攻2年 教育実践科学専攻2年 教育実践科学専攻2年
8 信州大岡ふるさとランド (3年目)	長野市役所大岡支所・大岡小学校 校・農村女性ネットワークほか	◎山越 俊 ○宮尾 亘	社会科学教育専攻3年 教育実践科学専攻4年
9 あっぷるず (11年目)	林部信造・幸子夫妻	◎飯島 理沙	理数科学教育専攻4年

17年目の「信大 YOU 遊世間」を無事、大成功で成し遂げた学生の皆さん！本当にごくろうさまでした。様々な困難な場面を皆さんは仲間と連帯して乗り越え、友情を深めるとともに、教職への使命感を深めることができたことと思います。本当におめでとうございます。

「信大 YOU 遊世間」の目的は、その名前のお通り、信州大学の学生が、地域社会の中で地域の人たちと連携しながら、地域の子どもたちと様々な活動をとおして、感動や喜びを共有し、教師となるための実践的指導力（子ども理解力や教材開発力、コミュニケーション力など）の基礎を体得することにあります。また、具体的な活動を通して、地域の子どもや大人たちとの信頼関係を築くことをとおして、学生同士の信頼関係も築かれていきます。こうして学生が様々な人々と繋がり、地域社会をより良くしていく社会力を養成することも「信大 YOU 遊世間」の目的となっています。

信大茂菅ふるさと農場 (11 年目)

農場長 三石梨沙 (理数科学教育専攻3年)

副農場長 土屋克明 (理数科学教育専攻3年)

副農場長 松井 遥 (理数科学教育専攻3年)

○学生スタッフ名

三石 梨沙 (理3)	土屋 克明 (理3)	松井 遥 (理3)	飯島 理沙 (理4)
鈴木 佑香 (理4)	藤田 裕介 (社4)	市川 香織 (実4)	布山 朋和 (実4)
宮尾 亘 (実4)	西尾 聡美 (理4)	安部 由希 (芸4)	島崎 涼子 (芸4)
小松 静 (芸4)	肥野沙也加 (地4)	太谷 春花 (言3)	熊市 真也 (言4)
登内 恭平 (言3)	太田 香子 (社3)	山越 俊 (社3)	井上 岳人 (理3)
大井このみ (理3)	片原 範子 (理3)	金箱 仁志 (理3)	小賀坂佳子 (理3)
腰原 綾佳 (理3)	高見澤 誠 (理3)	田澤 岳哉 (理3)	服部 直幸 (理3)
峯村 和裕 (理3)	大井 香里 (芸3)	平澤 理恵 (生3)	中島 一樹 (言2)
井出 愛香 (実2)	内川 舜也 (実2)	関谷 将司 (実2)	丹羽 由佳 (実2)
町田 香帆 (実2)	近藤 由弥 (言2)	菊池 智香 (理2)	北沢 瑞樹 (理2)
鈴木喜多朗 (理2)	高橋 涼介 (理2)	澗口 歩美 (理2)	守屋 有菜 (社2)
佐塚 大悟 (生2)	宮川はるな (OG)	中川 茜 (OG)	小池 陽愛 (文4)
大久保美咲 (県短1)	栗原 朋子 (県短1)	花村ちひろ (県短1)	下平 綾音 (県短1)

○参加者数 子ども 41 名 (27 家族) 地域協力者 4 名 学生 50 名 卒業生 2 名

○連携団体 地域協力者：林部信造・幸子ご夫妻

JA ながの：小池 健

○プラザの概要

1. 「信大茂菅ふるさと農場」とは

本活動では、茂菅にある信州大学教育学部の農場で子どもたちと農作業を行ってきた。活動を行ってきた 12 アールの農場は、教育学部キャンパスから少し離れた場所にある。土井先生の生活科指導法基礎の授業でも、実際に作物を育てる場にもなっている。農場のすぐ下には裾花川が流れ、四方を自然に囲まれている。

2. 本年度の活動目標と年間活動計画

活動目標

今年度は「茂菅での農業や自然との関わりを通してそれぞれの季節ならではのものや生命の尊さに触れる」ということを目標に掲げて活動を行ってきた。「信大茂菅ふるさと農場」は農作業を行う活動ではあるが農作業をすることだけを目的とするだけでなく、農作業を通して周りの人々と関わったり、自然のありがたみを感じることができるよう活動になるように計画してきた。

年間計画

活動回	活動日	活動内容
第1回	4月17日(土) ⇒4月24日(土)	じゃがいも植え、看板作り
第2回	5月15日(土)	さつまいも・とうもろこし・トマト・ピーマン・枝豆・ひょうたん植え
第3回	6月5日(土)	田植え、大豆・枝豆植え
第4回	7月17日(土) ⇒7月24日(土)	じゃがいも収穫パーティー、かかし作り
第5回	8月7日(土)	川遊び
第6回	9月25日(土) ⇒9月23日(木)	稲刈り、はぜかけ
第7回	10月16日(土)	稲の脱穀、さつまいも掘り、焼き芋
第8回	11月13日(土) ⇒11月27日(土)	ひょうたんキーホルダー作り、ポップコーン作り (活動後の午後、保護者の方と学生とで懇親会)
第9回	12月11日(土)	おもちつき

3. 各活動内容

各活動は、以下のような日程で行ってきた。

9:00-9:20 受付	
9:20-9:40 はじめの会	11:00-11:40 活動
9:40-10:30 活動	11:40-12:00 リフレクション
10:30-11:00 休憩	12:00-12:10 おわりの会

農場に着いた子どもから受付をして名札をつけ、学生と一緒に畑で遊んでいた。はじめの会では準備体操として、代々伝わっている「もすげのうた」を取り入れてきた。副農場長の松井が歌のお姉さん、土屋が体操のお兄さんとして11代目オリジナルの振り付けで、子どもたちと一緒に取り組んだ。体操を行ったことで、はじめの会の後のグループごとの自己紹介では、ちょっと緊張気味の子どもも学生もちょっと心を開いて、活動に入りやすくなったと感じた。休憩時間は例年同様に林部さんのお家のトイレをお借りした。林部さんのお家までは、林部さんの軽トラの荷台に子どもたちが乗り込んで行ったが、毎回みんな率先して軽トラに乗り込み、楽しそうにしていた。活動の最後に毎回設けているリフレクションでは学生が用紙を渡すと、はじめこそ「めんどくさい」と言っている子も、数分後には真剣にその日の活動を描いている様子が印象的だった。マジックや色鉛筆など、周りの子と譲り合ったり小さい子に取ってあげたりするなど、子どもたちの心優しい面を見ることができた。

第1回 4月24日：じゃがいも植え、看板作り

今年は4月まで雪が多く、前日から雪が降っていた。当日の朝早くに起きると外は雪が積もっており、林部さんに電話してみると活動は無理だということで、今年度の第1回の活動は次週に延期となった。4月24日は晴れていたがとても寒い日だった。1週間延期になってし

まったにもかかわらず、多くの子どもたち、保護者のみなさん、学生スタッフが参加してくれた。活動ではまず畝作りから始めた。去年から参加している子どもも多く、協力して畝作りをすることができた。じゃがいもは子どもたちが種芋を切るところから活動をした。包丁を使ったのでケガをしないか心配だったが、学生が多かったこともあり、無事にじゃがいもを切り終えることができた。植える場面では、学生スタッフにも口で植え方を説明しただけであったのでその場になって質問が多く出てしまい、結果的に2度説明することになった。休憩後の看板作りでは、今年度育てることになっている植物をグループごとに分担して画用紙に書いた。

この活動での反省点は、学生への説明が足りなかったこと、予想外の事態になった時に臨機応変に対応できなかつたことがあげられる。私は実家でじゃがいもを植えた経験があったので、学生スタッフに対して簡単に説明した程度で終わってしまった。学生から子どもたちに指示を出してほしいと思っていたが、実際の活動ではやり方が伝わっておらず、もう一度説明することになってしまった。学生に伝えるにしても、子どもに伝えるにしても、誰に対してもわかるような工夫をしていく必要があると感じた。臨機応変に対応していくという点では、当日予想以上に寒かったが冷たいお茶を持って行ってしまったことがあげられる。地域の方や保護者の方は体を動かすことが少ないので、暖かいお茶を持っていくなどの配慮が必要だった。

第2回 5月15日：さつまいも・とうもろこし・トマト・ピーマン・枝豆・ひょうたん植え

第2回の活動では、各野菜の苗を植えることとなった。第1回と同様にして子どもたちと一緒に畝を作り、各野菜にあわせた植え方を行った。さつまいもは一般的な品種のものと同様に紅芋を植えた。じゃがいももいくつかの品種ということで、アンデス、インカの目覚め、きたあかり、だんしゃく、を植えた。はじめの会に品種の紹介も行ったが、子どもたちに特徴などは伝わただろうか。はじめの会はとにかくあわててしまうことが多く、もう少し工夫することが必要だったかもしれない。くわを一生懸命使って畝を作る子どもの姿や、虫や生き物を求めて走り回る子どもの姿が印象的だった。事前にしっかりと植え方を把握して準備しておくことが重要だとわかった。はじめの会でもっと落ち着いて植え方を紹介し、各場所でももう1回行えると良かったかもしれない。林部のお父さん、小池さんの協力もあり、何とか植えることができた。(学生のリフレクションの中から)

- ・学生が少なかった分、たくさんの子に気を配ることができました。視野が広がった気がします。(市川)
- ・カラスノエンドウで笛を作って楽しく遊ぶことができました。班の子の中でもっと関わりながら、活動ができるとよいと思いました。(鈴木)

第3回 6月5日：田植え、大豆・枝豆植え

3回目は、まず大豆と枝豆を植えた。枝豆は前回のトマトやピーマンの横に植えた。大豆は畦豆と言われるように、田んぼの周りの畦にうえた。枝豆も大豆も“種”からの状態で植えたため、子どもたちの中には「こんな小さいの！」と驚いていた。土に指で小さい穴をあけてその中に2、3粒の種を落とし土をかぶせる。この作業を繰り返すのは、子どもにとってとても根気のいる作業に思えたが、穴をあけたり、小さい種を穴の中に落としたり、真剣に、でも楽しそうにやっている姿がとても印象的だった。ここで植えた枝豆と大豆は、12月の活動で予定されている「おもちつき」の際に“ずんだ豆”と“きなこ”にして使った。

そして本活動では、畑だけではなく田んぼにも進出した。本日の活動のメインである田植えをした。子どもも学生も保護者も、みんなが1列になって端から端に引っ張った紐に沿って稲の苗を植えていく。1つ植えたら1歩下がってまた紐に沿って稲を植える。周りの友だちとコンタクトを取りながら、お父さん、お母さんと話しながら楽しそうに田植えを行っていた。田んぼの中に裸足で入ると、地上とは違って何とも言えない感触がある。その感触に子どもたちは「気持ちいい」と声をあげていた。最後には近くの用水路で足を洗ったのだが、それがだんだん水遊びにかわり、子どもたちは学生を標的にして、びしょびしょになりながら水を掛け合っていた。茂菅ふるさと農場では、毎回の活動だけでなく、水遊びや昆虫探しの様な別の楽しみを子どもたちは沢山見つけるなあと感心した。

第4回 7月17日：じゃがいも収穫パーティー、かかし作り

第4回の活動ではじゃがいもを収穫し、その場で茹でたじゃがいもや、もすげチップスなどを子どもたちと食べたり、稲が成長してきたのですずめ避けのかかしを作ったりした。今年がガスコンロをいくつか持って行き、それを使って茹でた。茹でている最中の安全管理では、小さい子どもたちが触れて火傷しないようにすることなどが大切だとわかった。じゃがいもはそれぞれ違った味がするというので、子どもたちが全種類制覇しようと一生懸命だったことや、「インカの目覚め」というめずらしい品種のおいしさに、保護者のお母さん方も子どもたちもとても笑顔になって喜んでいました。小さい子どもたちが多かったのにもかかわらず、みんな一生懸命掘って収穫をしていました。とても暑い日で、水分補給や休憩を挟みつつ、倒れる子を出さずに乗り越えられて本当に良かった。子どもたちの中には泣いてしまったSちゃんもいたが、同じ班のMくんが声をかけてだんだんなじめるようにしてあげていた姿がよかった(鈴木)。かかし作りもみんな一生懸命塗りたくっていた。小さい子どもたちが特に楽しそうで、完成したものを被露目すると歓声があがった。かかしに針金等を使っていたのだが、もう少し安全なものでつくれたらもっと良かったかもしれない。何とか衣類も確保できた。学生のみならず、保護者の方に本当に感謝したいと思います。保護者のお母さん方が、「ポテトチップスが茂菅でとれたじゃがいもで作ってあってすごい」と褒めてくれました(飯島)。子どもたちも喜んでくれてよかった。スコップ等を子どもや学生が密集している中で使うことに関しては、もう少し注意が必要だった(藤田)。

〈学生のリフレクションの中から〉

- ・暑い中でも元気に芋掘り、かかし作りに参加する子どもたちは、本当に生き生きしていた。子どもに指示が通りにくいことが課題だと思う。(高見澤)
- ・何人かの少し年齢が上の子どもたちが、小さい子どもたちに気遣いをかけたりしていて良かった。Hくんが熱心にかかしの話を聞いてくれ、何度も頷いてくれた。(服部)

第5回 8月7日：川遊び

今回は茂菅ふるさと農場からちょっと離れた、裾花川下流の河川敷をお借りして川遊びをした。当日の天気は最高だった。昨年企画していた川遊びが天候不良のため中止になってしまい、今年初めてこの企画を行ったということで、企画の段階から見落とししている部分などもあり、下見などがあまりできないまま活動に入ってしまった。そして、実際に土井先生に場所を確認していただいた時に、子どもには深すぎて危ない場所など指摘していただいてより安全な区間

を子どもたちに提供できた。前日までの雨で川は泥水状態。川の中まで見る事ができる状態ではなく、子どもたちは牛乳パックとラップで作った水の中を覗く道具を必死に使って川の中の生物を探そうとしていた。川が澄んだ状態で川遊びができれば子どもたちにとっては最高の活動だったのではないかと思う。しかし、見えない川の中を網や自分の手足を使って必死に魚や水生生物を見つけ出そうとしたり、川端の草花で遊んだり、農場とは違った空気を味わいながら子どもたち自身で楽しみを見つけていたし、とても気持ちよさそうだった。真夏の日に冷たい川の中で遊ぶ企画が出来て良かったと思う。休憩時間には農場で取れたトウモロコシを茹でて食べた。気象条件などにより大きく育たなかったトウモロコシだが、味は甘くてとてもおいしかった。子どもたちは農場でとれたトウモロコシと聞いてとてもうれしそうに食べていた。卒業生の方からいただいたスイカもおいしくいただいた。休憩後には漁業組合の方の計らいで、実際に川でとれた魚を見せていただいた。子どもたちは夢中になってお店では見たことのない、食卓には上がらない魚に興味津津になって見ていた。

子どもたちは川で純粹に遊ぶことだけをとても楽しんでいた。「またやりたい」という声もたくさんあった。活動自体はとても短い時間だったが怪我もなく笑顔あふれる時間となった。この活動では地域の方や学生、協力してくださっている皆さんに感謝するとともに、たくさんの支えがあって活動が成立していることを改めて感じた。これからも子どもたちが学び、楽しく活動できる場所でありたいと感じた。

第6回 9月23日：稲刈り、はぜかけ

天気を心配して日程変更をしたが、この日も天気は雨。しかし、それでも保護者の方と一緒に参加してくれた子どもたちがいた。子どもは雨の中でも一生懸命慣れない手つきで稲刈りをしているところを見てとても感動した。参加予定の学生も全員来てくれていつもよりは少ない人員の中で楽しみながら、楽しみを見つけながら一生懸命全ての稲を刈ることができた。その後、雨がやまないということで子どもの体調を心配して稲刈りまでいったん活動を締めた。参加した子どもたちは少なかったが、稲刈りをしながら学生たちと交流したり、カエルなどの生物に夢中になっている姿があった。雨が降っていることなど気にせずに本当に夢中になって活動の時間を楽しんでいるなど感じた。雨の中での稲刈りは子どもにとっても、学生にとっても貴重な体験であったと思う。

活動後、はぜかけは学生たちだけで行うことにした。はぜかけ棒をつくり、みんなで分業しながら束ねた稲をかけていく。一人では到底時間内に終わるはずもないが全員でしっかり全ての稲をはぜに掛けることができた。一人ではできないこともみんなでやればできる、協力することの大切さを改めて実感した。農業はむかしは隣家の人々みんなで今日はこのお宅、明日はこのお宅と協力して一つの田んぼや畑を手伝っていたという。今となっては自分の家の田畑を作るのに精いっぱいになっている状態だが、時には農場でやっている活動のように沢山の人が協力しながら田畑で作業を行っていくことも必要であると感じた活動であった。

第7回 10月16日：稲の脱穀、さつまいも掘り、焼き芋

今回は稲の脱穀、さつまいもの収穫、そして焼き芋を行いました。焼き芋は熾（おき）を作るために、乾いた木材をもっと用意しておけるとよかった。林部のお父さんから頂いたりんごの枝や、乾いた草、農場にあった少しの木材で、何とか行うことができて本当に良かった。一

緒に火を見てくれていた高見澤くんと金箱くん、藤田さんに感謝です。強火ではなく、熾でじっくり焼くことが大切だとわかった。子どもたちがとても美味しそうに食べていた。学生にはちょっと紅芋は合わなかったようでした。脱穀の足踏みに関しては、何とか無事に終わらせることができたが、子どもに危険なことははっきりと伝えた上で、挑戦して欲しいということ、学生の指示に従って欲しいというところの一線をもっとはっきりさせておいたり、説明する時にしっかりと話を聞いてもらえる体制をつくったりできると良かったかもしれない。衛生管理としては、田んぼの土や芋掘りで汚くなった手を洗える用意をしておくべきでした。汚い手で焼き芋を食べるということになっていなかったか心配です。虫に刺された子用のかゆみ止めの薬も必要でした。今回も少し準備不足が目立ってしまいました。片付けの時にもっと早くアルミホイルの分別用ゴミ袋を設置できると良かった。金属は自然に帰らない、子どもたちとそんな点について話すことができたならもっと良かった。学生のナタ、クワの扱いをもっとしっかりできるようにしていきたいと思った（使い方や子どもがいるときの管理）。同じチームに兄弟だけになってしまった時にどのように他の子とかかわりをもてるようにするかが課題だと思った。

〈学生のリフレクションの中から〉

- ・足踏みは危険な道具だったけど、めったに体験できるものではないので、もう少し子どもに操作させてあげられればよかった。（峯村）
- ・千歯こきを見て「あれやりたい！！」という子どもの積極的な姿や、イモを夢中で掘っている子どもの姿が見られて良かった。（栗林）

第8回 11月27日：ひょうたんキーホルダー作り、ポップコーン作り

第8回の活動では今年初めての試みになる、ひょうたんによるキーホルダー作りとポップコーン作りを行いました。ひょうたんは5月の活動に植えたものを稲刈りの活動時に収穫し、穴を開けて樽の中に水と一緒に入れ腐らせたものの中から、種を取り出し乾燥させるという過程を経ます。この活動に関わることではじめてひょうたんがそのような過程を経て、あの硬くてお酒の入れ物にする容器になるのだとわかりました（消毒も必要）。種だしはとても大変でしたが、三人で協力して、また助けてくれた仲間の存在もあり完了することができました。当日子どもたちは楽しそうに各々好きな色で塗ったり、飾り付けをしたり、キャラクターを書いたり楽しんでいて本当に良かったです。だんだん違う学年の子や友達同士で話をしている姿もちらほら見えてきて、とても幸せな気分になりました。ポップコーンは動物に食べられてしまったのですが、何とか子どもたちに市販のものではじけるところを見せることができよかったです。お土産に小池さんが育ててくださったものも渡すことができました。おうちで美味しく食べられているでしょうか。ポップコーンのはじけるさまをはじめて見た子もいました。

*午後：保護者の方と学生とで懇親会

お昼のシチューを食べながらとても和やかに話すことができました。保護者の方からお家で茂菅で取れた野菜を、子どもたちがうれしそうに食べているという話や、学生や様々な人と関わる場としてとても助かっているという話を聞くことができました。「今、小さい子どもたちと年齢がある程度上の子どもたちの間の活動をどのようにしたら共に楽しいものにできるか悩んでいる」という話をすれば、「班のメンバーを変えたり、活動の担当を工夫してみたりし

ては」と、たくさんのアドバイスをいただけ、とてもうれしかったです。保護者の方は茂菅が子どもにとって新たな人間関係の場になればと期待しているようでもありました。人とのつながり、自然とのかかわり、子どもたちが大切にできるようなそんな活動を、優しく見守ってくださる保護者の方の願いも取り入れてつくっていかれたらと思います。

第9回 12月11日：おもちつき

今年度最後の活動は、茂菅でとれたもち米を使ったおもちつきである。いつもは学生が指示を出して子どもたちが活動するという形をとっているが、懇談会で出していた意見や三石・土屋・松井の3人で話し合ったことも含めて、「子どもたちが考えて活動する」ということを今回の目標とした。茂菅の保育園から杵と臼をお借りして活動を行った。

当日は欠席が多く人数に偏りが生まれてしまったため、班の子どもを移動して活動に入った。はじめの会のあとに4月から育ててきた「五穀」の話をした。活動では5つの班に分かれておもちつきをやりながら、「きなこ」「大根おろし」「納豆」「ずんだ」「さつまいもあん」「お雑煮」を作った。大豆、さつまいもは茂菅で収穫したものを使い、大根は大岡でとれたものを分けていただいた。各班で作ったトッピングの他に農業義塾の小野塚さんからいただいた茂菅の小豆を使った「あんこ」もとても好評であった。子どもたちは次々に「おかわり！」とってお椀を持ってきて、思い思いのトッピングで笑顔でおもちを食べていた。活動の終わりに、一年の振り返りのDVDと子どもたちが書いたリフレクションシートを一人一人綴じて渡した。反省としては、「時間配分や活動ごとのメリハリが無いと思う」（高見澤）。「おもちつきを1回しかできなくて少し不満そうだったのでそこを改善できれば良いと思います」（北沢）。このような意見も出ているように、おもちをつきながらのトッピング作りだったので、活動がスムーズに進むように、また活動ごとにメリハリが出るような活動にするよう工夫が必要であった。今回の活動では、学生が思っていること、伝えたいことが子どもたちにうまく伝わらない場面が多かった。今年度最後の活動ということで、第11代茂菅の良いところや悪いところが全部出ていたように感じる。しかし、最後はどの子どもたちも保護者の方々も笑顔で「ありがとう」と言ってくれた。大変なこともたくさんあったが、最後にみんなの笑顔が見られて、茂菅に関わられて本当に良かったと思えた。

◇実践から得た「臨床の知」

信大茂菅ふるさと農場 11代目農場長の収穫

三石梨沙（理数科学教育専攻3年）

「農場長」この名前を背負った一年間は私にとって忘れられない一年になった。私が11代目としてこの役を引き継ごうと思ったのは、10代目の先輩が最後の活動の後に「農場長をやったよかった」ということを話していたからである。その時の先輩の顔はとても清々しく、自分も一生懸命に何かに取り組み、胸を張って「やってよかった」と言えることをしたいと思ったことをよく覚えている。副をやりたいと言って手を挙げてくれた松井さん、土屋君とともに11代目の茂菅は始まった。

初めの方の活動では、とにかく活動がしっかり成り立つように必死で、活動もあっという間に終わってしまった。子どもがケガをしないように、忘れ物をしないように、活動が滞らない

ようにするために、手紙を出して、計画を立てて…。とにかく必死で、「長なんだから」と、いろんなことを一人でどうにかしなければいけない、それが当たり前だ、と考えていた。そんな中で3回目を迎え、ついに活動に影響が出てしまった。

第3回の田植えはそれまでの2回に比べて規模が大きく、3人が仕事を分担していかなければいけなかった。しかし、3人で集まれる時間が少ないまま当日になってしまったので、3人で出す指示がばらばらになってしまい、参加者のみなさんを混乱させることになってしまった。先輩にも「3人で仕事を分担するように指示することも長の仕事なんだよ」と言われ、自分の考え方の間違いに気付いた。初めは副をやると言ってくれた2人に感謝しており、どこかで「やってくれている」という意識があった。しかし、「やる」と手を挙げた以上やる気も長と同じなはず、今まで2人の意見をあまり聞かずにやってきてしまったことを後悔した。そこからは3人で細かいところまでよく話し合い、活動がうまくいかないときも3人で対応できたと思う。この経験があったからこそ、その後に3人の中でモチベーションに差が生まれてしまったときも3人で話し合っ解決することができた。3人で計画することで、たとえ活動の前に緊張していても、「3人いるんだから！」と、前向きに考えられるようになった。

活動内容に関しては、初めに3人で「農作業をする活動だけど、農作業がゴールになってほしくない」という願いを持って活動していた。茂菅の活動では、他のプラザと違ってたくさんの小学校から子どもが集まっている。そこで、子どもたち同士が関わって楽しさを感じていけるよう、あえていろんな学年を混ぜたグループ編成にしてきた。しかし、1回の活動では子どもたちが仲良くなることは難しかったように感じる。また、1回1回の活動で目標や子どもたちへの願いをもう少し具体的に決めておけば、もっと細かく計画できたのではないかというのも改善点である。子どもの年齢が低くなってきたことも活動を計画する際に頭に入れておかなければならないと感じた。

1年間農場長をやってきて「もっとこうすればよかった」という思いもたくさんあるが、農場に来てくれた子どもたちは毎回全力で活動をして笑顔を残してくれていた。企画する側であったので直接子どもと関わる機会は少なかったが、子どもたちがキラキラした目で活動をしていたり「楽しい！」と言ってくれたりしたので、その度にもっと頑張ろうと思えることができた。初めのうちは「子どもの中に何か残るものを…」と考えていたが、やはり「楽しい」「また来たい」と思ってもらえるような活動を作り上げていくことが一番大切なのではないかと感じる。その中で、「じゃがいもの植え方は…」「田植えをする時期は…」「11代目の体操は…」など具体的な内容を覚えていてくれたらうれしいが、それよりも「あの時、農場でお友達と一緒に遊んで楽しかった」「野菜作るのって大変だったな。給食の野菜もちゃんと食べなきゃ」「川が汚れたら、あの時の魚も虫も困っちゃう…」。こんな風に、子どもが心のどこかで思ってくれば幸いである。

最後に今年度の活動を運営するにあたって、茂菅に関わってくれたすべての人に感謝したい。一緒に運営してきた副の松井さんと土屋君には、普段楽しく過ごす友達とはまた違った仲間の大切さを教えてもらった。指導教官として私たちのことを信頼して支えてくださった土井先生には、やりたいことができるように最大限に協力していただいた。いくら子どものことが好きでも、土井先生がいらっしゃらなければ活動を運営することはできなかった。林部さんと小池さんには、農作業の知識が少ない私たちが活動を作っていけるよう、いろんなことを一から教えていただいた。農作業だけでなく、地域の方とのつなぎ役にもなっていただいた。お二方と

もご自分の仕事があるにも関わらず、茂菅のことに気を配ってくださった。そして、学生スタッフの皆さんには毎回大勢参加していただき、活動がスムーズに進むように協力してもらった。声をかければ快く参加してくれて、茂菅の魅力の大きさ、協力してくれる仲間がいることの幸せを感じた。長として役立たずな部分も多く周りの人々に迷惑をかけてしまったこともあったが、一年間「農場長」をやらせていただいて多くのことを得ることができた。この「農場長」を引き継いで本当に良かったと思っている。この一年間の収穫を大切な思い出にするとともに、今後活かしていきたい。

一年間ありがとうございました。

茂菅が教えてくれたこと

土屋克明（理数科学教育専攻3年）

今、私はこの一年間、副農場長として三石さん、松井さんとこの「信大茂菅ふるさと農場」に携われたことをとても幸せに思っています。この活動に携わる中で感じたこと、得たものは本当にかげがえのないものになりました。また、毎回の活動の準備をし、実行していく日々の中で、笑ったり、悩んだり、感動したり、悔やんだり、様々な感情を抱き、考えてきました。この一年間を振り返り、述べたいと思います。

大学二年生の後期、引継ぎの時期になって各プラザの長を決めるときがやってきました。私は他のボランティアサークルの役員やキャンプの企画もあって、どうするか悩んでいました。ただ、この茂菅での活動に関しては、「あっぷるず」で林部のお父さんと関わらせていただいた中で得たもの、数は少なくとも去年の茂菅の活動に参加して感じたものがあり、もしだれも引き継ごうとする二年生がいなければ、多少大変でもプラザをなくしたくない、自分が引き継ごうと思っていました。引継ぎが終わって、昨年先輩方、土井先生、JAの小池さん、林部のお父さんたちとの打ち合わせを4月の活動に向けて行ったのですが、このときは本当に茂菅での活動が楽しみで、心の中には希望がいっぱいでした。しかし、いざ活動が始まると他のキャンプの企画と並行しての準備となり、心の余裕もなくなっていき、9月の稲刈りの活動が終わる頃にかけて、準備をしている時のわくわくした気持ちもなくなって、だんだんと自分がなぜこの茂菅で副農場長として活動したいと思ったのか、茂菅の何に魅力を感じているのか、わからなくなってしまいました。毎回の活動の最中に、子どもたちが大学生や自然と関わり、茂菅という地域の中で楽しんでいる姿を見ている、なんだか心の中にはもやもやしたものがあるといった感じでした。私は農場長を支えるべき副農場長として、自分の仕事を全うすることができず、他の二人、特に三石さんにはとても負担をかけてしまって、今でも本当に申し訳なかったと感じています。10月から11月の間には、三人で残りの活動を気持ちを一つにして成功させるために話し合いをしました。私はこのときにやっと、自分がどうしてこの茂菅での活動をやりたいと思ったのか、茂菅の魅力は何なのか、改めて考えることになりました。また、ある飲み会で今年の副農場長である鈴木先輩と話すこともでき、副農場長がどんな存在であるべきか、教えていただき、それに少しでも近づこうと残りの活動に取り組もうと決めました。そして、さつまいもやひょうたんの活動、懇親会や餅つきの活動を経て今に至ります。今、自分なりに残りの活動を茂菅と向き合ってみて、茂菅の魅力はなんといっても子どもたちと自然のかかわりだと思いました。今までの活動を振り返ってみても、あの茂菅の畑の中で、カネ

チョコを探したり、自ら植えたジャガイモを収穫して食べたり、草笛を吹いたり、ひょうたんにペイントをしたりする中で、子どもたちは普段知ることのなかった自然を全身で感じていたと思います。また、この茂菅で活動することによって、普段関わることのない大学生と活動する中で、少しずつ自分を表現することができるようになった子どももいました。懇親会ではお家の方がどんな思いでおられるのか、どんなことを茂菅の活動に期待しているのかを知ることができました。中には、「茂菅で育てた野菜というと、嫌いな野菜も子どもが食べてくれる」という声や、「学生と関わる中で本当に楽しそうに過ごせている。いろんな他の子どもと関わる機会になってうれしい」という声がありました。また、「もっと同じ年齢の友達とかかわれるような活動になるといっそううれしい」と話していただきました。私は日々の活動や懇親会、保護者のお母さん方と話す中で、保護者の方や子どもたちが、どれだけこの茂菅の活動を楽しみにしていて、大切にしてくださっているのかにやっと気づきました。

このような一年間を過ごしてきて、茂菅の活動を行っていく中で私が学んだことをいくつか述べたいと思います。まず、子どもは自然と触れ合ったり、学生と関わったりする中で、成長するきっかけを掴んでいたり、自然のすばらしさ、人とつながることの楽しさを感じたりしているということ。次に、何か活動に取り組む際には、仲間とその活動を共に作り上げるために、自分がどんな活動にしたいのか、その想いを胸に秘めて活動と向きあわなければならないということ。そうでないと、活動が「やらされている」になってしまい、準備はただの作業になってしまいます。最後に、どんな活動にもそれを楽しみに待っている子どもたち、地域の方、保護者の方がいて、かけがえのない魅力があるということです。今は本当に、茂菅の活動のよさやすばらしさを二年生の時に体験して知っていたはずなのに、他の活動と両立できない自分の未熟さのせいで、他の二人にも迷惑をかけ、「すばらしい茂菅の活動にしたい」という想いをもって活動と最初から向き合うことができなかつたことが何だか悔しいです。これからは、関わる活動の一つ一つと向き合って、後悔のないよう全力で関わられるようにしていきたいです。

このかけがえのない一年間をくださった、一緒に活動してくれた学生のみんな、参加してくださった子どもたちと保護者の方々、協力してくださった小池さん、地域の林部のお父さん、そして茂菅に感謝したいと思います。ありがとうございました！

夢のある活動

松井 遥（理数科学教育専攻3年）

私がこの1年間茂菅で活動してきて学んだこと、楽しかったこと、嬉しかったことが沢山あります。1度も茂菅の活動を経験しないまま副農場長を希望した時、自分には何も目的はありませんでした。自分が農業に近い所で育ってきたことと、1年を通して子どもたちと関われること、農家の林部さんの温かさに触れ、自分もその活動の中で様々な関わりを持ちたいと思ったのが始まりでした。実際に活動が始まると、役員としての大変さが身にしみてわかりました。茂菅での活動は、自分の弱さがはっきりと見えた1年間でもあり、自分の気持ちに勇気を与えてくれた1年にもなりました。その1年の中で、自分が感じたことを綴らせてもらいます。

茂菅での活動の基盤は農業です。子どもたちにとっても学生にとっても普段の生活の中で農業にかかわる機会と言うものはほとんどないと思います。茂菅での醍醐味は自然の中で命の尊

さを近くに感じられること、人との関わりの中で協調性や関わり方を学べることだと思います。平成22年11月、今までの「信大茂菅ふるさと農場」の活動が表彰されました。農家の高齢化が進む現在、青少年が農業に触れる機会はとても少なくなっていると言われていています。その中で、茂菅での農業体験ができ、人と協力して1つの田畑を作っていくことを子どもたちが体験することは、とても素晴らしいことだと思います。子ども、保護者、学生、先生、地域の方が連携して1年間田畑と向き合ってきたことが参加した人々みんなの心を豊かにしたと思います。普段の生活と異空間にある農業を体験し、自分たちが口に運ぶ食べ物がどのように育っていくのか、自分が育てた時の喜びがどんなものかを子どもたちに伝えていく機会がもっとあればいいなと感じています。

この活動では、役員3人がどうしたいか、どうやって運営をしていくかがとても大きなカギになっていたことを改めて理解しました。年間計画で大まかな計画が決まってはいましたが、その1回1回を自分たちなりにどう作っていくかがこの11代目の活動がつくられていく大事な要素だったと思います。できるかできないかを検討することも活動を運営する上では大事だけれど、自分たちがやりたいかやりたくないかが鍵となっていたと思います。自分が弱かったのは、最後まで納得するまでやり通そうという気持ちでした。そして、その半端な気持ちを反省し、次はもっと良いものに…という発展へつなげることが活動を良くするためには大切であると感じます。活動を通して“やり通すこと”をもっと大事にしていきたいと感じました。もっと時間を費やせばよかった、考える時間が欲しかったと後悔することが多々ありました。世代が変わるとその代の活動のカラーも変わってきます。自分たちの活動を振り返って反省点や良かった点を時代の学生たちにつなぎ、茂菅農場がもっと楽しく明るく、誰もが参加できる活動になっていくと良いなあとと思っています。

最後に、1年間活動で見ることができた子どもたちの笑顔や元気な声、学生の笑顔や一人ひとりの行動がとても輝いていました。周りの方々に支えられながら作り上げることができた11代だったと思います。限られた時間の中で一人ではできないけれど、沢山の人が集まってできることがあります。この経験を糧に挑戦することを忘れずにいたいと思います。

◇地域協力者からの評価

人は組織をつくり、組織は人をつくる

農業 林部信造

今年も11月21日、「YOU遊フェスティバル」が信大教育学部のキャンパスに於いて一年間の集大成として大勢の皆さんが参加され盛大に開催されました。心からお喜び申し上げます。また、私達も家内共々毎年お招きいただき、元気に参加させていただきました。誠に光栄に存じありがたく厚く御礼申し上げます。

フェスティバルには関係する県内外の学生のみなさん二百数十名の方が参加され熱意あふれる中での開催となり、実行委員長の感動的な挨拶から始まりました。ここに参加された皆さんは、それぞれのプラザで自ら計画、実践されました。この一年間、同志の皆さんと苦楽を共に組織を創り、育てながらやり通した達成感と連帯感は、学生時代の良き思い出となるでしょう。

一人で何かをやろうと思ってもなかなか出来ない。志を同じにする仲間を集め大きな活動をするには組織が必要となる。その組織は目的と責任を明確にし、全員参加による組織として

育て創らなければならないのです。

人の心と和をもって相手の立場を尊重し、理解を深めることにより強力な組織力となり目的達成に大きく前進する。各プラザでの実体験は未来の社会人としての学びの道場であり、社会力を養う助走の場でもあります。

人は一人では生きられない。大勢の力が支えあって強く生きられる。「人」という字の一面は直立ではなく斜線である。二画もまた斜線で支えている。支えあった字が「人」である。最低二人の助け合いが必要である。家庭も最低二人が助け合って家庭となる。三人、四人と大勢重なる（協力）と「人」の字は太く強い字となる。組織においても「人」の重なりを深め字を太くすればする程、絆が深まり強固な組織となります。各プラザの活動も総て人の支えから始まっています。ここでの良き出逢いをいつまでも大切にしたいものです。

夢中になれるもの、懸命になれるものをどれだけ持っているかということが人生の豊かさを左右するといわれます。自ら主体的に判断して体験を積み重ねる努力こそ、次なる成功へと続きます。何か夢中になれるものを求めたい。

昨年は「信大茂菅ふるさと農場」開設十周年を迎え、式典が盛大に開催されました。また、今年は学生による「信大茂菅ふるさと農場」の実践活動が高く評価され、平成22年11月9日、JA長野県ビル・アクティホールに於いて第63回JA長野県大会の席上、「にじの懸け橋賞」の大賞を受賞されました。県下における優良組合員組織として一年に一組織が受賞の対象となり、本年は当農場が受賞しました。誠にありがとうございます。

この大賞に多少なりとも協力出来たことに感謝すると共に光栄に存じます。これからも健康に努め、リンゴ、米作り「信大茂菅ふるさと農場」のお手伝い等、農を楽しみながらバランスのとれた生活を目指し終生現役を願っています。

笑顔・笑い声・驚き・発見のある「茂菅ふるさと農場」

JAながの営農指導部 小池 健

今年は農場長の三石さんをはじめ、副農場長の土屋君、松井さんが中心となり、大勢の学生スタッフと林部さん、そして土井先生とともに「茂菅ふるさと農場」に取り組みました。農場では水田で米をつくり、畑でさつまいもやとうもろこし、じゃがいもをはじめ様々な作物を栽培しました。今年はひょうたん栽培にもチャレンジしました。林部さんの指示のもと、学生の皆さんとともに新たにひょうたん用の棚を設置し、完成することができました。

そして、今年とはくに夏の高温と干ばつにより、作物を栽培することが難しい年でした。気温が30℃を超える日が何日も続いて、作物にとっても、また、人間にとっても大変な年でした。農業は毎年毎年が1年生です。今年のように暑い夏となったり、冷夏の年があったり、その都度、作物の生長も、栽培管理も全く異なります。そこが難しいところでもあり、また、やりがいのあることだと思います。そのことは茂菅農場に参加した全員が感じてくれたのではないのでしょうか。

8月には茂菅農場の横を流れる裾花川に、実際に入る機会もあり、子どもたちにとって貴重な体験ができたと思います。また、学生の皆さんは河川使用の準備がとて煩雑で大変であったと思いますが、漁協の皆さんに協力いただきながら、当日は楽しく活動ができました。

そして、稲刈りは生憎の雨降りの中、泥だらけ、ずぶ濡れになりながら行いました。

ほかにも大麦、小麦や大豆と多くの穀物を栽培しました、これらは食生活に欠かすことができません。五穀とは米・麦・粟（あわ）・黍（きび）・豆をふつういいますが、日本人ははるか神代の時代からこれらを栽培し食べて来ています。日本書紀では五穀は神様の体から生まれたことになっています。その神様の頭から牛と馬、額からは粟（あわ）、眉の上には蚕（かいこ）、目の中には稗（ひえ）、腹の中には稲、陰部からは麦と大豆や小豆が生まれたとされています。似たエピソードは古事記にも見られます。これらは当時の重要品や重要な作物であったことが伺えますし、ずっと日本人はこれらの五穀を食べて暮らしてきました。

現在は食の多様化・飽食の時代などといわれていますが、お米を不自由なく食べられるのはここ数十年のことです。時代を遡れば飢饉などで大勢の人々が亡くなっています。食とは生きるうえでの基本であり、欠かすことのできないことです。現代の日本の食卓には季節を問わず、日本の食材だけでなく世界中の様々な農産物や加工品が並びます。

しかし、茂菅の農場では、様々な野菜を植え付け、種を蒔き、田植をして、季節の移ろいを感じながら、いろいろな世話をして収穫する。こうした一連の経験を通じて、作物本来の旬を感じながら農業の大変さ、難しさ、楽しさ、そして喜びをみんなで感じることはできないでしょうか。

最後に、平成 22 年度 JA 長野県大会において、「信大茂菅ふるさと農場」が「にじの懸け橋賞」を受賞することができました。土井先生の土づくりは人づくりの精神と、陰につけ日向につけご協力いただいている林部さん、そして何より歴代を含めた学生の皆さんの努力と継続の賜物であると思います。

1 年間有難うございました。これからも微力ながら協力をさせていただきたいと思います。

☆JA「にじの懸け橋賞」を受賞☆

—信州大学教育学部のホームページで紹介された記事—



教育学部で運営している「信大茂菅ふるさと農場」の地域活動が認められ表彰されました。11月9日に開催された第63回JA長野県大会において、教育学部土井進教授が指導し、学生が運営している「信大茂菅ふるさと農場」の活動が、地域活性化に寄与し顕著な功績を挙げたとして、長野県農業協同組合中央会長より表彰されました。

同農場が受けた表彰は、優良組合員組織に与えられる「にじの懸け橋賞」で、この農場で児童生徒、大学生、農業者、大学教員が、自然との関わりや命の尊さを学び農業を実際に体験することにより、互いに協力することの大切さを学び合うことを永く続けてきたことが評価されたものです。代表学生2名に賞状と記念品が授与されました。

また同日行われた地域フォーラムで、「次代へつなぐ食と農」と題して実践事例報告を行い、農場の活動の紹介を行いました。

☆ — ☆ — ☆

平成22年11月9日(火)9時50分からJA長野県ビル・アクティホールで第63回JA長野県大会が開かれました。主催者あいさつの後、阿部守一長野県知事から祝辞が述べられました。引き続いてJA功労者顕彰、優良組合組織表彰が行われ、第10代信大茂菅ふるさと農場長飯島理沙さんと第11代信大茂菅ふるさと農場長三石梨沙さんが壇上に進み出て、JA長野中央会の茂木守会長から大きな賞状と記念品を授与されました。

13時30分～15時10分まで「信州の食と農を未来へつなぐ地域フォーラム」が行われ、三石梨沙農場長と土屋克明副農場長、松井遥副農場長、そして土井進の4人で「次代へつなぐ食と農」と題して実践事例報告を行いました。

この度、教育学部がJA長野中央会から表彰を受けることができたのは、ひとえに農業の知識が乏しい私たちの活動をいつも陰から支えて下さっているJAながの営農指導部の皆様のお陰であります。ここに衷心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

信大茂菅農業義塾（2年目）

プラザ長 肥野沙也加（野外教育専攻4年）

○学生協カスタッフ

信大茂菅ふるさと農場スタッフ 松澤 希（社会科学教育4年）

○参加者

小野塚敏枝さん（ふるさと農場への参加、小豆の栽培など）

塩入幸夫さん（とうもろこし・枝豆の栽培）

橋本政晴先生ご家族（ふるさと農場への参加、ポップコーンの栽培など）

○連携団体 信大茂菅ふるさと農場

○協 力

長野市茂菅地区農家 林部信造さん

長野市農業公社

長野県中央児童相談所 宮澤秀一さん（広報協力）

長野県社会福祉協議会 植山周香さん（広報協力）

○プラザの概要

1. 不登校で悩んでいる子どもと親御さん、地域の方々、学生が農業を通して交流し、お互いの背景を活かしながら温かい居場所をつくる。
2. 土と触れ合うことによって自然とのつながりに気づき、生きることへの意欲や喜びを感じる。

不登校で悩んでいる子どもの参加を想定して、活動日を定めずに活動を行った昨年とは形式を変え、月に一回の活動日を設け、参加者が顔を合わせて交流できる環境を作り出せるよう努力した（下表参照）。内容も見直し、農業ばかりでなく、子どもが楽しめるようなプログラムを取り入れた年間計画を立てた。

月 日	時 間	内 容 (予定)
5月23日 (日)	午前9時30分～正午	畑配分 さつまいも苗植え
6月27日 (日)	午前9時30分～正午	畑作業
7月25日 (日)	午前9時30分～午後4時	旭山トレッキング
8月29日 (日)	午前9時30分～午後2時	川辺で水遊び 野外クッキング
9月19日 (日)	午前9時30分～正午	畑作業 キャンドル作り
10月24日 (日)	午前9時30分～午前11時	さつまいも収穫
10月31日 (日)	午前9時30分～午後1時	やきいも 卵ポプリ作り
11月28日 (日)	午前9時30分～正午	草木染め
12月19日 (日)	午前9時30分～午後1時	さよならパーティー

しかしながら本年度も、不登校で悩んでいる子どもを畑に迎えることはできなかった。参加人数が少ないことや、参加者それぞれの活動状況を踏まえ、途中から年間計画を変更し、各々の農作業を中心にして活動を行っていくこととした。その中で、10月のやきいもと12月の最後の活動（信大茂菅ふるさと農場と共同）では、参加者同士が対話し、交流を深めながら活動をすることができた貴重な回であった。

◇実践から得た「臨床の知」

理想と現実の間で感じたこと

肥野沙也加（野外教育専攻4年）

「信大茂菅農業義塾」という可能性ある活動を中心となって動かすチャンスをいただき、早2年が経とうとしています。実体験と知識の結びつかない子どもが増えていること、人とのつながりを持っていない子どもが増えていること、そして長野市だけでも約900人の子どもたちが不登校で悩んでいること。このような現実を、微々たる歩みではあれど、何とか変えていきたいという思いだけでこの活動を始めました。しかし、思いだけで状況を変えられないのが現実で、この2年間、理想と現実とをどう重ね合わせていくか無知なままに当たっては砕け、また当たっては砕け…という流れを繰り返してきました。

一昨年のYOU遊フェスティバルにおいて、土井先生と当時心理カウンセリング課程の大学院生だった飯村昌史さんが、不登校で悩む子どもを持つ親御さんや不登校問題に関心を持つ様々な立場の方と対話する機会を持たれ、「不登校で悩んでいる子どもの力になりたい」「農業と子どもをつなげたい」「農業の良さを自分が学ぶだけではなく、人に伝えたい」などの思いが共有され、信大茂菅農業義塾が開設されることとなりました。不登校で悩んでいる子どもが土と触れ合うこと、地域の方と支え合うこと、また、定年退職されたご年配者が子どもと関わることがどんなに深い意味を持つことか、きっと多くの方が共感して下さることでしょう。私も強く共感したからこそ、プラザ長になりました。しかし、それがどんなに良いことか理解できていても、その理想に対してどう事を運んでいけば良いかという過程は、なかなか形づくられてこないものでした。

「学校に行きたくても行けず家から出られない子どもが、どう心変わりして知らない人のところへ行くの？」

「農業に興味のない子どもを、どうやって土に向かわせるの？農業をしたら子どもが変わるってどこまで言えるの？」

「茂菅なんて遠い場所へどうやって行くの？保護者は忙しいのに誰が送り迎えするの？あなたは車を出せるの？責任はとれるの？」

「あなたの自己満足の計画なんじゃないの？」

課題は山積みでした。それまで不登校という問題について専門的に勉強したことはなく、地域の人とのつながりもあまりなかった私にとっては当然の状況であり、「甘かった」この一言に尽きると思います。不登校問題に関わる方のお話を伺ったり、広報依頼をする中で時に叱られ、相手にしてもらえないこともあり、自分の無力さや考えの甘さに気付かされました。また、信大農業義塾開設の際にご後援をいただいていた長野県教育委員会・長野市教育委員会とのつながりは私の働きかけが至らなかったために途絶えてしまいました。これに関しては、土井先生や飯村さんにも申し訳ない気持ちでなりません。

悩んだ末に私が唯一行動できたことは、メンタルフレンドになり、不登校で悩んでいる子どもがどんな気持ちで、どんな生活を送っているのかを身をもって知ることでした。メンタルフレンドとは、不登校で悩む子どもにとってお兄さんやお姉さん、またおじいさんやおばあさんの年齢にあたる人が、子どもの話し相手・遊び相手として児童相談所から派遣されるものです。畑と直接は結び付かなくとも、不登校で悩む子どもがどんな気持ちであるかを知ることは、今

の私にとっても、そして信大茂菅農業義塾という活動にも、どうしても必要なことだと感じました。調整に少し時間はかかりましたが、2010年7月から月に数回、私はメンタルフレンドとして上田市に住むK君と関わってきました。学校に行こうとするけれど行けない苦悩と闘うK君と、先の見えない不安に駆られながらも不登校問題を必死に勉強してK君を支えているご家族。K君とご家族との関わりを通して、私はやっと不登校で悩む子どもや保護者の皆さんがどのような気持ちで日々を送っているのか、どのような援助を必要としているのかを少しつかめてきたような気がします。明確になったことは、信大茂菅農業義塾へ子どもに来てもらうためには、子どもと私との間に信頼関係がなくてはならないということです。全国的に見ても、不登校で悩んでいる子どもが農村学校等で暮らし、学ぶことで学校に行けるようになった事例は多くありますが、それらのスタートには必ず強制力があります。信頼関係も何もない人々の元へ、不登校で悩む子どもが入っていかねばならないのです。それを可能にするためには、絶対的な信頼と責任、また実績や援助などが主催側に必要です。しかし、今の信大茂菅農業義塾にはそれがありません。故に、いきなり不登校で悩む子どもを連れてきて「さあやみましょう！」という具合にはいかないのです。信大茂菅農業義塾を続けるにあたり、責任の所在も保護者や援助団体との信頼関係も固められない現状では、子どもだけでなく参加者を集めること自体もとても難しいのだと痛感しました。

このような現状課題を抱えながらも、地域の方のご参加のもと、信大茂菅農業義塾は何とか活動を続けてきました。一年目は5組の皆さんが参加されましたが、今年は3組の皆さんの参加でした。一年目から活動を引っ張って下さった小野塚敏枝さんには、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。信大茂菅ふるさと農場の活動に参加された時には、小さいお子さんのお子守をして下さったり、また信大茂菅農業義塾の畑で栽培された小豆であんこを提供して下さったり、大活躍をされました。また、2年目に1年目よりも量を多くして小豆を栽培された際、「一気に収穫するのではなく、その鞘の状態に合わせて少しずつ収穫できるから無理なくて良いのよね」とお話をされていたことが印象に残っています。一つの作物の栽培から見えてくる、自然のサイクルの素晴らしさとそれに合わせて無理なく生活することの大切さを実感した出来事でした。小野塚さんは、この2年間で私に数十通のお手紙やはがきを下さいました。手書きの温かみや私自身や信大茂菅農業義塾のことを気にかけて下さっている小野塚さんの心のやさしさに、頭が下がる思いでした。手書きのメッセージには、メールや電話では伝わらない何かがあります。私がこの2年間、あきらめずに信大茂菅農業義塾の活動を続けられたのは、小野塚さんの心遣いのおかげなのだと思います。

また、橋本先生ご家族には、他のお子さんの参加がない中、娘さんには辛い思いをさせてしまったことありましたが、それでも年間を通して活動に参加して下さいましたことに、本当に感謝しております。

2年間、信大茂菅農業義塾をやらせていただいた経験をもとに、今後の信大茂菅農業義塾の展望を次のように考えました。

【信大茂菅農業義塾 今後の見通し】

- ・信大茂菅ふるさと農場のスタッフまたは「YOU 遊世間」の長に事務局を務めていただきたい。
- ・畑は、不登校で悩む子どもに限定せず、地域の方ならどなたでも、使えるようにする。
- ・一人一畝の畑を持つことは変えず、その畝や周辺の草取りなどを各自で責任をもってやっていただく。
- ・信大茂菅農業義塾の参加者には、信大茂菅ふるさと農場への参加をお願いし、子どもと地域の人々の交流の機会にさせていただく。

決して不登校で悩む子どもの参加をあきらめるわけではありません。しかし、不登校で悩む子どもの参加にばかり執着していると、私の2年間を繰り返してしまいます。まずは土台作りとして、地域の方が気軽に使える共同畑としての機能を高めたいのです。

2年間の機会を無駄にしてしまったとは思いませんが、これで卒業するのがとても悔しいです。この状況を、もっと変えたかったというのが正直なところです。3年の松井遥さんには、引き継ぎを申し出てもらったにも関わらず、「このまま放りだしちゃいけない」という私のわがままで、その気持ちをきちんと受け止めてつなげられず、申し訳ない気持ちでいっぱいです。ごめんなさい。また、土井先生には、思うように活動を進められず、大変なご迷惑をおかけしたことを心から申し訳なく思います。

一から事を始めるということは、想像を絶する難しさがありました。そして理想を掲げるだけでは、希望は持てても決して解決にはつながらないという現実の厳しさを学びました。理想と現実をつなぎとめる「何か」は、この2年間でははっきりとはわかりませんでした。きっと一つには継続することが挙げられるのでしょうか。そして信頼関係をつくること、互いに必要とし合うこと。これを思うと、「YOU 遊世間」の様々な活動が、本当に素晴らしく、貴重なもので、今継続されていることが当然なのではなく努力や協力の賜物なのだということをしみじみ感じます。このような活動の一員となれたことに深く感謝し、「YOU 遊世間」の今後の発展に期待したいと思います。ありがとうございました。

◇参加者の声

アナログの知 ～茂菅農業義塾という経験～

橋本政晴（信州大学教育学部講師）

十数年前から、有機農業の里・山形県高島町のとある農家で、田植えと稲刈りをお手伝いさせていただいている。そこに行くまでは、有機農業といえば、雑草を除去し、害虫から植物を守るために大量の農薬を使用してきた、いわゆる近代農法への反省から、有機化学を用いた農法のことだと思っていた。しかし、お世話になっている農家の方々の取り組みは、そのような有機化学といった「科学的な知」とは無縁だった。天候、土、水、生き物との〈無言の対話〉をしながら、土を耕し、水を与え、雑草をとるといって、至極当たり前のように感じるものだった。こうした農法は、だからといってどこの田畑でも普遍的に行えるものではない。その土地にある気候、土、水、生き物との絶えざる対話のもとに行われているものなのだ。

この農家からいただいてきた「ポップコーン用のトウモロコシ」を育てることを、今年の茂

菅農業義塾でのメイン活動として位置づけた。手始めに、土を耕してみたのだが、ミミズやカナブンの幼虫がわんさか出てきて、改めてこの土の豊かさを実感した。そう、ミミズも幼虫もない土では、植物は育ちにくいと感じたのである。鍬で傷つけてしまったミミズや幼虫たちに悪かったなあと思いながら、「土を耕す」というたったそれだけでも、その土と対話していたように思う。普通のトウモロコシと交配しないようにと、先の農家の方から助言をいただいていたので、植える時期を少し遅らせる予定だったのだが、この猛暑でついつい畑から足が遠のき、8月末に、ようやく種を土へ蒔いた。また、毎日出来ないのなら水は与えないようにとの助言のもと、長引く残暑の中、数度しか水やりは行わなかった。それでもポップコーン用のトウモロコシは立派に成長し、9月下旬には実をつけてくれた。ただ、予想に反して猛暑は続いてくれたのだが、やはり成長はそこまでで、農家からいただいたものとは粒の大きさも半分以下で、形も「これってトウモロコシ」と思ってしまう程のものとなった。そう、やはりトウモロコシは暑い夏だからこそ育つものなのだ。

収穫したトウモロコシは、家のベランダにぶら下げ、乾燥させることにした。その間、畑のわきで行われた、ささやかな焼き芋パーティーに参加させていただいた。もうお一人の参加者の方が育ててくれたサツマイモを、塾長が焼き芋にしてくれたのである。焚火にあたりながら、話はつきず、ついつい長居をしてしまった。ささやかではあるが、塾長の思いが込められた、あったかい焼き芋パーティーだった。

農業に限らず学校教育でも現在、デジタル化された知が横行している。学力や体力は数値化され、それに対応した教育が求められ、その効果を向上させるべく位置づけられている。このデジタルな知は、確かにわかりやすい。その全てが数値化され、全国平均、都道府県ごとの平均が目安として示すことが容易だからだ。ただ、そのデジタルな知に納まりきらないアナログな知があるのもまた事実ではないだろうか。「この子は体力あるなあ」とか、「この子は物事がよくわかっているなあ」といった実感は、けっして数値化することの出来ないアナログな知として、私たちは経験しているからだ。土を耕した時のミミズや幼虫との出会い。厳しく続いた残暑であっても育たないトウモロコシ。どれもが私にとって、「アナログな知」として経験された。それこそが菅農業義塾の面白さなのだと思う。

あっぷるず (11年目)

リーダー 飯島理沙 (理数科学教育専攻4年)

○学生スタッフ名

飯島 理沙 (理4)	宮尾 亘 (実4)	布山 朋和 (実4)	藤田 裕介 (社4)
鈴木 祐香 (理4)	中村 恵理 (芸4)	高池 亮輔 (保4)	田澤 岳哉 (理3)
土屋 克明 (理3)	松井 遥 (理3)	峯村 和裕 (理3)	三石 梨沙 (理3)
大井 香里 (芸3)	井出 愛香 (実2)	町田 香帆 (実2)	北沢 瑞樹 (理2)

○参加者数 地域協力者2名 学生16名

○連携団体 地域協力者：林部信造・幸子ご夫妻

○「あっぷるず」とは…

一言で言うと、「林部さんちの農業のお手伝いをする活動」です。私たち信州大学教育学部の学生は、「YOU 遊世間」の「信大茂菅ふるさと農場」や「信大茂菅農業義塾」の活動や、小学校免許を取るために必要な「生活科指導法基礎」の授業で林部さんにとってもお世話になっています。私たちがやりたいことをやりたいようにできるように場を整え、相談に乗り、支えてくださっている林部さん。いつも私たちの活動の力になってくださる林部さんになにか恩返しをしたい…そんな気持ちから林部さんちのりんごや稲の農作物の手伝い、その他にもいろいろ、お手伝いさせていただくようになりました。

○「あっぷるず」の仕組み

林部さんのお手伝いをする。これをモットーとして活動するのが「あっぷるず」である。ただ、この「お手伝い」というのが、じつに幅広い。「あっぷるず」というプラザ名からもわかるとおり、基本的には、林部さんの所有するりんご畑で活動する。しかし、あるときは檀田地区にある田んぼで活動し、またあるときは庭で池掃除をする。先に挙げたモットーに則っていれば何でもしてしまうのが「あっぷるず」なのである。

近年は、「信大茂菅ふるさと農場」で農場長を務めた学生が、翌年「あっぷるず」の長を務めるというスタイルが定着している。活動日は、林部さんと連絡を取り合っておよそ1か月単位で決めていく。学生は、授業との兼ね合いやスケジュールを考慮して、自分のあいている時に好きなだけ参加する。参加者は学生のみである。

ここで、Aさんのある日の「あっぷるず」の活動日程を紹介します。

9:00 林部さんのお宅に到着「おはようございまーす!!」

9:00~10:00 珈琲やお茶をいただき林部ご夫妻とお話をする♪

10:00 お手伝い開始

12:30 林部さん特製の昼食とお話

○年間活動内容

<りんご>

4・5月	… 花摘み (摘花)
6月	… 摘果・支柱立て
10月	… 葉摘み
11月	… 玉回し
11・12月	… 収穫

<お米>

4/29 (木)	… すじまき
5/29 (土)	… 田植え
7/28 (水)	… 網はり
9/20 (月)・21 (火)	… 稲刈り
10/11 (月)	… 脱穀

後輩に伝えたい「あっぷるず」

飯島理沙（理数科学教育専攻4年）

私は、2年生の2月に「あっぷるず」の活動に初めて参加させていただきました。当時の4年生の先輩が誘ってくれたのがきっかけでした。活動内容は、「りんごジュース作り」。このとき感じたのは、先輩と林部さんご夫妻のやりとりのあたたかさ、林部さんの全てを包み込んでくれるような人柄、そして先輩や林部さんご夫妻とともに活動できる楽しさでした。またこうやって林部さんとたくさんの時間を過ごしたい、そう思いました。

今年「あっぷるず」の活動に初めて参加してくれた人も、引き続き参加してくれている人も、それぞれ活動にきた「きっかけ」があると思います。そして、その中で感じていることが人それぞれあるのではないかと思います。そんなことをメールで聞いてみました。

※以下、スタッフからのメールを原文のまま引用しています。

※順番は、前記の学生スタッフ名の順番によります。ただし、返信があったスタッフの者のみの掲載です。

<質問項目>

- ① 「あっぷるず」の活動に参加したきっかけ
- ② 参加して感じていること（ここがいいな！や、改善する点など）

◆宮尾 亘 ① 友達に誘われて、ずっと参加したいと思っていたけど、なかなか参加できなかった。初めて参加できました。

② 林部さんは優しく、なんだか安心して活動させていただきました。わずか、一回しか行けなかったのですが、また帰ってきたい、そんな場所です。

◆布山朋和 ① 「あっぷるず」には昨年度から参加しています。今年も飯島さんに誘っていただき、参加しました。

② 農業を学べることはもちろん、そのなかに幾つもの生活の知恵があることを教えていただき、ただただ驚きが多かったです。多くの学生が「あっぷるず」の活動に参加するほど、良い活動になるのではないのでしょうか。

林部さんご夫妻の存在がかけがえのないものだとは強く感じます。思っている方もいると思いますが、まさに『第2のふるさと』です。林部さんご夫妻を『おとうさん、おかあさん』と呼び、様々なお話をお聞きしたり、こちらの悩み事を相談したりと、学生にとって必要な居場所だと思います。

林部さんと会話することで、私たちは知らない、卒業した先輩方のお話を聞いたり、自分のやりたいことを打ち明けたり、この「あっぷるず」の活動によって得ること、それに伴い新たに挑戦してみようと思うことにつながった人もいると思います。活動に参加するかどうかは最終的に自分の意思ですが、私は参加して気づかないうちに学んでいたんだなと感じます。

◆藤田裕介 ① 先輩に誘われたのが始まりですね。茂菅に関わっていく中で行く機会は増えました。

- ② 学生同士仲良くなれること、りんごの事をよく知ることができる。迎えてくれるお父さんお母さんが優しいこと。
- ◆鈴木祐香 ① 茂菅の副農場長をやらせてもらうことがきまり、林部ご夫妻に出逢ったことが「あっぷるず」に参加したきっかけです。
- ② なんとと言っても林部ご夫妻と一緒に活動させてもらうことで、お父さんお母さんの魅力や人の温かさを肌で感じることができること。いろんな話をさせていただいたり、お母さんの美味しいご飯や珈琲をいただいたり、癒やしの場所です。人とのつながりを本当に大切にしているお父さんお母さんだからこそ、また学生をいつでも温かく迎え入れてくださるからこそ、行きたいと思えるそんな場所です。お父さんお母さんの人柄の魅力が「あっぷるずの魅力そのもの!!」だと思います。
- ◆高池亮輔 ① 飯島さんに誘われたから。去年から参加して活動以外でも楽しくゆっくりした時間が過ごせるから。
- ② 学生同士でワイワイやりながらできる。リンゴ作りとか普段できない経験ができる。おいしいご飯をいただきながら林部さんたちのお話が聞ける。
- 改善点 → 一人だと行くのちゅうちょしちゃう。
- ◆田澤岳哉 ① いつもモスゲの活動を支えて下さっている林部ご夫妻の力になれたらと思います。
- ② 林部家はとても温かい雰囲気です。初めて長野に引越してきたときに不安がいっぱいでした。そんな中、林部さんのお家に行くといつも優しく接していただいて、長野にも自分の居場所があるんだと感じることができました。地域との触れ合いのよさをかみしめています。
- ◆土屋克明 ① 私は一年生の時に「YOU 遊フェスティバル」で初めて、「YOU 遊世間」に関わりました。このときに参加した講座の代表だった先輩が茂菅と繋がりが深かったことから、「あっぷるず」に参加するようになりました。魅力的な先輩の勧誘だったので、断る理由もなくどんどん「あっぷるず」の魅力に引き込まれていきました。つながりがまた新たなつながりになってとても嬉しかったです。
- ② 今年は忙しくてなかなかお手伝いできなくて申し訳なかったです。しかし、数少ない中でも林部さん御夫妻と仲間と一緒に活動する中で、再びつながることの素晴らしさや大切さを実感しました。みんな互いに支えられて、生きていけるのだと思います。つながりがまた新たなつながりを作っていくので、来年はもっと自分も勧誘していきたいと思います。一年間ありがとうございました。
- ◆峯村和裕 ① 去年も参加してとても楽しかったのでまた参加しました。
- ② 先輩や地域の方とゆったりとした時間の中で色々な話ができることが魅力だと思います。今年はあまり「あっぷるず」で後輩と関わる機会が少なく、もっと後輩に声をかけて一緒に活動ができれば良かったです。
- ◆三石梨沙 ① 茂菅の農場長をやらせていただき、林部さんにたくさんお世話になっているので、少しでも何か恩返しができるか…と思ったから。また、茂菅に関わることで林部さんご夫婦の魅力を知って、もっともっと仲良くさせていただきたいと感じたから。
- ② 最初は恩返しのつもりで『行かなきゃ』と思って参加していたが、だんだん自分から参加したいと感じるようになるくらい、素敵な活動だと思います。「あっぷるず」に参加して、りんごや米の栽培についてお手伝いしました。しかしそれだけではなく、茂菅の活動だけで

はできないような地域の方との温かい関わりをもつことができます。その他にも多くのことを学ばせていただくことができますので、ぜひ「あっぷるず」の活動に参加してたくさんの魅力を探して欲しいです。

◆井出愛香 ① 昨年、プラザ長だった宮川先輩に誘っていただいた。その時に林部さんの温かさや農作業のお手伝いを楽しさを感じ、今年も参加したいと思ったからです。

② 長野ならではのリンゴのお手伝いができること。林部さん、学生同士で様々な話をする機会を得ることができること。また茂菅地区の方々とも関わらせていただき、大学の講義では学べない事がたくさん学べました。

◆町田香帆 ① 茂菅でお世話になっている林部さんのお手伝いをするとう聞き、ぜひ参加したいと思ったからです。

② 林部さんの話を聞くことで、自分の幅も広がりますし、なかなか経験できない農業も経験できるところが魅力的です。

◆北沢瑞樹 ① いろいろな活動に参加してみようと思っていたときに友達に誘われ興味を持ったから。

② お父さんやお母さんと話すことで自分の考えを見直したり、新しい発見がある。

このアンケートの回答を読み、やはり私たちが「あっぷるず」の活動に参加するきっかけは、「誰かに誘ってもらった」ということが大きいなと感じました。その中でも、「先輩」に誘ってもらったという人が多く、この活動を通して、先輩から後輩のつながりを見ることができると思いました。先輩に誘われて、参加して、また後輩を誘っていく…。とても素晴らしいサイクルです。この活動の魅力は、参加してくれた人が感じて書いてくれてある通りです。私たち学生は、林部さんご夫妻のことを、お父さん・お母さんと呼びます。それは、この活動を通して、林部さんご夫妻の温かさに触れることができ、お父さん・お母さんのような愛情を私たちに注いでくださっているからです。林部さんご夫妻は、永遠に私たち学生の長野のお父さん・お母さんです。

大学生になって、地域の方とこんなに密接に関わって、仲間とともに農作業をして、汗を流して、おいしいご飯とおいしいお菓子とおいしい珈琲に包まれた1日を送ることはそうはできないのではないかと思います。この環境を整えてくださっている林部さんご夫妻には、心から感謝申し上げたいと思います。私は、大学生になって、こんな日々を送ることができるなんて思ってもみませんでした。だけど、今では「あっぷるず」がない大学生活は考えられないくらい私の中で大切な時間になっています。こんな素晴らしい時間を過ごすことができる「あっぷるず」…。ぜひ、後輩のみなさんにも参加して行ってほしいと願っています。

湯谷子どもランド（9年目）

プラザ長 高見澤誠（理数科学教育専攻3年）

副プラザ長 腰原綾佳（理数科学教育専攻3年）

○学生スタッフ名

高池 亮輔（保4）	早川 和宏（理4）	服部 直幸（理3）	金箱 仁志（理3）
片原 範子（数3）	三石 梨沙（理3）	峯村 和裕（理3）	松井 遥（数3）
大井このみ（数3）	鈴木喜多朗（理2）	勝海 公平（社2）	佐原 啓太（社2）
有井 達哉（数2）	高橋 涼介（理2）	山口 千晴（理2）	山崎 遼（理2）
小谷 竜平（理2）	原科 勇希（理2）	植崎 亮人（数2）	土井 翔太（数2）
松原 寮（数2）	佐塚 大悟（生2）	田中 裕章（生2）	田中いずみ（生2）
伊藤悠紀子（生2）	中沢 洋平（社2）	藤橋 美月（生2）	

○県短スタッフ名

岡澤 沙季	木村 彩乃	山口 葉月	相河 愛	熊谷 未希	小林 佳奈
佐久由姫美	佐藤 梓	土井 嘉穂	長屋ちひろ	根石ゆり恵	野池 成子
藤沢かおり	降旗実貴子	本間瀬里奈	渡辺 準子	雨宮 美紀	石井 怜
石関 史佳	岩下ひとみ	岩波 佑果	大久保美咲	大沢 文香	岡 花奈
岡崎 早香	小澤 千草	刈間 彩夏	窪田 博子	栗林 朋子	小澤 早枝
下平 綾音	高田 真衣	高野 志帆	高野 眞里	武井 琴音	武田 由佳
谷村 梨江	常田 実里	戸島 耀平	中澤奈緒美	仲村 美沙	中村 里穂
花村ちひろ	馬場真奈実	細川 瑛李	本藤はづき	丸山 愛子	皆川 みく
宮崎 里紗	百瀬亜由美	百瀬 幸	山川 賢志	芳川 愛子	吉田 仁美
渡邊 祥子					

○参加者数 子ども 48名 保護者 40名

○連携団体

湯谷子どもランド 湯谷子どもランド保護者会 湯谷小学校 教職員 長野県短期大学

○プラザの概要

「湯谷子どもランド」は、小学校が週5日制になったことをきっかけに、〈土曜日の午前中の子どもたちの居場所を作る〉という思いから始まり、湯谷小学校の1年生から6年生の子どもたちとその保護者、信州大学の学生と長野県短期大学の学生が連携して活動を行っている団体です。

活動の回数は月に1、2回で、主に土曜日の午前中の時間に、湯谷小学校の体育館や檀田地区センターを利用させていただいて、活動をしてきました。湯谷子どもランドの特徴は、子ども・保護者・学生が一緒になって活動を作り上げるというところにあります。湯谷子どもランドでは、以下のような目標を掲げて活動しています。

子どもたちが異学年・異年齢の集団の中で友達や学生、保護者との関わりを通じて、集団の中で自分を豊かに表現する力や人と関わるためのコミュニケーション能力、異世代の存在する社会で強く生きるための社会力の形成・向上を目指すとともに、子ども・学生・保護者の三者間、または子ども・学生・保護者の交流を深め合い、互いを信頼して活動を築いていくこと。

この目標のもと、学生と子どもとの活動だけでなく、学生と保護者間の意見交換の場として、活動の後に学生・保護者交流会を数回行い、お互いの立場での悩みや考えを話し合う場を設け、学生と保護者が協力して湯谷小子どもランドをより良いものにしようという思いを持ちながら、一年間活動をさせていただきました。

○一年間の活動

今年も 48 人の子どもたちと保護者の皆様のご協力により一年間活動することができました。以下、一年間の活動をまとめたものです。

日 程	内 容	場 所
5月15日	アイスブレイク&名札作り	檀田地区センター
5月29日	ミニ運動会	湯谷小学校 体育館 (午後)
6月19日	キャンプ直前企画	檀田地区センター
7月10・11日	夏キャンプ	妙高青少年自然の家
7月31日、8月1日	宿題&夏休みお楽しみ企画	檀田地区センター
8月7日	野外炊飯	小布施ハイウェイ・オアシス
9月18日	釣り&バーベキュー	フィッシングセンター北川遊魚
10月9日	〇〇〇ボール大会	湯谷小学校 体育館 (午後)
11月13日	登山	地附山公園
12月18日	クリスマス企画	檀田地区センター
1月15日	お正月お楽しみ会	檀田地区センター
2月5日	節分企画	檀田地区センター
3月5日	わくわく企画	檀田地区センター

○活動内容

「湯谷小子どもランド」での子どもたち

高見澤誠 (理数科学教育専攻3年)

一年間の活動の中で、私たち学生スタッフは「子どもたちに楽しんでもらい、笑顔のあふれる湯谷小子どもランドを共に作り上げる」ということを大事にしながら企画・活動してきました。私たちが一年間大事にしてきたことがどれだけ実現できたのか、子ども・学生・保護者の三者が連携しながら活動することができたのか、今年の活動をいくつか取り上げて、子どもたちの様子や感想、学生の感想を踏まえながら一年間の活動を振り返りたいと思います。

1. 活動例：クリスマス企画 (2010年12月18日)

この活動では、子どもと学生とで一緒にクリスマスケーキを作ってみんなで食べました。まずは班ごとにどんなケーキを作りたいか、材料は何が必要かを話し合い、その後それぞれがお金を持って自分たちで西友に買い物に行って、つくりたいケーキに必要な材料を買います。檀

田地区センターに戻ってきたところからケーキ作りを始めました。学生は子どもたちの班に入って子どもたちと一緒にケーキ作りをしました。保護者さんは保護者さんチームという形で活動に参加していただきました。子どもと学生の班が6班、保護者さんチームが1班でした。

○当日の活動の流れ

- 7:50 信大生 しなのき会館前に集合
- 8:15 信大生・県短生 檀田地区センター到着
- 8:20～ 最終打ち合わせ、準備
- 8:40 子どもたちの受付開始
- 9:00 始めの会（活動内容、注意事項の説明・確認）
- 9:15～ ケーキ作りの話し合い（班ごと）
- 9:40 買い物に出発
- 10:00 ケーキ作り開始
- 11:00 全体で「いただきます」
食べている間に学生からクリスマスカードのプレゼント
- 11:30 全体で「ごちそうさま」・片付け
- 11:45 リフレクションシート記入
- 12:00 終わりの会
- 12:10 あいさつ、解散

○子どもたちの感想

- ・僕の思ったケーキが作れてよかった。
- ・スポンジを半分にして、普通のクリームとチョコのクリームで二つのケーキを作った。とってもおいしくできた。
- ・サンタさんの人形を買ってきてケーキの上にのせた。すごいクリスマスみたいになってよかった。
- ・いちごとかりんごとかもをいっぱい中に入れた。なんか食べづらかったけどおいしくできてよかった。
- ・ケーキがおいしかった。クリスマスカードがとってもかわいくてうれしかった。

子どもたちが毎年楽しみにしてくれているのが、このクリスマス企画です。子どもたちは自分で使いたい材料を持ってきたり、普段は周りに関わろうとしない子が進んでリーダーシップを取っていたりしていて、みんなで協力しながら一つのケーキを作り上げていく姿が見られました。子どもたちの感想からも自分たちの思い通りのケーキが作りたい、おいしいケーキを作って食べたい、という意識や願いが読み取れます。

○学生の感想

- ・子どもたちが自分たちで話し合いながらみんなが納得できるように工夫をしたり、決まった予算でどのように材料をそろえるか話しあっている姿が見られた。普段の活動では引っ込み思案になっている子どもが積極的に参加していて感動した。
- ・包丁で指を切ってしまう子どもがいた。周りの学生が「危ない！だめ！」と注意していたにもかかわらず起きてしまった。子どもたちはただ「危ない」とか「だめ」といってもダメなんだと思った。何が危ないのか、なぜ危ないのかをしっかりと伝えないといけないと感じた。二度とけがをする子どもが出ないように学生の間でも注意していくことが大切だと思う。

以上の感想のように、学生も子どもとともに楽しみながら活動をしており、さらに活動の中での子どもの姿から多くのことを学びとっています。今年はそういった学生の意見や感想を共有することを目的として、活動後に学生の間でのリフレクションや話し合い、意見交換の場を積極的に設けました。

今年の湯谷子どもランドには信州大学からも長野県短期大学からも、とても多くの学生スタッフが参加してくれました。その一人一人が子どもが大好きで、子どもたちと楽しい活動を作り上げていきたいという思いを持っていました。そこで、今年一年を通しての軸として、「一人一人がしっかりと参加できるかたちを目指す」、「県短との連携を強化し、企画の段階から参加してもらおう」という2点を意識して企画・活動を行ってきました。せっかく多くの学生がそれぞれの経験や思いを持って参加してくれているのだから、それを活かそうと考えたからです。その結果、多くの学生が活動の後に「楽しかった」というだけでなく「もっとこうするべきだった」、「次はこうしてみよう」というような課題を持って取り組むことができました。これにより、一回一回活動を重ねるごとに活動が生き生きとしていきました。

2. 活動例：湯谷子どもランド 夏キャンプ（2010年7月10・11日）

湯谷子どもランドの一番のイベントである「湯谷子どもランド 夏キャンプ」は、毎年、信州大学の2年生と長野県短期大学の1年生がすべて一から企画して運営しています。今年は理数科学教育専攻2年生の鈴木喜多朗君がキャンプ長、社会科学教育専攻2年生の勝海公平君が副キャンプ長としてこのキャンプを企画してくれました。以下は、キャンプ長のまとめです。

○湯谷キャンプのまとめ

2010年7月10・11日の二日間、新潟県の妙高青少年自然の家にて、「湯谷子どもランドキャンプ」が行われました。参加者は、子ども44名、保護者24名、学生スタッフ45名の計113名でした。班は全部で8班作り、構成は、子どもと学生スタッフ合わせて10～11人くらいになるようにしました。なるべく他学年の子たちと交流できるように工夫して班を作りました。

〈一日目〉 先発隊は朝7時に現地に着き、各係ごとに準備を始めました。主にしたことは、カラフルトレジャーの準備、開会式の装飾、打ち合わせ、劇の最終確認、受付の準備などでした。10時ごろから子どもたち、保護者さんたちが集まり始めました。

全員集まったところで11時から開会式を行いました。内容としては、簡単なあいさつ、テーマの発表、施設の方からの注意事項、今回のキャンプのテーマと七夕にちなんだ導入の劇をしました。そのあと、班の子どもたちが打ち解けられるよう、アイスブレイクをいくつか行いました。その後、12時くらいから班ごとに外で昼食をとり、遊ぶ時間を設けました。

13時から集いの広場に集合してカラフルトレジャー（課題解決ハイキング）が始まりました。オリエンテーリングコースに様々な課題（ミニゲームや謎解きなど）が設けてあり、制限時間内でいくつ回るができるかというものでした。保護者さんや先輩方、学生スタッフに課題のポイントに立ってもらい、ミニゲームなどを行いました。

16時過ぎに終了し、各班記念撮影をし、小休憩。休憩後17時過ぎから夕食。この間にキャンプファイヤー係と保護者さんのお父さん方にキャンプファイヤーの準備をしていただきました。

18時半からキャンプファイヤー開始。内容はカラフルトレジャーの表彰、キャンプファイ

ヤーでの注意、ゲーム（猛獣狩り、整列ゲーム、じゃんけん列車）、ダンス（マイムマイム）でした。

希望者のみ 20 時から肝試し。それ以外は先にお風呂に入ってゲームなどをしたり早めに就寝したりしました。

21 時～入浴。

22 時就寝。23 時ごろから学生のミーティング、翌日の準備、賞状の作成。

〈二日目〉 朝 6 時に起床、身支度をして 6 時半から集いの広場で子どもランドの朝の集い。続いて 7 時から施設全体での朝の集い（宿泊グループの紹介やラジオ体操）。

その後 8 時までには朝食をとり、部屋に戻って清掃と荷物の移動。学生と保護者さんで各部屋をチェックし、退室。

9 時から源流探検、クラフト開始。班を半分に分けて、先に源流探検をした班は 10 時半からクラフト、先にクラフトをした班は 10 時半から源流探検という風に分けた。クラフトは無地の白い T シャツに葉っぱなどに絵具をぬって、押し絵のようにして好きなように色をつけていくというものだった。源流探検は各チェックポイントを回りながら協力して沢を登っていくというものであった。

13 時半ごろからフィナーレ開始。内容は劇、キャンプでの写真をスライドにして上映、全員で最後のあいさつ、リフレクションの記入。

屋外に出て全員で記念撮影。その後清掃、片付け。子どもたちが帰る時は全員全力でダッシュして車を追いかける。

15 時過ぎ解散。

○キャンプでの子どもたちの様子

〈開会式〉 「とっても楽しみ！」と言ってくれる子もいましたが、まだ始まったばかりで緊張もあるのか、まったくしゃべらない子や、「この班いやだ！」や、「小さい子たちの面倒なんて見たくない」と言っている子なども見受けられました。しかし、アイスブレイクや一緒にお昼ごはんを食べるうちに、だんだんと子どもたちの距離が縮まってきたと感じました。

〈カラフルトレジャー〉 高学年の子どもたちがリーダーシップを発揮し、班を引っ張ろうと必死に頑張っていました。しかし、低学年の子どもたちにはペースが速すぎ、ついて行けずに時々遅れてしまったりしました。高学年の子どもたちは、初め、「遅いぞ！もっと速く歩いて！」と低学年の子どもたちに怒ったりしていましたが、だんだんと低学年の子どもたちに合わせて歩いたり、「そろそろ休憩する？」と、時々休憩をとるようになり、全体を見渡して行動できる姿も見ることができました。

〈キャンプファイヤー〉 キャンプファイヤーでは、班とは違ったグループでの活動を行いました。初めは、新しいグループで戸惑っていた子どももいましたが、グループでのミニゲームが始まるとみんなで協力してゲームに取り組んでいる姿が見られました。みんなで火を囲み、手をつないでマイムマイムをおどり、みんなが一体となった感じでした。

〈肝試し〉 肝試しは、楽しみにしていた子どもたちが多かったようで、とても楽しんでいました。うまくグループがまとまらず、時間がかかったところもありましたが、比較的スムーズに進めることができました。子どもたちが怖がりながらもみんなでくっつきあってチェックポイントをクリアしていくことで、子どもたちの距離も縮まり達成感も味わえたようでした。

〈源流探検〉 源流探検は今年全員が参加できるように工夫したので、子どもたちは大喜び

だったようでした。なかなか周りに目をやりながら進むということができない子もいましたが、一日目と比べて周りを思いやることもでき、登るのが大変なところでは子ども同士で手を引っ張って助け合っていたり、学生が子どもを持ち上げて移動したりと、みんなで協力してゴールすることができたと思いました。

〈クラフト〉 クラフトでは、好きな葉っぱを使って好きな風アレンジして T シャツを作ることができるので、みんな思い思いの T シャツを作るために一生懸命考えて工夫していました。「この葉っぱいいな、貸して!」、「この色混ぜたらどうなるかな?」などと、助け合ったり、工夫したりする姿もあり、かなりスムーズにもすすみ、とてもよかったと思いました。

〈フィナーレ〉 フィナーレでは劇やムービーの上映などを行い、キャンプを振り返ることができ、子どもたち、保護者さん、学生、みんなに楽しんでもらえたようでした。最後に書いたリフレクションシートでは、「またキャンプしたい!」や「来年は低学年の面倒を見たい!」などと、とてもうれしい感想ばかりでした。

○キャンプ長の感想

鈴木喜多朗（理数科学教育専攻2年）

今回キャンプ長をして、たくさんのことを学び、得ることができました。一つ目は、仲間とともにキャンプを完成させたということです。キャンプの企画をほぼ初対面の人たちと一から作っていかねばならないというのは、とても不安で大変なことでした。しかし、企画を続けていくうちにだんだんとみんなが仲良くなっていき、自分の意見をぶつけ合ったりもできるようになり、キャンプの内容もよりよいものとなっていきました。保護者さん、子どもたち、先輩方、一緒に頑張ってきた仲間、みんなのおかげでキャンプが成功したんだなと実感しました。

二つ目は、子どもたち、保護者の方々がいらっしゃってこそその活動だということです。自分たちでは楽しいと思い、満足していたからといって、必ずしも子どもたち、保護者の方々が満足しているとは限らないということです。キャンプ後にある先輩から厳しいご指摘をいただき、初めて気づいたことでした。子どもたちに楽しんでもらいたいという気持ちはとても大きかったのですが、所々で、自分たちだけが楽しんでしまうような場面があったように思えます。保護者の方々の協力、そして、子どもたちの笑顔がなければ湯谷子どもランドは成り立っていないということを実感しました。

三つ目は、子どもたちの変化をみることができたということです。キャンプの初めに、「○くんと一緒にの班がいい」、「低学年の面倒なんて見たくない」などと言っている子どもがいました。しかし、キャンプの企画が進んでいくうちに、小さい子の手を引いて歩くようになったり、みんなのペースに合わせて歩けるようになったりと、大きな成長を見ることができました。キャンプの最後で、「すごく楽しかった、また来年も来るから!」、「来年はお兄さんだからもっと周りの面倒をみてあげる!」など、キャンプをとおして、子どもたちの変化をみることができたことは最高の喜びでした。

湯谷キャンプを企画して、重要だと思ったことは、人とのつながりです。子どもたちのかかわり、学生同士のコミュニケーションはもちろん、保護者さん方からサポートやアドバイスをいただいて、とてもいい活動になっていったと思います。周りの方々と協力することでこんなにも大きなことを成し遂げられるんだなと実感しました。これからも、さらには将来教師になった時にも、人と関わるということはとても重要なことだと思います。今回のキャンプではそういうこれからにつなげていける力も身につけられたのではないかと思います。保護者さん

方、先輩方、子どもたち、仲間たち、そして、こういう機会をいただいた「YOU 遊世間」に本当に感謝しています。ありがとうございました。

○副キャンプ長の感想

勝海公平（社会科学教育専攻2年）

湯谷キャンプでは、白紙の段階から2日間のキャンプを学生たちで企画するということが、企画をすることの難しさを感じた。特に、企画の中でどんなことが起こるのか想定し、そういった点について考えること。これはやってもやりすぎることではないと感じた。湯谷キャンプの企画の段階で完全な企画ができたとは思わないが、こういった活動をする際の企画を詰めるということの重要性を感じた。また、当日は子どもたちの笑顔がいっぱい見れたことが非常によかった。これまで活動してきて子どもたちが喜んでくれるということが、私たちの喜びにも繋がり本当にうれしかった。そして、湯谷キャンプで一番強く感じたのは人と人のつながりの重要性であった。子どもたち、保護者さん、学生スタッフ、協力してくれたOBのみなさんがいたからこそ、この活動というものが成り立った。そのため、このつながりを作ってくれている全ての人に感謝しなければならないと感じた。また、つながりというものはいろいろな価値観を刺激し、自身の成長の機会を与えてくれる。そういったつながりを今後も大切にしたいと感じた。湯谷キャンプに参加して本当によかった。最後にキャンプ長として引っ張ってくれた喜多朗には本当に感謝しています。

一年間を振り返って

今年は長野県短期大学との連携を重視しながら一年間の活動をしてきました。そこで、長野県短期大学の「湯谷小子どもランド」のリーダーと副リーダーの感想を紹介したいと思います。

○県短リーダーの感想

小林佳奈（長野県短期大学2年）

子どもたちのことを思い、子どもたちにとって子どもランドが楽しい場となるように活動しようということをいつも念頭におくよう心掛けながら活動してきました。

月に1、2回程の活動でしたが毎回の活動の準備期間は想像していたよりも短く、企画・準備にもっと余裕を持って臨めたらよかったのですが、活動が終わるたびに次の活動について考え動き始めても、毎回の企画・準備の時間はあまりなく、短期間の中で行わなくてはならず大変でした。しかし、子どもたちにとってより楽しい活動となるように、限られた時間の中で、出来る限りのことを精一杯子どもたちの為に行いたいと思いました。

毎回ひとつの活動が終わるたびに次の活動について考え、終えたものについての活動報告と次回の子どもランドについての連絡事項を掲載したニュースレターの配布等を行い、回次の活動についての話し合いを重ね、子どもたちに体験させたいことを考え、より子どもたちが楽しめる活動を目指し、活動の前にプレを行いました。それを繰り返しているうちにあっという間に月日が流れ、今年度の子どもランドも残すところあとわずかとなりました。そう考えるとなんだかとても寂しく、けれども、だからこそ残りの子どもランドの活動でよりよい企画を作っていけるよう子どもたちのことをたくさん考えて一層頑張りたいと思います。

昨年度子どもランドに所属していた時、企画・準備等をほぼ信大の長や副の先輩方がやってくださっていました。少人数での準備等とても大変だったと思います。そのような中で、私としては申し訳ない気持ちでいっぱいでした。準備等はすでにやってくれてあり、当日行くだけということも多かったです。県短と信大との距離も難しかったと思うのですが、県短生としても本当に手伝いたい気持ちでいっぱい、出来る限りのことを私たちも一緒に行いたいと

思っていました。そのような気持ちになったことがあったので、今年度、私が特に大事にしたいなと思ったのは、長や副となっている人だけでなく皆で子どもランドの企画・準備等をなるべく行い、皆で子どもランドを作っていきたい、行っていきたいということでした。また、信大が中心となって運営されている子どもランドですが、なるべく県短生としても共に出来る限り協力して行っていきたいという思いが私の中にありました。またそれは、他の県短生にも同様の気持ちがあったことと思います。皆、本当に子どもたちや子どもランドのことを思い、子どもランドに所属してくれています。今年度県短では、例年になく39人もの大勢の1年生が子どもランドに入ってくれました。県短の長として上手くやっていけるだろうかと不安もありましたが、子どもランドや子どもたちに興味、意欲を持ち、多くの1年生に子どもランドに入ってもらえたことはとても嬉しいことでありました。

子どもランドに所属している学生の皆は、学校の活動など他の活動で忙しい中でも本当に一生懸命準備に取り組み、熱心に子どもたちのことを考えてくれていて、優しく、とても素敵なメンバーでした。そんな皆がいてくれたから、さまざまな企画や年に一度ある県短生中心で作り上げる県短企画などを協力しながら行ってることが出来ました。湯谷小学校の子どもたち、保護者さん、信大生、県短生の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。

○県短副リーダーの感想

長屋ちひろ（長野県短期大学2年）

子どもランドに参加するようになってから2年が過ぎようとしています。2年目に入ってから、副サークル長として信大プラザ長たちと協力し合いながら1年間活動してきました。1年目の子どもランドは、信大で練られた企画に県短生が参加するという形で活動していましたが、今年度は、せっかく二つの学校で共有して活動しているのだから、企画も両方のトップが話し合っただけで企画を練っていきたくて、お互いの授業の合間を縫って企画の話し合いを行ってきました。授業やバイト、実習などでじっくり話し合いを重ねることは難しく、どうしてもお互いに頼ってしまうこともありました。それでも何とか一緒に企画を作り上げたいという思いで活動してきました。活動後もサークルに参加した学生全員で反省会をする機会を持ち、子どもたちとの関わりで難しいと感じたこと、学生の行動で足りなかったことなど、それぞれが活動を通して感じたことをぶつけ合ったり、子どもたちの保護者さんとの話し合いで保護者さんからのアドバイスを受けて、子どもたちとの関わりを考えたりと、活動から感じること、考えさせられることが本当に多かったです。子どもランドでの活動は私にとって、とても大きな力となっているように感じます。色々な学生と子どもについて話すことができる、このサークルで活動することができることをとても嬉しく思っています。これからも子どもたちへの思いを大切に取り組んでいきたいと思っています。

◇実践から得た「臨床の知」

「湯谷子どもランド」という社会

高見澤誠（理数科学教育専攻3年）

この一年間、湯谷子どもランドのプラザ長として企画・活動に携わる中で、多くのことを経験し、発見することができました。それは、去年までの一参加者としては見えてこなかったものばかりです。

第一に、企画することの難しさを痛感しました。小学校1年生から6年生までの幅広い年齢

の子どもたちが楽しめて、かつ、子どもたちと学生や保護者が一緒に作り上げる活動、というのは口で言うのは簡単ですが、実際に考えることはとても難しいと感じました。多様な子どもたちに適した活動や注意事項を考えることはとても大変でしたし、活動の際に説明をしたりするときでも、言葉遣いには細心の注意を払っていました。私だけでなく、副プラザ長の腰原さんや県短のサークル長、副サークル長とともに、お互いに遠慮することなく意見を交換しながら企画を練ってきたので、自分では気づかないことや注意が行きとどかないところにも配慮することができました。本当にこの3人には感謝しています。毎回の活動が終わると、必ず私の中には多くの課題が残りました。「もっとこうすればよかった」「子どもたちは楽しかっただろうか」などの後悔や、次の活動での改善点などが本当に多く残りました。そのたびにいろいろな視点を持って企画することができ、よりよい活動にすることができていたと思います。

第二に、環境の大切さに気づきました。私は今年の夏キャンプで大きな間違いをしてしまいました。「地域の方に対して感謝の気持ちを持って活動すること」。先輩方や土井先生にいつも言われていたことですが、間違いを犯して、そのことをある先輩に指摘されるまで、私は感謝の気持ちを忘れて、軽い気持ちでやっていました。今考えるとそのことは絶対にあってはならないことだと思いますし、これまでの地域の方々の気持ちを裏切り、先輩方が積み重ねてきたものをぶち壊しにするような行動です。

この一年間、私たちが湯谷子どもランドに参加し活動することができたのは、多くの保護者さんたちの協力や支援、土井先生や「YOU 遊世間」の先輩方の積み重ねがあるからこそ、ということに気づくことができました。私たちはでき上がった環境の上で、活動をさせてもらっています。その気持ちに応えるには、感謝の心を忘れずに持ち、全力でよいプラザを作り上げなければいけないと思いました。

また、湯谷子どもランドの子どもたちの元気な姿は、私たちの活動に対するモチベーションになりました。子どもたちの笑顔や走りまわる姿からは、元気を分けてもらっていた気がします。今年一年を通して、多くのことを学ばせていただいた湯谷子どもランドには感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

二年間の関わりの中で

腰原綾佳（理数科学教育専攻3年）

長野キャンパスに来てから、さまざま「YOU 遊世間」活動に参加させてもらいました。二年生のときはただ活動に参加させていただきだけで、ただ子どもたちと楽しむことを考えていましたが、企画などをしていく中でいろいろなことを感じるようになりました。

活動をしていく中で、一番嬉しく思ったことは、参加してくれた子どもたちに楽しかったと言ってもらえたことでした。湯谷小の活動では、副として活動の計画から携わりました。子どもたちに活動の終わりに楽しかったと言ってもらえたときは嬉しく、何度も活動に参加してくれる子や、クラブ活動のあとで遅れてでも来てくれる子などから話を聞くと、次の活動も頑張ろうと思うことができました。また、活動を重ねていくたびに、子どもたち一人一人と関わっていくことができ、だんだんと名前を覚えてくれたり、「遊ぼう」と向こうから誘ってくれたり、仲良くなっていけるのが感じられ嬉しかったです。

また、活動を通して多くの学生とも関わることができました。いろいろな人たちが子どもた

ちと触れ合う姿勢を見たり、考えを聞くことで、自分の中で子どもたちに対する考えが広がりました。子どもたちのこと、保護者さんたちのこと、関わる地域の人たちのこと、いろいろ勉強になりました。

二年生の頃から何度か活動に参加させてもらいましたが、活動の中心となって企画したり進行したりという立場で行うことは初めてで、とても貴重な経験をさせていただきました。また、他のプラザの活動に参加させていただくことで、さまざまな視点から活動をふりかえることができ、たくさん子どもたちと触れ合うことができました。「YOU 遊世間」の活動に参加して良かったです。ありがとうございました。

◇地域の保護者からの評価

子ども達の笑顔が集い、保護者も学生達からパワーを分けてもらう場所

湯谷子どもランド 保護者代表 近藤和巳

私はこの「子どもランド」に、長男が小学校に入学した年から、一保護者として参加させてもらい、今年度で「子どもランド」に関わって6年目となりました。前代表者からお誘いをいただき、昨年度から運営のお手伝いをする事となり、今年度より、保護者代表として「子どもランド」と関わる事となりました。私が関わらせていただいた6年間で変わらないもの、それは、子ども達の生き生きとした輝く笑顔、そして学生と保護者の笑顔がいつも集う場所ということです。

私事ではありますが、長男は約6年間に渡り、また、次男、長女の双子も約3年の間、ほぼ皆勤で参加させてもらっています。また、他のご家庭のお子さんについても、同様に「子どもランド」を楽しみにしているという声を良く耳にします。子ども達が「子供ランド」の活動を非常に楽しみにしているということ。これこそ、「子どもランド」が非常に魅力的な活動を行っているということに他ならないと思います。

現在、「湯谷子どもランド」は、活動の企画運営を学生スタッフにお願いし、保護者はそのバックアップを行うといった形で実施されています。学生スタッフは、ほぼ毎月ある活動の企画運営を行うこと、また、毎年夏に行うキャンプの準備など、学業と平行して行うことはとても大変だと思いますが、毎年、期待を裏切らない充実した企画を実施していただいています。何年にもわたり「子どもランド」に参加している子ども達が多数いることでも学生スタッフの「知恵」と「努力」が伺われます。

もう一つの「子どもランド」の魅力は、学生と保護者との交流会にあります。年間に数回行っているこの交流会ですが、年間計画にも盛り込んで、学生スタッフと保護者が一緒に話し合う機会を設けています。この交流会では、保護者は、普段子ども達と元気に遊びまわっている「学生のお兄さん、お姉さん」とは違った一面を見ることが出来ます。学生スタッフの皆さんがどのように子ども達のことを考え接しているかなど、率直な意見を聞いたとき、普段の生活に慣れてしまっている自分には、目から鱗が落ちる思いをすることも多々あります。また、学生スタッフにとっても「親の思い」に直接触れていただける良い機会になってくれていることと思います。

19年前に有志で始まったと聞いていますこの「子どもランド」も、現在は、学生スタッフの協力無しには運営できないくらいの大きな団体となっています。この「子どもランド」の子

ども達にとって魅力的な活動が、これからもずっと続けていけるよう、保護者も協力していきたいと思います。今年度は、リーダーの高見澤誠さんをはじめ、多くの学生スタッフの皆さんには大変お世話になりありがとうございました。また、長野県短期大学のスタッフの皆さんにも大変お世話になり、この両校の学生スタッフのおかげで充実した活動を行ってこることが出来ました。この素敵な学生スタッフにめぐり合う機会をつくってくれた「信大 YOU 遊世間」の活動に心から感謝しています。これからもこの魅力的な「子どもランド」の活動を一緒に作っていきましょう。

湯谷小子どもランドの活動に 10 年間関わって思うこと

湯谷小子どもランド 保護者 中谷隆秀

〈歴史とその意味〉 子どもランドは 19 年間の歴史があります。その中には 9 年間の学生スタッフとの関わりがあり、7 年間は学生スタッフ自身が企画と運営をしてきました。歴代のリーダーを良く覚えています。「藤岡恵美さん、松山博一君」が初期の時代。「鈴木春菜さん、清水亜美さん」が学生企画の確立時期、「田村将太君、笠井悠太君、鈴木梢さん」が発展期、そして進化の時代です。今年のリーダーは高見澤誠君です。「YOU 遊」と一緒に創ってきた子どもランドの活動に私自身が 10 年間関わらせてもらって、実感する事はその内容の充実です。毎年が単なる継続ではなく、「学生スタッフの活動への情熱と熱い思い」が積み重なって、どんどん進化しているのです。

〈19 年間積み重ねてきたものは何か〉 それは『愛』です。我が子への愛情と共に子どもたちを取り巻くスタッフの熱意と愛情です。1 回 1 回の企画を成功させたい、子どもたちに笑顔になって欲しい、喜んで欲しい、そういう気持ちが毎回の子どもランドの企画には溢れています。毎年第 1 回目の 5 月の企画は学生スタッフも子どもたちもドキドキです。新 1 年生も毎年何人も参加してくれます。お友達をたくさん作って、楽しい小学校生活を送って欲しいとの親の願いも強いです。毎年参加してくれる子どもたちは、子どもランドが大好きです。何があっても子どもランドには通ってくれる子どもたち、それは愛情いっぱいのスタッフが作り出す『愛の空間』の魅力を感じているのだと思います。

〈親の願いと子どもたちの未来〉 子どもランドで子どもたちは何をつかむのか？いつも遊んでくれる「お兄さんやお姉さん」が大好きで、ただそのことが嬉しくて子どもたちは参加しています。毎月のランドの企画や 7 月のキャンプでは、他の友達と一緒に多くの体験をします。その異年齢集団での体験が将来のコミュニケーション能力にもつながっています。親子以外の仲間と共に体験する中でしか身につかない力を、精一杯引き出すためには、学生スタッフ同士の意思疎通や子どもへの共通認識が大事です。またその学生スタッフを支える保護者の協力が欠かせませんし、そういう愛情に包まれた場だからこそ、子どもたちは見えないものを敏感に感じ取り、この場が「楽しくて居心地の良い場所」になっているのだと思います。子どもたちが他人と交わり協力する「コミュニケーション能力」を身につけ、更に成長できるのは、集団の中でしかできません。

〈話をすること・相手の気持ちを受け止めること・相手の気持ちを引き出すこと〉 会話は大事です。子どもたちははしゃいで走り回ります。子どもランドでは学生スタッフは必ずリフレクションをして、「今日どうだったか？」を出し合い交流します。その中で「どれだけ話したか？」「どんなことを話したか？」も重要だと感じています。子どもたちは家に帰っているん

なことを親に話しますが、多くは企画の内容よりも、「こんな学生スタッフがいたよ」とか、「こんな話をしたんだよ！」って言うことが多いです。普段から親との会話も少なかったり、またあまり話したがらない子どもも「楽しいこと」はいっぱい親に話をしたくなるようです。

〈湯谷子どもランドは永遠に続いて欲しい〉 来年 2011 年度には湯谷子どもランドは 20 年目を迎えます。この活動が作ってきた「もの」は何だったのか？この活動の中で生まれた「感動」や「喜び」や「成長」はどれほど大きなものなのだろうか？私はこの活動に 10 年間関わってきて、これほど純粋に子どもを中心に活動をして、またこれほどメンバー同士の信頼の強い場は他にはないのではないか？と思うほど、この場に惚れ込んでいます。またこの活動に全力を傾けて取り組んでいる学生スタッフのことが大好きで仕方がありません。こういう人と出逢い感動し、自分のエネルギーの源である「湯谷子どもランド」との出逢い、10 年間関わってこられたことに心から感謝します。本当に 10 年間、多くの学生スタッフのみなさん、ありがとうございました。

青木村えがおクラブ（6年目）

プラザ長 荻原知子（教育実践科学専攻3年）

副プラザ長 駒村美代（教育実践科学専攻3年）

○学生スタッフ名

荻原 知子（実3）	駒村 美代（実3）	市川 香織（実4）	宮尾 亘（実4）
布山 朋和（実4）	田畑隆太郎（実4）	高池 亮輔（体4）	丸山 絹代（実3）
三森ありす（実3）	井上 岳人（理3）	高見澤 誠（理3）	宇賀地由里（理3）
片原 範子（理3）	小西 陽一（生3）	山越 俊（社3）	服部 直幸（理3）
峯村 和裕（理3）	土屋 克明（理3）	三石 梨沙（理3）	窪田 都恵（音3）
井出 愛香（実2）	内川 舜也（実2）	笠井 萌子（言2）	近藤 由弥（言2）
谷屋 俊（社2）	中村 直樹（理2）	町田 香帆（実2）	山谷 文平（社2）
北沢 瑞樹（理2）	大木 拓哉（院2）	杉田 美香（清短）	高橋イリヤ（清短）
長田奈津子（清短）	海沼 文実（清短）	池田あゆみ（清短）	青木まなみ（清短）
上原 潤子（清短）	古橋 茉美（清短）	安藤 綾香（清短）	

○参加者数 子ども 約80名

○連携団体 青木村教育委員会

○プラザの概要

青木村は上田市の隣に位置する人口 5,000 人弱の村です。青木村では、「心豊かでたくましい子どもの育成=今こそ子どもに社会力を=」という教育目標を掲げ、青木村教育委員会を中心に村全体で子どもたちを育てています。「社会力」とは、「人と人がつながり、より良い社会をつくっていく力」のこと指し、社会力を培うためには多様な他者との相互行為が必要だとされています。

そこで、青木村では「子どもはつらつネットワーク」という子どもたちに関するグループが形成されています。「青木村えがおクラブ」も学生教育ボランティア「わこうど」の一員として青木村の教育に参加させていただき、子ども・地域に関わる様々な活動を展開しています。私たち学生も子どもたちにとって多様な他者の一員として、青木村の子どもたちの成長を願い、「子どもが真ん中」ということを意識して活動をさせていただいています。

○一年間の活動

活 動 日	活 動 名
5月15日～23日	あおきっこ通学合宿
7月16日	あおきっこ通学合宿報告会
7月17日	えがおクラブ企画『夏にまけるな！あおきっこ』
8月9日～11日	長泉サマーキャンプ
10月23日	ウォークのつどい
11月7日	図書館フェスタ
11月14日	青木村産業祭
12月4日	子育てフォーラム青木2010
2月19日～20日	えがおクラブ企画『冬の大三角』

* 上記以外にもマラソン大会、泥んこ運動会、青木村夏祭り、親子科学体験イベント等、多く

の村内行事にも参加させていただきました。

○活動内容

1. あおきっこ通学合宿

今年で6回目を迎えた「あおきっこ通学合宿」とは、青木村の小学校4年生～6年生の子どもたちが親元を離れ、学生たちと共に青木村文化会館で6泊7日を過ごすというものです。この合宿は、村の社会力育成事業の1つとして柱になっています。青木村の教育委員会と連携をして行いますが、学生が主体となり、企画・運営させていただいています。しかし、学生と子どもだけで行う合宿ではなく、朝・晩の調理のお手伝いに来てくださった食生活改善推進協議会のみなさん、毎日の食事のバランスや栄養価を事前にチェックしてくださった栄養士さん、毎日お風呂に入らせてくださったくつろぎの湯のみなさん、くつろぎの湯がお休みの時にお風呂を貸してくださった地域のみなさん、小学校の先生方など、この合宿は多くの地域の方のご協力のもと成り立っています。

今年は「ハッピー ～自分もハッピー みんなもハッピー～」というテーマのもと合宿を行いました。テーマのほかに、あいさつ、思いやり、自主・自立という柱も掲げて合宿をつくりました。子どもたち自身に「ハッピー」とは何なのか考えてほしいという願いからあえて「ハッピー」の具体的な姿を子どもたちに示すことはせず、毎日のリフレクションの中で考える時間を設けました。そして、一人ひとりの「ハッピーだったこと」を書いたものを1つのピースとして毎日パズルをしました。毎日の積み重ねを大切に、最終日には1つの大きな絵を完成させました。最初は、「遊んで楽しかった」「○○くんたちと遊んだ」などという「ハッピー」だったのですが、日を追うごとにその「ハッピー」が体調を崩した友達に「早く元気になってね」という励ましや「○○ちゃんに○○をしてもらってハッピー」というような友達に対する思いやりに変化していきました。私たち学生は、子どもたちと1週間生活することで、悩んだり試行錯誤の連続でしたが、子どもたちの成長を直に感じることができました。ある保護者さんが子どもの手紙を届けに来てくれたとき、封筒に「少し成長し、少し心がでっかくなって帰ってくる子どもを楽しみにしています。大変だろうと思いますが、身体こわす事のないよう楽しんでください。よろしく願います」ということを書いてくださいました。これを読んだとき涙が出そうになりました。本当にたくさんの方の理解と協力があるからこそこの合宿が成り立っていることを改めて感じるようになりました。今後もこの合宿が続いていってくれることを願います。

*合宿中の子どもたちのふりかえりシートより（原文のまま引用）

- ・学校から帰って来る時（放課後）いつもは体育館へ GO！！するけど、帰った方が楽しいから帰ったで～～。（6年・男子）
- ・学校行った。そんなに楽しくなかった。こっちの方が100倍楽しい。（5年・男子）
- ・しょつきをあらうときちゃんときょうりよくできてちょうハッピー。（4年・女子）
- ・今日は、初めての料理で包丁とかかわむきのはにきをつけて切れて、ポテトサラダがおいしかったです。（5年・男子）
- ・今日は A 君がカゼをひきました。早くなおってげんきになってほしいです。今日はもやし天国～！
- 今日は人げんちえのわをやりました。みんなで協力できてよかった！（4年・女子）

*参加した学生の感想（青木村子どもはつらつネットワーク通信より 原文のまま引用）

- ・しっかりものの5年生のBさん。特に印象に残っているのは合宿5日目のことです。子どもも学生も疲れがピークに達する頃、もう一人の班付スタッフが私のデジカメを落としてしまうというハプニングが、子どもたちの目の前で起きました。「あー、いけないんだ」「ぎゃおす（合宿中の呼び名）に怒られるよ」という子どもたちがいる中で、Bさんは私の手をそっと握り、「〇〇は今日疲れているから仕方ないよ。今日一日ちょっとおかしかったもん。だから〇〇を怒らないであげてね」と、そっと耳打ちしてくれました。Bさんの心の温かさと気遣いに私は「うん、そうだね」としか言えませんでした。私たち学生は、本当に子どもたちに支えられてこの合宿ができているのだと実感するとともに、そんな子どもたちのために全力でサポートしたいと誓った日となりました。
- ・E君が朝食で嫌いなバナナが出たときに、いやがりながらも一口ずつゆっくりと食べていました。いつもと違う環境、いつもと違う仲間に出会ったとき、子どもたちは自分を試す機会を得るのではないかと感じます。合宿に参加するというだけで子どもたちにとっては大きな挑戦です。しかし、その合宿の中でも子どもたちは一週間、日々様々なことに向き合い自分を見つめています。「あおきっこ通学合宿」が子どもたちの“成長”を少しでも手助けできればと思います。

2. あおきっこ通学合宿報告会

「あおきっこ通学合宿」が終わり、久しぶりに子どもや保護者さんに再会しました。合宿が終わってからの子どもたちの様子をお聞きしたり、合宿の感想や意見を寄せていただきました。また、学生は合宿中の写真を用いてDVDを作成し、上映しました。そのDVDは、子どもたちに記念としてプレゼントしました。

*保護者さんからの声、子どもの変化（原文のまま引用）

- | | |
|---------------------|--------------------|
| ・手伝いをやりたい様子が覗えます | ・数日間は落ち着いていました |
| ・合宿前と動きが変わりました | ・一人で寝ようとするようになりました |
| ・ちょっとは自分でやるようになりました | ・あまりわかりません |
| ・料理を少しやるようになりました | |

これはほんの一部ですが、多くの声を寄せていただきました。中には合宿をより良いものにするために今後を見据えた意見、要望もありました。学生では気がつかないような点を指摘していただけるのは、とてもありがたいことだと思います。6回目を迎えましたが、まだまだ多くの改善点や問題点があります。今後もこの活動を続けていくためには、学生が向上心を持ち、毎年子どもたちと共に成長していくことが大切だと思います。

3. えがおクラブ企画 『夏にまけるな！あおきっこ』

「通学合宿」の報告会の翌日、学生が企画した活動を行いました。青木村の子どもたちは元気が良いことから思い切り体を動かしたいと思い、体育館をお借りして課題解決ゲームを行いました。この活動では、課題解決ゲームを通し、仲間との協力を意識することによって自分の意見や仲間の意見を大切に、積極的に活動に参加することを目的としました。普段、なかなか企画することがないので、私たち学生にはとても貴重な体験となりました。企画する難しさ、当日の運営の大変さを痛感しました。しかし、子どもたちの笑顔を見ると苦勞を忘れることが

できます。

*参加した子どもたちのふりかえりシートより (原文のまま引用)

- ・大なわはじめはできなかつたけどさいごはできてよかったです。 (4年・男子)
- ・大なわとびがめちゃくちゃ大変でみんなでいっしょにがんばった!最後はがんばったかいがあって成功したヨ!よかった、よかった☆ (6年・女子)
- ・とれないよブタ (課題解決の中のゲームの名前) がおもしろかったです。
大なわをがんばった。 (3年・女子)
- ・フラフープをみんなでくぐるのがたのしかった。またやりたい。 (2年・女子)
- ・ペットボトルをたたせるのが協力でできてよかった。 (4年・男子)

*参加した学生のふりかえりシートより (原文のまま引用)

- ・協力して1つのものを作り上げている事がとても感じられ、参加してみて楽しかったです。子どもたちの楽しそうにしている姿が何よりも嬉しいことなのだと思います。
(清短・女子)
- ・学生同士で計画し、協力して子どもたちに楽しんでもらおうという気持ちをすごく強く感じました。外であそぶことが少なくなっている今、地域の子どもたちがみんなで遊ぶことができるというのはとても良いことだと思います。
(清短・女子)
- ・今回の活動では、学生も思い切り楽しめていたと思う。というのも、子どもたちの楽しそうな姿、がんばっている姿を身近に見ることができたからではないかと感じます。子どもたち一人ひとりはもちろん、学生一人ひとりにも輝ける場所があると一つの企画として、活動として、すばらしいものになると思います。
(信大3年・女子)

4. 長泉サマーキャンプ

青木村は静岡県長泉町と姉妹都市提携を組んでいます。それがご縁となり、長泉町で2泊3日のキャンプをさせていただいています。この事業は、青木村教育委員会が企画・運営をしてくださり、学生はお手伝いという形で参加させていただきました。昨年に引き続き、信州大学と清泉女学院短期大学の学生が参加しました。今年はお天気に恵まれ、去年は台風で入ることができなかつた海にも入ることができ、子どもも学生も時間を忘れて思い切り楽しむことができました。

学生が参加させていただいて2回目となりました。今年は海に行ったり、バーベキューをしたり、富士登山をしたりと盛りだくさんの3日間でした。学生は、子どもたちの班に班付として参加したのですが、合宿とは異なる部分が多く貴重な体験をさせていただきました。

5. ウォークのつどい

「青木村に見る義民の伝統」ということで、1日かけて青木村の史跡や文化財を訪ねながらウォーキングをしました。地域の方のガイドに沿って、遺跡やお寺、神社などを巡りました。青木村で活動をしていても普段なかなか青木村の歴史や文化財に触れる機会がないので、とても貴重な時間を過ごすことができました。青木村にはこんなものがあるのか、こんな歴史があったのかなど、新しい発見をすることができました。子どもの参加は少なかったですが、その子どもたちと遊びながら楽しくウォーキングができたので、長距離でしたがあまり苦にならずに最後まで歩くことができました。時には、子どもたちに青木村について教えてもらうこと

もあり、心が温かくなりました。子どもたち、地域の方々と一緒に普段とは一味違った青木村を体験することができました。たまには、太陽の下で自然に触れ合いながらゆったりとした休日も悪くないと感じました。

6. 図書館フェスタ

青木村の図書館で、図書館フェスティバルに参加させていただきました。子どもは赤ちゃんから小学生まで幅が広がったように思います。前半は、読み聞かせをしてくださるグループの方々が子どものための読み聞かせや大人のための読み聞かせを行ってくれました。歌あり、読み聞かせありで、子どもたちは楽しみながら聞き入っていました。後半は、「ドクター トイ」という青木村のおじいさんが割り箸を使った「ガリガリとんぼ」という簡単な工作を教えてください、みんなで作りました。大学生になって読み聞かせをしてもらうということはなかなかないので、新鮮で、どこか懐かしい気持ちになりました。また、「ガリガリとんぼ」は、こんなにも簡単に工作ができるのかというくらい簡単なので、大学生も楽しんで作ることができました。おじいさんや図書館の先生方、教育委員会の方々とお話ししながら作るというのも楽しかったです。

7. 青木村産業祭

青木村産業祭は、毎年道の駅で行われています。幅広い年齢層の地域の方々が一堂に会し、ブースを出したり、義民太鼓の発表をしたりします。そして、この産業祭に「えがおクラブ」もブースを出させていただきました。年々似たような出し物になってしまいとても悩みましたが、せっかく秋にやるのだから秋の木々や実を使って何かしたいということで、工作を行いました。固定した形を決めるのではなく、作る人が自由に想像しながら作れるようにしました。展示品として、学生が作った写真立てやリース、家など、様々な作品を並べました。子どもたちは松ぼっくりを使ってツリーを作るのが楽しかったようで、多くの子どもたちが熱中してくれました。子どもたちの真剣なまなざしや集中力は、私たち学生までもやる気にさせてくれました。他の活動で出会った子どもたちが走って会いに来てくれたり、もう中学生になった子どもが話しかけてくれたり、改めて青木村に来る喜びを実感しました。また、地域の方々も「えがおクラブ」のブースの前で足を止めてくださり、声をかけてくださったり、とても青木村の温かさを感じました。

8. 子育てフォーラム青木 2010

青木村の保育園、小学校、中学校の先生方をはじめ子どもに関わる地域の方々、また青木村で活動させていただいている信州大学、清泉女学院短期大学の学生が一堂に会し、教育について話し合いました。フォーラムの前半では、青木村の教育理念でもある「社会力」を提言した筑波大学名誉教授であり茨城県三浦村教育委員会教育長である門脇厚司先生の講演があり、後半では「進んであいさつ、元気な子どもを育てるために」「学力を定着させていくための家庭学習のあり方」「自分の性・人生を大切に、より豊かに生きていく性教育について考える」という3つの分科会に分かれて子どもに関わるそれぞれの立場から意見を述べ、話し合いをしました。学校の先生方や保護者の方だけでなく地域の方も参加されていて、青木村は村をあげて子どもたちを教育していると改めて感じました。その教育に私たち学生が携わらせていただい

ていることをとても幸せに思います。そして、教育者を目指す私たち学生にとって、とても良い学びの場となっています。このような体験を当たり前だと思うのではなく、感謝の気持ちやおかげさまの気持ちを持って、今後もぜひ青木村の教育に携わらせていただきたいと思います。

◇実践から得た「臨床の知」

人との出会い、そしてつながり

荻原知子（教育実践科学専攻3年）

駒村美代（教育実践科学専攻3年）

「青木村えがおクラブ」の6年目の活動が終わろうとしています。この1年を振り返ってみると、何十回青木村に足を運べただろうかと考えてしまいます。長野市と青木村…少し距離があってなかなか足を運ぶことができないのが現状です。しかし、そんな私たち学生をいつも温かく迎えてくださる青木村の方々。青木村に行くたびに新しい出会いがあり、その積み重ねがつながりとなっているように思えます。笑顔で迎えてくれる教育委員会の方々、声をかけてくださる地域の方々、手を振ってくれたり話しかけてくれる子どもたち。私たちはいつもこんなに多くの方々に支えていただいているのだと痛感します。私たち学生は、青木村の子どもたちの社会力を育成するために活動をさせていただいていますが、青木村の子どもたちや地域の方々と関わる中で、私たち学生も共に社会力を学ばせていただいたように思います。

私が青木村に関わらせていただいて2年が経とうとしています。今年度はプラザ長をやらせていただきました。この1年、プラザ長をさせていただいて一番感じたことは、人との出会いの大切さ、つながっていくことのすばらしさです。この1年間でたくさん子どもたちと出会い、道を歩いたりくつろぎの湯に行く中で地域の方と出会い、青木村に行く度に新しい出会いがあったように思います。そこで交わしたあいさつや地域の方の笑顔、子どもたちの素直で偽りのない笑顔が次の活動のエネルギーになっていました。活動のたびに参加してくれる子どもたちが変わり、さまざまな学年の子どもたちと触れ合うことができました。活動自体は、反省ばかりで納得のいかない内容もありましたが、活動で出会った子どもたちが次に会ったときに笑顔で走ってきて話しかけてくれることが嬉しくて、自然と笑顔がこぼれ元気になりました。活動や子どもたちのことで悩むこともありましたが、その悩みを解決してくれるのは子どもたちでした。子どもたちのパワーは偉大だと思います。また、地域とのつながりとして、青木村の方々とお酒を酌み交わすというのはとても貴重な体験でした。青木村の教育委員会の方々や保・小・中の先生方、青木村子どもはつらつネットワークのみなさんなどとても多くの方々との交流は、私たち学生にとって学びの場であったとともに、青木村の温かさや地域のすばらしさを改めて感じる場ともなっていました。お酒を呑むという場所に私たち学生が呼んでいただけるというのは、今までの先輩方の積み重ねが地域に受け入れられている証でもあると思うので、とても嬉しく思いますし、そんな環境をつくってくださった地域の方々や先輩方に感謝の気持ちでいっぱいです。私たちがこのような環境で活動ができることを幸せに思います。今後、さらに「えがおクラブ」が多くの方々をつながりをつくっていったら良いと思っております。

私が出会い、つながりを感じたのは青木村だけではありません。私はこの「YOU 遊世間」を通して、さまざまな大学で同じように活動している仲間に出会うことができました。多くの

学生と企画について真剣に話し合ったり、子どもたちについて語ったり、時には楽しくお酒を呑んだりすることが楽しく、また新鮮でした。特に、信州大学の学生には時に助けられ、時に刺激をもらいました。私がこうして1年間プラザ長として無事に活動を終えられたのもたくさんの仲間の支えがあり、助けがあったからです。きっと私だけでは何もできなかったでしょう。私を支えてくれた多くの仲間に本当に感謝の気持ちでいっぱいです。プラザ長をやらせていただき、一人ひとりの存在の大きさ、大切さを感じることができました。また、出会いがあるからこそ、そこからつながりが生まれるのだと感じました。人との出会いを大切にできる、そんな人になりたいと思います。私のことを支えてくれた多くの仲間、「えがおクラブ」に携わってくれた多くの仲間に感謝しています。

最後になりましたが、青木村の教育委員会のみなさまにはいつも私たち学生のことを気にかけていただき、本当に感謝しております。ご迷惑もおかけしましたが、その度にみなさんに支えられ心強かったです。本当にお世話になり、ありがとうございました。また、保・小・中学校の先生方、食生活改善推進協議会のみなさん、くつろぎの湯のみなさん、レポートのみなさん、青木村児童センターの先生方、そして地域のみなさん、子どもたちなど、本当にたくさんの方々に支えられて、今年度の活動を無事終えることができました。みなさんの支えがなければ、私たち「えがおクラブ」は成り立ちません。私たち「えがおクラブ」に携わってくださったすべてのみなさんに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。今後もたくさんの方々に愛され、子どもたちと共に成長し続ける「えがおクラブ」であることを、心から願っています。本当にありがとうございました。

◇地域の方からの評価

今年度の反省

青木村児童センター所長 高田玲子

1年間、「YOU 遊世間」の活動、お疲れ様でした。「YOU 遊世間」の報告書を読ませていただくと、皆さんが多くの時間を、さまざまな活動で子どもたちと関わっているのがよくわかります。慣れない場所、慣れない人間関係に飛び込み、地域の方々と歩調をあわせながら活動をするのは大変なことです。きっと大学の講義や教育実習では得られないものを、「YOU 遊世間」の活動から得ているのではないのでしょうか。

私の娘も皆さんと同じような年頃です。この春、大学を卒業します。大学で選んだ学部は教育学部ではありませんでしたが、途中から教員を目指したようです。気がつかないうちに大学がある地域の小学校で、特別支援学級のボランティアを始めていました。その小学校で先生方から温かい言葉、時には厳しい言葉をいただき、充実した学生生活がおくれたようです。子どもたちと実際に接し、先生方に生きたアドバイスをいただいたことは、何よりも娘の力になったことでしょう。今年度は採用試験を受けましたが、力不足で合格できませんでした。来年度は大学時代にとれなかった小学校教員の資格を、通信制の大学で取得するのが目標です。自分の目標に向かって一步一步進んでほしいです。

昨年の夏は記録的な暑さでした。私は子どもたちを太陽の下へ連れ出し、同じように過ごす生活ですっかり体調を崩し、自分のことだけで精一杯になってしまいました。

この1年、たくさんの学生さんが青木村児童センターを訪れてくれました。これから教育の

道を目指す皆さんに勉強の場を作ってあげられたでしょうか。常に子どもたちとかかわっている大人として皆さんに十分な声もかけて上げられず、申し訳なく思っています。

これからも「YOU 遊世間」の活動がより活発に行われ、皆さんが多くの生きた勉強ができますよう願っております。

◇青木村教育委員会からの評価

初心に帰って

青木村教育委員会事務局 上原博信

「信大 YOU 遊世間」も 17 年目をむかえると同時に、「青木村えがおクラブ」も 6 年目になります。

あっという間の 6 年だったと感じます。6 年といえば小学校 6 年間と同じです。小学生は 6 年間で大きく成長します。私は、また学生諸君はどうだっただろう。どのくらい成長しただろう。関わった子どもたちはどのように変わっただろう。と、この機会に振り返ってみたいと思います。

私は、6 年前にはじめて信大生に会い、本当にうれしかった思いが今でも鮮明に覚えています。私自身が信大 OB でもあり、彼らと仕事ができるなんて奇跡だと思いました。しかし、通学合宿など具体的な活動が始まると、一変しました。学生の熱い思い、教育委員会の社会力育成の願い、学校、先生との調整、保護者の理解、そして、子どもたちを真ん中にと、すべてをつなげ、ひとつの活動をつくりあげることがこれほど大変だとは思いませんでした。具体的に進めば進むほど、あれも、これもと次々と新たな課題や問題が浮上し、相談、調整の繰り返しでした。当時は、私自身があまり考えで、経験もなく、学生諸君に頼っていたと反省しています。教育長にもよく叱られました。でもそのおかげで今の自分があるんだと気づき、少しは成長したのではと思います。学生の皆さんもよく青木村へ足を運んでくれました。きっと将来、青木村で学んだことが役に立ってくれると信じています。

それから早 6 年、毎年新しいえがおクラブメンバーが青木村に来てくれました。前年の反省を生かし、改善し、新たなテーマを設定し、一丸となってあおきっこ正面から、五感をフルに使い、向き合っている学生の皆さんに感謝しています。

今年度は、宮尾君、荻原さんを中心に「あおきっこ通学合宿」から始まりました。例年より 2 週間も早く開催したので、学生の皆さんも準備、メンバー集めに苦勞したと聞いています。この合宿では体調を崩す学生が見受けられました。これから社会で活躍する学生の皆さんはぜひ自己管理、健康な体調の維持に努めてください。そのためには、信大での 4 年間で準備期間ですので、意識して規則正しい生活を送ってください。急に習慣は変えられません。万全の体調でお互いに子どもたちと接しましょう。

みなさんの活動は確実に、着実にあおきっこの心に響き、残り、あおきっこは影響を受けています。みなさんのような学生を目指したいと作文を書くあおきっこがいます。本当にうれしいことです。みなさんも初心を忘れないでください。青木村での心構え、「ご縁とおかげさま」「子どもを真ん中に」「具体で考える」「子どもや皆さんの後ろにある多くの願い」「最後は人」。これは私にとっても決して頭から離れることのない言葉です。お互いにこの言葉を脳裏に焼き付けて、流されず、安易にならず、形骸化しないよう今後も協働していきましょう。

麻績村 dE 遊ぼう！（6年目）

プラザ長 小賀坂佳子（理数科学教育専攻3年）
副プラザ長 三石 梨沙（理数科学教育専攻3年）

○学生スタッフ名

小賀坂佳子（理3）	三石 梨沙（理3）	布山 朋和（実4）	田畑隆太郎（実4）
久保 朝夏（芸3）	服部 直幸（理3）	片原 範子（理3）	峯村 和裕（理3）
飯島 理沙（理4）	鈴木 祐香（理4）	市川 香織（実4）	大井このみ（理3）
腰原 綾佳（理3）	土屋 克明（理3）	松井 遥（理3）	金箱 仁志（理3）
澗口 歩美（理2）	井出 愛香（実2）	小松 静（障4）	町田 香帆（実2）
内川 舜也（実2）	池田 貴広（野3）	佐原 啓太（社2）	鈴木喜多朗（理2）
木村 綾乃（県短3）	山口 葉月（県短3）	飯森あゆみ（県短1）	

○参加者数

子ども約 80 名 麻績図書館運営委員会の方約 15 名 麻績村教育長 保護者の方約 40 名

○連携団体

麻績村立麻績小学校 おみ図書館 麻績村教育委員会 昔の遊びの会

○プラザの概要

私たちは東筑摩郡麻績村にある「おみ図書館」を活動の本拠地とし、麻績小学校の子どもたちと一緒に「麻績村 dE 遊ぼう！」として活動を行ってきました。豊かな自然と温かい地域の人々が魅力的で、信大から遠いにも関わらず多くの学生が活動に参加してくれています。また、麻績村では地域・教育委員の方々の協力の下でも幅広い活動が行われており、昔の遊びや麦の栽培など、子どもたちと一緒に伝統的な文化に親しむことができるものもあります。このような地域が一体となって子どもを育てるという考えの中で、「麻績村 dE 遊ぼう！」も活動させていただいています。

今年度の学生企画の活動は「火おこしと五平餅作り」「デイキャンプ」「ハロウィン」などを行いました。3月の話し合いの場であがった「子どもたちが遊びを考える」という様に、子どもの自主性を育てられるような活動を作っていきたいという願いのもと、今年度はデイキャンプを計画しました。すべての活動を運営するにあたって、麻績の多くの方々にお力添えをいただきました。先生方はいつも学生に感謝して下さいますが、私たちの希望を実現できるのは麻績の方々が全力で私たちをサポートしてくださっているおかげです。とても幸せな環境で活動できるということを忘れずに、麻績の方々と一緒に麻績の子どもたちのために活動しています。

○一年間の活動

活動日	活動内容
6月5日	学生企画 ①（火おこしと五平餅作り）
6月19日	昔の遊びの会（麦刈り）
6月27日	昔の遊びの会（麦の脱穀）
8月10日	学生企画 ②（デイキャンプ）
10月23日	学生企画 ③（ハロウィン）
11月7日	昔の遊びの会（麦まき）

1月22日	昔の遊びの会（たたきゴマ作り）
2月5日	学生企画 ④（冬の運動会）
2月19日	昔の遊びの会（たたきゴマ大会）

◇実践から得た「臨床の知」

子どもの主体的な姿を育むために

小賀坂佳子（理数科学教育専攻3年）

三石 梨沙（理数科学教育専攻3年）

1. はじめに

昨年度の活動の柱は「子どもの主体性」でした。そして、今年度も引き続き「子どもの主体性」を柱に掲げて活動を行うことが、引き継ぎの際に決まりました。

活動を企画するときには、「活動の中での子どもの主体的な姿とは、どんな姿だろう」と自分たち自身に問いながら内容を考えてきました。「主体的」とは、「自分の意志・判断に基づいて行動するさま」を指します。子どもたちが主体的に行動できる活動を企画する上で問題になったのは、学生やスタッフ側でどの程度まで企画の準備と骨組みを作り、どの程度子どもたちの意志や判断を反映できる内容にするかということでした。しかし、子どもが1から活動内容を選択したり判断するような企画が「主体的」なのかというと、それは少し違うのではないかと思いました。また、そういった内容にするほど、思わぬ方向に進んでしまう可能性も高くなり、麻績村の方々にも迷惑をかけてしまうことになりかねません。

そこで、今年度は少し視点を変えて、「一つの企画の活動内容に一貫性を持たせること」を大切にしようと考えました。このように考えたのは、活動内容に一貫性を持たせることで、子どもたちは明確なゴールとそれまでに必要な過程を想像することができて、一つひとつの活動が活動全体の中で持つ意味を理解することができ、目標を持って頑張れたり、活動が終了したときに達成感が得られたりするのではないかと思ったからです。

「子どもの主体性」と「活動内容の一貫性」。この2つを満たして、かつ、楽しくて参加してくださった全ての人の思い出に残るような活動を作っていきたい。私たちはそう考えながら一年間活動を行ってきました。

2. 学生企画の中から学んだこと

《火おこしと五平餅作り》

2010年3月、旧正副プラザ長と現正副プラザ長で、引き継ぎ等を兼ねておみ図書館を訪ねました。その際に、今年度はこのプラザでは初となるキャンプを行うことが決まりました。そこで、第一回目の活動はキャンプにつながるものにしたいということになり、火おこしをしようということになりました。麻績小学校のすぐ近くには、枝の拾える山があるということで、燃やす枝も自分たちで拾ったらどうかとおみ図書館の先生が提案して下さったこともあり、枝拾いも活動内容に加えました。さらに、火を起こすことを最終目標にするのではなく、起こした火で何かをするというもう一段階先の目標があった方が活動に深みが出るのではないかと考え、仮に生焼けになってしまったとしても問題がないものとして五平餅が候補にあがり、五平餅作りも活動に加えることにしました。

しかし、実際にタイムスケジュールを考える段階で、2時間半という限られた時間の中では枝拾い・火おこし・五平餅作りの3つの活動を行うのは厳しいのではないかという声もありました。それでもやはり、子どもたちに枝拾いから五平餅を焼くところまで一貫して自分の力でやり遂げて欲しいという思いがあったので、おみ図書館の先生方にも無理を言って、全てを活動に盛り込ませてもらいました。

そして、迎えた当日。空は気持ちよく晴れ、初夏の陽気が麻績村を包み込んでいました。子ども約35名と、保護者の方約10名、学生20名が参加してくれました。山での枝拾いでは、崖からの転落や漆によるかぶれなどが心配されていましたが、そのような事故はなく、子どもたちは枝や葉っぱを一生懸命集めていました。山への行き帰りはちゃんと列を守りながら、楽しそうに話す姿が見られました。麻績小学校のグラウンドに戻ってきて、火おこしの説明をしたときは熱心に聞いてくれていました。火おこしの道具の数に限りがあったため、一人の子が独占してしまわないかとか、けんかは起こらないだろうかなどと心配していましたが、実際は班の中で高学年の子が低学年の子を気遣ってくれたりしたので、心配していたようなことは起こりませんでした。また、火を使う活動だったため火の事故が起こってしまうことを一番恐れていましたが、保護者の方や麻績村のスタッフの方、学生に細心の注意を払っていただいたおかげで、子どもたちも一人ひとり注意して行動することができて事故が起こらなくてよかったです。みんなが五平餅をおいしそうに食べる姿を見て、この企画をしてよかったと改めて感じました。参加した学生からは、

- ・火がつかず、子どもたちも悔しがっていたが、火の大切さにも気付いてよかったと思う。
- ・子どもたちの集中力は、自分が思っていたより強く、持続性があることに気が付いた。
- ・子どもたちが初めての体験をすごく心待ちにしていたのが分かって、私たちも子どもたちの『できた!』や『わーすごい!!』をたくさん聞けてとても嬉しかった。
- ・非日常的な活動だったので、自分自身も純粋に楽しかった。
- ・ブレとかをして、火を起こすのが難しくてできるのかな?と思ったけど、子どもが火を起こせたのでよかった。山へ行くときは、口数が少なかった男の子も山から下りる頃には元気になっていて、火を起こすときには積極的にやってくれてよかった。火を起こしたり、穴を掘ったりしているうちにチーム一丸となって協力している感じがよかった。
- ・事前にタイムスケジュールも見て内容を把握していたはずなのに、結局、子どもたちのペースに合わせてゆっくりやっしまい、最終的に時間が詰まってしまった。班単位で、それぞれ班ごとに時間配分をきっちり行うべきだった。

といった感想があがりました。

今回の活動でよかったことは、やはり無事故で終わらせられたこと、それから子どもの真剣な姿や生き生きと活動に取り組む姿、そして本当に楽しそうな笑顔が見られたことです。また、年上の子が年下の子を自然に気遣う姿などもたくさんあり、麻績の子のいいところがたくさん見えた活動となりました。一方、反省点は、学生の感想の中にもあるように、時間の区切り方が甘かった点です。今回の企画は計画の段階から時間にあまり余裕がないということが分かっていたはずなのに、適切な指示ができずに、結局、解散の時間も当初の計画より遅れてしまいました。子どもが火おこしなどに本気になったときの「もっと」という気持ちを大切にしながらも、地域の方や保護者の方のご協力を得て成り立っている活動であるということを常に意識して、きっちりと区切りをつけていかなければならないのだと痛感しました。

この活動では、地域の方が子どもたちが山道を歩きやすいようにと草を刈ってくださったり、公民館の副館長さんが五平餅を安全に食べられるようにと長くて幅のある竹製の串を参加者全員分の本数作ってくださったりと、様々な面において強力的にサポートしていただきました。本当にありがとうございました。

《デイキャンプ》

前述したとおり、今年度の活動も前年度に引き続き「子どもの主体性」を育むことを目的として行おうと、年度当初におみ図書館の方と話し合いました。その柱としてキャンプを行うのはどうかという提案をしていただいたのが、この活動のきっかけです。

したがってこの企画の一番の願いは、キャンプという非日常的な空間の中で、子どもが自分自身で考えて行動したり、友達同士や学生と関わり合ったりすることを通して、子どもの主体性を育むことでした。また、麻績村には恵まれた自然があります。子どもたちにとってはそれが当たり前となってしまっているのかもしれませんが、麻績村の子どもが成長したときにこのキャンプの経験などを思い出して、自分の育ったところはこんなにもいいところだったと感じてもらえたらいいな、というのもまた願いにありました。

このプラザにとっては、キャンプは初の試みでした。しかし、正副プラザ長は他のプラザでのキャンプを企画した経験があったため、それを生かしながら企画をしていけば大丈夫だと当初は考えていました。しかし、企画は思った以上に難航しました。

まず、宿泊が難しくなってしまったこと。キャンプが初の試みということで、危機管理の面での心配が大きいという理由から、一年目はデイキャンプにすることになりました。この件では、橋渡先生に本当にお世話になりました。ありがとうございました。

それから、学生・子どもが思うように集まらなかったこと。お盆前ということで、子どもが家族で出かけることが多かったり、学生の都合があまりつかなくなったりして、一時はとても心配しました。しかし、おみ図書館の先生方の熱心な呼びかけのおかげで、子どもと保護者の方が合わせて30名ほど集まってくださいました。学生同士も誘い合って参加してくれたおかげで15人も集まり、企画を実行に移すことができました。

学生スタッフが集まってからは、当日の大きな流れを決めてさっそく係分担を行いました。課題解決ハイキング係と、昼食係、工作係、イベント係、キャンプファイヤー係の5つに分かれて、それぞれに準備を進めていきました。デイキャンプは、聖高原キャンプ場で行うことになっていたのですが、何度か下見にも足を運びました。行くたびにイメージは膨らみ、当日成功させたいという気持ちが強くなっていきました。準備を行う上では、おみ図書館の先生方と何度も連絡を取り合いながら、食材やキャンプファイヤーの準備をしていただくなど、本当に心強いサポートをしていただきました。

学生スタッフの頑張りや麻績の方々の全力のサポートのおかげで、前々日までに何とか「しおり」も出来上がりました。麻績小学校の隣の公民館に前日入りし、その日の夜に麻績村のスタッフと合流して打ち合わせをしました。具体的な流れを確認していくと、それまで考えていなかった細かい点が浮かび上がってきました。それらの確認が一通り終わると、ついに明日本番なのだというワクワク感と緊張感が同時に押し寄せてきました。参加してくれた全ての人に、「来てよかった」と感じてほしいと強く思いました。

そして、ついに迎えた当日。天気予報では朝から降水確率が高めで、空を見上げると雲行き

も怪しかったので、何とか1日持ちこたえて欲しいと願うしかありませんでした。おみ図書館の先生方が用意して下さったおいしい朝食をいただきながら最終確認をして、子どもたちが来るのを待ちました。続々とやってくる子どもたちの表情からは、楽しみにしてくれていた様子がよく伝わってきました。

アイスブレイクでは、初対面の学生や子どもも多かった中、さっそく笑顔が見られました。ここでもまた、麻績の子の人懐っこさや優しさを感じることができました。

麻績っ子チャレンジパーク（課題解決ハイキング）では、スキー場とキャンプ場を大いに使った数々の課題の中で、班の子ども同士で協力しあう姿や、必死で頑張る姿が見られました。この活動では保護者の方に全面的に協力をしていただきました。課題ごとに各地点に立っていただき、班の子どもが到着する度に温かく迎えて下さいました。参加者の様々な表情が見られました。

その後の昼食は、メニューがご飯とタンドリーチキン、野菜スープ、スクランブルエッグ、サラダと品数が多かったのですが、班の中で役割分担をして自分の担当の料理を一生懸命作る姿が見られました。煙にむせたり野菜を切るのに苦戦したりしながら自分たちで作った料理を食べる子どもたちからは、自然と笑顔が溢れていました。「おいしい」という声があちこちで聞かれました。

昼食後の工作の時間には、“モックン”というキーホルダー作りをしました。枝を切って、目玉や飾りを張り付けて顔に見立てた“モックン”の見本を見た子どもたちは、早く作りたと言わんばかりに急いで材料を取りに来て、楽しそうに“モックン”を作っていました。見本で示されたような形以外にもアイデアに溢れる作品が次々と出来てきて、子どもの創造性に驚きました。

工作の後は聖湖の横の公園に移動して、水鉄砲大会が行われる予定でした。しかし、移動しようとした直前で心配されていた雨が降ってきてしまいました。遠くが見えないような強い雨だったため実行か中止かと悩みましたが、30分程で何とか止んでくれたので水鉄砲大会を開くことができました。（主に学生が）びしょ濡れになりながらも、ずっと歓声が響いていて、この日一番かもしれないというくらいの子どもの生き生きとした姿を見ることができました。私たちが水鉄砲大会をしている間に、保護者の方と麻績村のスタッフの方とで縄文パンとスイカのおやつを用意して下さったので、大会が終わった後に火で温まりながら、おいしくいただきました。

そして最後は、キャンプファイヤー。まだ周りが明るかったのですが、花火やろうそくを使って全員で点火する演出はとても盛り上がりました。猛獣狩りや、木こりと小リス、マイムマイムなどは、一日中動き回ってくたくたのはずの子どもたちも本当に楽しそうにやっていました。終わる頃には周りも暗くなり、大きな事故がなく終わったという安堵感と同時に、終わってしまうのだという寂しさを感じました。

子どもと学生とは、当日の朝初めて出会ったという人も多かったのですが、一日一緒に活動したことで絆が生まれ、別れるのを最後まで惜しむ様子がたくさん見られました。参加者の表情からは達成感や充実感が感じられて、本当に企画してよかったと思えました。

参加した学生からは、

- ・自分で作ったご飯を食べたり、水鉄砲やキャンプファイヤーをしたりして、『こんなの初めてだー！』と言う子の姿や、前日の段階で保護者さんと一緒になければ活動ができない

と言われていた子の課題解決に一人で行く姿が見られたことが、とても嬉しかった。

- ・活動が盛り沢山で、子どもたちが疲れ切ってしまうかと心配だったけど、楽しい企画がいっぱいで、準備して頑張ってくれた想いに子どもが最高の笑顔で応えてくれたのだと思った。
- ・子どもたちとは仲良くなれたと思うけど、子ども同士よりは、子どもと学生で仲良くなったというのが多かったかなと感じた。もっと自分たちの工夫で他学年の子やしゃべることが苦手な子同士が仲良くできればよかったと思った。
- ・自分の班では、最上級生である5年生が下級生である班の子に注意する場面もあり、その5年生自身が周りを見ることができていたし、それによって班全体がまとまることもできたので非常によい活動だった。
- ・日程よりも大幅に時間がずれ、企画の変更もありバタバタしてしまった。
- ・全体を見ていると、学生がとても楽しそうに子どもと関わっている姿が多く見られた。学生・大人が楽しそうにする姿は、子どもに伝染していくことを改めて実感した。

といった感想があがりました。

このデイキャンプ全体を通して、麻績村のスタッフの方々には各方面で本当に助けいただきました。全体的に時間が後ろに押してしまっていたのですが、臨機応変に早めにご飯を炊いてくださったりしたおかげで、無事に全ての活動を行うことができました。どの活動も捨て難かったため、あれもこれも…と計画しているうちに、活動の量が1日の日程で行う量としては非常に多くなってしまいました。そんな私たちのわがまを聞いてくださり、全力でサポートしてくださったスタッフの方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

参加してくれた子どもたち、保護者の方、麻績村のスタッフの方、学生、全ての人のそれぞれの想いが1日の活動の中に凝縮されていたように感じました。来年度以降も恒例行事にしていけたら嬉しいなと思います。

《ハロウィン》

この活動では、まず魔女や動物などいろんなキャラクターに扮した子どもたちと一緒に地域の方々のお宅に伺ってお菓子をもらいます。そして、お礼と一緒に写真を撮って子どもたちがお礼のメッセージカードを渡し、子どもたちにそれぞれ自分が何に仮装したのかを説明してもらいました。昨年と違う点として、おみ図書館に戻ってきた後にデイサービスの利用者の方がいらっしやって交流をしました。

事前の準備では、当日の活動のタイムスケジュールを決めたり、お礼に渡すメッセージカードを制作しました。活動日が教育学部の文化祭とかぶってしまっていたため学生スタッフが集まらず苦労しましたが、参加してくれたスタッフは準備にも積極的に関わってくれたので、全員で当日の行動については把握できたように思います。

当日は麻績小学校に着いた後、初めに協力してくださる地域の方にご挨拶に伺い、先生方が用意してくださったお菓子を各お宅に渡しました。どのお宅もとても協力的で温かく迎えてくださいました。子どもたちが集合してから、初めにハロウィンの起源について説明しました。クイズ形式にして話をしましたが、子どもたちは一生懸命に聞いてくれました。長々と話すのではなく、なるべく簡潔に子どもたちにわかりやすいような工夫を加えて話すことが大切だと改めて感じます。グループごとに分かれて自己紹介をしてから、1グループ4軒ずつ地域の方

のお家に伺いました。すべてのお宅で優しく接していただき、たくさんの笑顔を見ることができました。「始まったばかりのときは高学年の子どもたちがどんどん先に進んで行ってしまって、グループがばらばらに別れてしまった。しかし、何回か注意すると後ろを気にして進むようになってくれていて、とても成長しているなと感じた」（鈴木）。このように活動の途中で子どもたちの成長を感じることができたようです。「場面場面で、困りそうな点について考え、対処法などもっと全体で共有しておくべきだったと思う」（久保）。という反省も出たように、デイサービスの利用者の方との交流には運営の面で多く課題が残ります。予想よりたくさんの利用者の方が来てくださり、用意していたメッセージカードが足りなくなる事態になりあわててしまったが、先生方や保護者の皆さんが迅速に対応してくださいました。デジカメで撮った写真も図書館で印刷してもらい、先生方や保護者の皆さんの協力して下さる力の大きさを実感しました。混乱して動けなくなってしまうことが目立ったのですが、「どうしよう」と止まって考えるのではなく、「とにかく動くこと」が大切だということも心に留めておきたい課題です。交流では、お菓子をいただいた後に童謡を歌いながら肩たたきをし、メッセージカードを渡すという流れでした。そこでも時間の見通しが甘く、活動の時間が写真の印刷を行う時間よりも短くなってしまい、時間が余ってしまいました。そこで子どもたちに、「今日の活動でどんなことをしたのか、みなさんに教えてあげてね」というと、多くの子どもが利用者の方のそばに言って、一生懸命に話している姿が見られました。時間が余ってしまってその場で提案したことでしたが、麻績の子どもたちの素晴らしい面を見ることができて感動しました。このような姿を見ることができたようです。「利用者の方を見送るとき握手して「本当にありがとう、バイバイ」と丁寧に見送る子がいました」（布山）。これだけのことができる力を持っている子どもたちなのだから、もっと綿密に計画していれば深く交流できたのではないかと感じました。また、ハロウィンの活動とデイサービスの方との交流という全く違った活動をひとつにする際には、子どもたちへの動機づけや意識の向け方を工夫しておかなければなりません。

この活動を通して、活動に対する時間設定のむずかしさと活動を運営する上でアクシデントが起こった時の対処法を考えておくことの重要性を学ぶとともに、多くの方に支えていただいてこの活動が成り立っているということを再認識しました。おみ図書館の先生方には、お菓子やお菓子をを入れる袋を用意していただき、地域の方と連絡を取り合って活動を計画してくださいました。保護者の方々にも、危険個所に立っていただき、子どもたちの安全を見守っていただきました。地域の方々には、子どもたちのためと笑顔で協力していただきました。麻績村には、村全体が一つとなって子どもを育てていく環境があります。その中で学生が計画した活動をやらせていただき協力もして下さって、私たちは本当に幸せだと感じました。活動に携わって下さったすべての方に感謝し、今後、活動をより良いものにしていきます。

3. 来年度に向けて

今年も、昨年度に引き続き「子どもの主体性」を柱に活動を行ってきました。そして、その中でメインとなったのが、デイキャンプでした。このプラザにとってデイキャンプは今年が1年目ということで、活動の量や時間配分、準備期間など、さまざまな点において反省点が出されました。来年度はこれらの反省点を改善しつつ、更に内容に深みが出せたらよいと思います。

また、このプラザで伝統となりつつあるハロウィンでは、高齢者との関わり方などの点において前年度と同じ課題を生んでしまいました。そこで、前年度と同様の企画を行う際にも、全

く同じように行うのではなく、アレンジを加えていくことが重要だと思います。

4. おわりに

私は、麻績村での活動が終わるたびに「麻績村って温かいな、大好きだな」と感じていました。温かいと感じさせてくれていたのは、子どもの人懐っこさだったり、素直な笑顔だったり、「また来てくれるよね？」のひとことだったり、運営委員会の先生方や地域の方の全力のサポートだったのではないかと思います。

このプラザを引き継いですぐのときは、正直不安だらけでした。先輩方が企画された YOU 遊のプラザの活動には何回か参加してきましたが、実際に企画をしてみると、活動に参加することと企画をすることは全然違うということは何度も痛感させられた1年でした。企画案を出してみたはいいけれど本当に実行できるのかという不安や、子どもたちは企画に魅力を感じてくれるのだろうかという疑問、学生が集まらないという焦りを毎回のよう感じていました。しかし、企画に行き詰まっていると、いつも決まって、とてもよいタイミングで橋渡先生や桐澤先生から連絡が来て、助け船を出してくださいました。そんなときの「その企画楽しそうだね」という先生のひとことや「今度の麻績、参加したい!」という学生のひとことにどれだけ救われたか分かりません。

初めから活動を企画した分、活動にかける想いも大きく、子どもの笑顔が見られたときの喜びや無事に終わったときの安堵感是非常に大きかったように感じます。そして、毎回の活動後に必ず感じる冒頭の「麻績村って温かいな、大好きだな」という気持ち。この気持ちが次の活動の原動力となってくれました。たくさんの人に励まされたり、支えられたりしながら、無事に今年度の活動を終わることができたことを本当に感謝しています。

これからもこのプラザで、麻績村の方と学生が協力しながら、子どもの成長を見守り支えていける幸せな環境がずっと続いていくことを願います。

最後になりましたが、この1年間支えていただいた運営委員会の先生方、保護者の方々、教育委員会の方々、地域の方々、参加してくれた学生、そして元気いっぱいかわいい麻績村の子どもたち、本当にありがとうございました。

◇麻績小学校の先生方からの評価

— 地域・子どもたちを結ぶ — 麻績村での活動を振り返って

1. はじめに

麻績小学校司書 橋渡久美子

おみ図書館の活動を「YOU 遊世間」の皆様を支えていただいてから6年目になりました。感謝申し上げます。

活動にあたって

私たちは、麻績の子どもたちのためにと、試行錯誤しながら今まで活動してきました。

地域の人たちと関わり、「YOU 遊世間」にも6年間に亘って麻績村に入っていただきましたが、現在は過渡期にきております。麻績村の首長が変わり「森の学園構想」が浮かび、現在、麻績村の子どもたちの育みを村全体の見地から見直しされております。が、残念なことにその全体像が見えないまま今年も1年が終わってしまいました。

そこで、おみ図書館独自に今までの活動を見直しつつ、「YOU 遊世間」と関わる6年間の

活動の歩みを振り返ってみて、子どもを育むために以下の3点を大切にしたいと考えました。

- ・麻績の豊かな自然とのふれあいを軸にした子どもたちの育み
 - ・お膳立てをされたものに乗った活動でなく、子どもたちが主体的に動ける活動
 - ・地域と密接に関わっている特徴を大切に麻績村を知り麻績村のよさを体感する活動
- なお、子ども教室との関わり方は下記の通りです。

おみ図書館が主の活動…火おこし体験 デイキャンプ ハロウィン 冬の運動会

(「YOU 遊世間」がおみ図書館と連絡をとりながら主体的に運営)

子ども教室が主の活動…麦にかかわる活動 たたきごまに関わる活動

(子ども教室が主体になり「YOU 遊世間」は可能な範囲で参加)

2. 具体的な活動を振り返って

麻績小学校非常勤講師 桐澤久美

(1) 「自然とふれあう」 満足度 100 パーセント

今年度特に心に残っている活動は、麻績村にある聖高原で自然とふれあう活動です。ゼロからのスタートのために、リーダー2人には、3回も下見にきていただきました。前日も零時すぎでも準備、当日も朝早くから夜の10時すぎまで反省会と大変だったと思います。しかし、リーダーの佳子さんに終わった後の感想を聞くと、「満足度 100 パーセント」と即答。内容が練られており手立てもはっきりし、「YOU 世間」の参加者全員が受け身ではなく子どもたちへの援助の道筋が見えた動きであったことに感動しました。学生さん、子どもたちのすばらしい表情が心に残っています。また、保護者からは、先生になったら麻績小学校に来て欲しいとの声を聞きました。ありがとうございました。

(2) 「原始人の火おこしに挑戦」

この活動は、山への薪拾いから始まりました。子どもたちはグループごと、「YOU 遊」の皆さんとの会話を楽しみながら山登りをしましたが、ここですっかり打ち解けあった雰囲気となりました。また、山の中は「気持ちいい」との声も上がりました。山が近くにあってもなかなか登る機会の無い子どもたちにとっては貴重な経験でした。

また、火おこしでは根気のいる作業でしたが、「YOU 遊」の皆さんの励ましによって、最後の燃えつかせるところまで行き着くことができました。活動が魅力的であったことと、皆さんのきめ細かな対応で、普段学校の活動でははずれる子どもも、最後まで一緒に活動ができたことも大きな成果であったと思います。

湯谷小の火おこしの道具を「YOU 遊」の皆さんが借りてくださり、素晴らしい経験ができました。関係して下さった皆さん、本当にありがとうございました。

(3) 「ハロウィン」

高齢者のお宅をまわって交流。また、デイサービスの利用者の方が図書館を訪れて下さり交流ができました。「YOU 遊」の皆さんの企画による肩たたき、握手、歌を歌うなどの交流の間、高齢者の方は笑顔であったり、うれし涙を流される方もいらっしゃいました。子どもたちも自然とやさしい顔や言葉使いとなり、なごやかなひと時でした。いろいろな世代の方と触れ合い、これも貴重な経験となりました。

○麻績村教育委員長市川祥介先生より：「今日の様な実践的活動を行うことで、子どもを見取る力がつき良い教師となれる。今日のねらいというものをきちんと持つことが大事。子どもに何を願い、どんな力をつけたいのかを明確にする。」

○「YOU 遊」の先輩 両角孝之先生より：「子どもと接する目的をもって活動に参加していて良かった。交流の仕方を子どもたちが話し合うことで、主体性をもちより充実した交流になったのではないか。」

(4)「麦まきの活動」

麻績村のパワフルな高齢者の皆さんによる「昔の遊びの会」のご指導により、麦まきの活動がおこなわれました。鍬の持ち方、畝の作り方など、手を取り足を取り教えていただき、「YOU 遊」の皆さんにとっても大変勉強になったのではないのでしょうか。また、子どもたちも「YOU 遊」の皆さんの参加によって、より一層元気に生き生きと活動していました。忙しい中参加して下さい、感謝です。

3. 課題に感謝をそえて

麻績小学校司書 橋渡久美子

最初に書かせていただきましたように、麻績村の子どもたちを育むためのビジョンがはっきりしてくると、「YOU 遊世間」の活動もやりやすく、また、村をあげて迎える姿勢が整えられると思います。こちらの問題ですが、気持ちよく経済的にもご負担をかけない受け入れを考えていきたいと思います。また、今年は参加者全員がねらい、手立てをはっきり持って参加していただいたことが大変よかったと思います。そして、昨年麻績村の責任者の布山朋和さんをはじめ4年生の方々にも引き続き麻績村の活動を支えていただきましたことに感謝申し上げます。

信州すざか農業小学校豊丘校（5年目）

プラザ長 入澤清里（教育実践科学専攻3年）
副プラザ長 鈴木 梢（理数科学教育専攻4年）

○学生スタッフ名

鈴木 梢（理4） 宮尾 匠（社4） 西澤 直城（理4） 島田英一郎（理4）
吉田 智美（実3） 入澤 清里（実3） 原田さやか（清泉3）

○参加者数 子ども 66名 子どもたちの保護者の方々

○連携団体

須坂市教育委員会 信州すざか農業小学校豊丘校

○プラザの概要

- (1)子どもたちの健やかな成長に欠かせない自然・体験活動不足の現状を考慮し、子どもたちがたくましい精神力・想像力を身につけることを願い、総合的・自主的な体験活動の場として、年間を通した農業小学校を開設する。
- (2)子どもたちが、異年齢の子どもたちや保護者、地域の大人（主に高齢者）と触れ合うことにより、相互の仲間づくりや地域連帯感を養うとともに、地域の文化に触れることにより、ふるさと須坂の良さを再発見する手助けをする。

（信州すざか農業小学校豊丘校開設要項より抜粋）

という趣旨のもとで須坂市教育委員会が主体となって運営している活動である。須坂市豊丘「そのさとホール」及び豊丘地域公民館、農地（田畑併せて 1,800 m²）で活動が行われている。年間の活動計画等は農家先生とよばれている 26 名の地域の農家の方々と須坂市役所の決定に基づいて行われる。毎回の活動は、農家先生と須坂市役所の方々、須坂園芸高校に在籍する学生たちとともにやっている。私たち学生の役目は、農家先生と子どもたちの架け橋となることである。

○一年間の活動

月 日	授 業 内 容
4月17日	◇入学式 ◇オリエンテーション ◇ジャガイモの植え付け
5月8日	◇トウモロコシ、ネギの植え付け ◇畑の手入れ
5月22日	◇田植え
6月12日	◇サツマイモの苗の植え付け ◇大豆の種まき ◇畑の手入れ
7月3日	◇夏の遠足（五味池破風高原探索）
7月17日	◇麦の刈り取り、脱穀 ◇草取り
8月7日	◇ジャガイモ、トウモロコシの収穫 ◇そばの種まき
8月21日	◇おやき作り ◇御射山祭伝統行事を学ぶ（カヤの箸作り）
9月4日	◇白菜、野沢菜、大根の種まき
9月25日	◇稲刈り
10月9日	◇稲の脱穀 ◇サツマイモの収穫 ◇そばの刈り取り ◇秋のミニ遠足（豊丘離山へ）
10月23日	◇小麦の種まき ◇大豆の脱穀
11月6日	◇小麦の種まき ◇大豆の脱穀

11月20日	◇白菜、大根などの収穫	◇焼き芋と「ひんのべ」交流会
12月4日	◇そば打ち体験	
12月18日	◇もちつき大会	
1月8日	◇米粉でまゆだま作り	◇どんど焼き
2月19日	◇卒業式	

◇実践から得た「臨床の知」

つながりあっていく空間、農業小学校

入澤清里（教育実践科学専攻3年）

いろいろなタイミングが重なり、私が信州すぎか農業小学校に通わせていただくことになって1年近く経ちました。はじめは戸惑いばかりで、ただそこに居て流れるままに農業体験を行っていました。流れのままに動いていくこともはじめのうちは精一杯のことでした。しかし、毎回子ども、大人総勢 80~90 名の人々が居る中で、決められたゴールに向かって作業を進めていくことで徐々に人とのつながりが生まれ始め、農業小学校に少しずつ居場所ができてきたように思います。

きっと、子どもたちも同じような気持ちで毎回の活動を積み重ねていったのではないのでしょうか。農業体験を通して、自分以外の様々な立場の人と接することで、子どもたちは農業小学校で人とのつながりを作っていたように思います。農業小学校に入って子どもたちの目線に近づくと様々なつながりが見えてきます。農作業時、やさしく厳しく指導してくださる農家先生、一緒に農作業をしてくれる高校生のお兄さんお姉さん、わいわいがやがや関わってくる大学生、農作業を手伝ってくれるお父さんお母さん、同じ班のお兄さん、お姉さんなどなど、子どもたちは農業小学校という空間の中で人とのつながりをそれぞれに構築し、農業小学校を自分の心地よい居場所に変えていったのだと思います。様々な人と新たなつながりを作っている子どもたちを見て、周りの人と純粋にかかわることができる子どもたちの社会力をひしひしと感じました。

反省点としては、私自身が子どもたち、保護者の皆さん、市役所の方々と積極的にコミュニケーションがとれなかったことです。今まで先輩方がつなげてきた農業小学校との関わりを生かしきれず、受動的に参加してしまいました。来年度へ向けて、新たに農業小学校とのかかわり方や、大学生の位置づけ、望まれている役割を見直していきたいと思います。

最後に、私たち大学生をいつも温かく迎え入れてくださる農家先生の皆様、市役所職員の皆様、農作業をする子どもたちを見守り、お手伝いしてくださる保護者の皆様、いつも明るく一緒に活動してくれる子どもたちに、心から感謝いたします。一年間、ありがとうございました。

すぎか農業小学校のあたたかさ

鈴木 梢（理数科学教育専攻4年）

すぎか農業小学校は、学生は意欲さえあればいくらでも成長することのできる場であると思う。しかし、自分の中に意欲が足りないと、本当に何となく子どもたちと一緒に農作業をして午前中が終わってってしまうようなそんな場所である。昨年度、副プラザ長をしていたとき、

私は後者であった。すざか農業小学校での活動に慣れていなかったこともあり、与えられたことを与えられたままやって、子どもと触れ合い楽しんでいた。それがすざか農業小学校であると感じていた。しかし、今年度も参加することで、もっと奥が深く、つながりの厚い場であると感じた。自分の作った作物を食べるときの子どもたちの笑顔が、市役所の方や農家先生、学生を動かしている動力源になっている。さらに、農家先生や市役所の方の農作業の知識、技術を見て、触れることで子どもたちは学び、充実した時間を過ごすことができる。

農家先生、市役所の方、保護者の方、園芸高校の高校生、先生、信大生、そして子どもたち…それぞれがそれぞれの役目を持ち、協力して子どもを育てていく場であると思う。また、多くの世代の方との関わりによって、信大生は本当に多くを学ぶことのできる場であると思う。自分がもし教師になったときにも、子ども、保護者、教師だけの教育ではうまくいかないと思った。すざか農業小学校のような、地域は外せないものだと思う。地域があって、子どもは育てていくのだと思う。すざか農業小学校は、私に子どもの成長における地域の大切さを教えてくれる場であった。すざかは本当に温かいところだと思う。なにかつらいことがあっても、農家先生や子どもたちと話すだけで、すざかにいっただけでふっとんでしまう。ぜひ、他のプラザで「YOU 遊」の活動をしている学生に来てほしい。他のプラザとは違った魅力を感じてほしい。なくなってしまうようなプラザで、毎回2、3人しかいない信大生を本当に温かく受け入れてくださった農家先生、市役所職員の皆さま、園芸高校の先生、高校生、保護者の皆さま、優しい心を持った子どもたち、本当にありがとうございました。

農業小学校に参加して学べたこと

宮尾 匠（社会科学教育専攻4年）

すざか農業小学校での活動において、私は「臨床の知」の中にある子どもの対応をダイナミックに捉える、ということを経験することができました。農業小学校の子どもたちは、体験を通して様々な反応を見せてくれていました。私は、1人の男の子に田植えの時に「田植えをやってみてどう？」と聞いたことがあります。するとその男の子は、「おもしろーい」と言いながら、私にとっても楽しそうな笑顔を見せてくれました。このような反応を見せた一方で、畑を耕している時に「疲れた」と言って、途中で作業をやめてしまう子どもたちもいました。私は、この子に「頑張ってやろう」と声をかけましたが、その子は私から離れていってしまいました。この時私は、興味や関心が常に変化している子どもたちの反応を上手く捉えることができなかつたな、と反省をしました。考えていくと私は、子どもたちの反応をただ受けているだけで、自らアクションを起こしているということが少ないなということに気づかされました。もっと、自ら子どもたちに歩み寄っていかなければならないな、ということはこの農業小学校を通して感じました。このことに気づいてから、子どもたちが見せる様々な反応から、自分も子どもたちとともに楽しむことができるようになりました。すると、自然と子どもたちから笑顔が生まれるようになり、自分も子どもたちも楽しい時間を過ごせるようになりました。私が、子どもたちとの関わりあい方を少し変えただけで、以前とは全く違った子どもたちの反応に対しての捉え方ができるようになりました。そして、子どもたちと相互に関わりあうことの大切さを、改めて農業小学校で感じるすることができました。

◇関係各方面の皆様より

伝統行事御射山祭

信州すざか農業小学校豊丘校校長 羽生田郁雄

農業小学校は今年が開校以来初めて六十六名の児童が入学し、大世帯となった。授業のあるたびに農家先生は「おやつ」を作り時間内に間に合わせるのだから、朝も少し早くから天手古舞。親子、先生方等百二十人以上のおやつである。市販のものをなるべく使わず、農業小学校で取れたものばかりの自給自足である。それは地産地消であり、安心安全な食べ物を提供することを第一とし、少しでも子どもたちに喜んでいただくと同時に、栄養面にも工夫を凝らせなければならない。八月二十一日、この地方の伝統行事「御射山祭」を行った（本来なら八月二十六日である）。カヤの箸で小豆ごはんを食べる行事である。自分で使う箸は自分で作らせる。その時一人の女の子は「先生、中に入る（会場）のは班別でなければいけないのですか？」の問いに私は、部屋は超満員になるので奥からつめなければならないので「班別でなくてもいいよ」と答えた。それは女の子の作戦であったとは知らなかった。全員が席に着き、小豆ごはん、豚汁、おやきがテーブルの上に並べられていた。それぞれカヤの箸で「いただきます」の声で食べ始めた。ところが、二人の女の子がネギだけを前にいる女の子の器に移動が始まった。ネギ嫌いが「班別に席に並ばなくてもよいか」の意味であることが初めてわかり、子どもの作戦であった。ネギの嫌いな人は多くいるけれども、よく考えたものだと思った。子どもたちは色々教えなくても知恵をしぼり、相談をした結果であろう。その時その時、物事を消化する努力をしている。私はあまり強くは言わなかったが、ネギも栄養があるので食べるようにしなければ大きくなるのに大切だよ、と言うと、機嫌を悪くさせてしまった。でもその内にネギも食べれるようになることだろう。仲のよい友達同士、ワイワイガヤガヤしゃべりながらの御射山祭の出来事であった。

学生スタッフに感謝して

信州すざか農業小学校豊丘校事務局 友田一江

農業小学校は農業の大切さと、食べ物に感謝する気持ちを育む目的で、平成十七年度に須坂市豊丘地区に開校し、今年で六年目を修了しました。この農業小学校のある豊丘地区は、須坂市の東部に位置し、東は上信国境の山々に区切られ、北側山寄りの川に沿ってほぼ東西に集落が連なる農村地域です。水稻・野菜・酪農などの小規模農家が多いことが特徴でもあり、高齢化や後継者不足による遊休荒廃農地の解消が課題となっている地区でもあります。

そんな中、今年、六十六名の子どもたちが入学し、一年間活動してきました。低学年の子どもたちが多く、畑の作業も初めてなので大変でした。当日の天候によって授業が予定通りの内容にならない時もありましたが、信大の学生さんや、園芸高校の生徒さんに助けられながら、農家先生とともに協力して授業を進めることができました。大変ありがとうございました。一年が経過し、子どもたちは、鍬や鎌の使い方が上手になり、たくましく成長したと思います。子どもは、体験の中で育つことから、これからも、楽しく豊かな経験をできるだけ多くさせてあげたいと考えています。

信大の学生さんには、高校生と協力しながら、子どもたちと農家先生との間にはいつ、農

作業の補助や子どもたちが危険に会わないようになど、授業の進行のお手伝いをさせていただきました。色々苦勞もあったのではないかと思います、学生さんたちの若いパワーが、子どもたちの記憶の中に、楽しい農作業の経験や思い出とともに残すことが出来たのではないかと思います。大学の授業等、忙しい中、長野から豊丘まで、朝早く出かけていただいたことには本当に感謝です。

また、市内外で農業小学校も少しずつではありますが知名度も上がり、今年も、市外の児童が入学してきました。「豊丘まで来ると、農作業も楽しいけれど、大学生や高校生のお姉さんとお兄さんが、いつも一緒に作業をしたり遊んだりしてくれたのでとても楽しみだった」というお話を、子どもたちや保護者からお聞きしました。このように、多くの様々な立場の人たちの協力があって、ますます異年齢の子どもたちの交流の場が広がっていくように思います。

この一年間、ご支援ご協力をいただいた農家先生、応援してくださった保護者の皆様方、信大生・園芸高校生徒・先生、皆様方の今後の活動に期待し御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

信大生の皆さんへ

須坂園芸高等学校 野菜クラブ一同

最初の頃は、小学生に話しかけるのも緊張したけど、回を重ねるうちに自然に接することができ、小学生と一緒に野菜を育てたり、その野菜を使って料理したりできるので、また、農業小学校の魅力の一つを皆で協力してできたので楽しかったです。

(1年 白濱千尋 羽田理紗 福澤涼香 丸山千夏 宮腰万由 西澤)

農業小学校に参加して、様々な小学生と農業を体験してみて、地元ではなかなかやらないので、色んなことを学ぶことができました。小学生とも仲良くなれて、すごく楽しい思い出が沢山できました。

(2年 大島安理沙 奥山加奈子 高橋葵 佐藤詠美 北村拓己 矢坂浩樹 鈴木)

農業小学校を通して、普段あまり関わりのない世代と交流することができ、子供たちの笑顔が絶えなくて、たくさん元気とやさしいパンチが心に染みしました。約二年という短い間で、様々なことを体験し、いい経験ができました。

(3年 佐藤ちひろ 富永莉緒 丸山志織 中島美里 左澤郁香 藤井万智子)

「子どもは面白いな」と、私は大勢の子どもを見守りながら、ぽつりとつぶやきました。私は二年になって野菜コースを選びました。コースの先生に農業のことを説明された時に、やってみたいという気持ちが高まり、参加することに決めました。

農業小学校に参加した子どもや親はリピーターの数も多く、楽しみにしているように農家先生のお話や作業を聞いている姿がとても微笑ましい光景で、私も笑みがでできます。子どもたちも学校で農業体験を行っている学校もあるので、皆で教え合い、自分から何をするのかを考えている姿を見ていると、農業は人を成長させてくれるものだと感じました。

私たち、園芸生も子どもたちに教える立場ですが、子どもたちが自分の手で作業を行えるようにするために、あまり手を出さないようにしています。子どもたちには、作業のやり方や次に何をするのかなど、毎回その日に行う農作業の内容を分かってもらうために、パネルを使って説明し、見やすい絵やアニメ、クイズをだして子どもたちが興味をもってくれるような工夫

をし、大きな声で分かりやすく教えています。

現在、農業は後継者が不足し、高齢者が農業を支えている苦しい状態です。私達は、子どもたちに農業の楽しさを伝えることで、少しでも子どもたちが農業に興味を持ってくれることを願っています。それと同時に、私たち自身も農業小学校に参加することで、子どもたちと一緒に農業の魅力を見ることができました。これからも、私たちの活動を多くの人に知ってもらって、協力して新しい芽を咲かせてほしいと思っています。

(須坂園芸高等学校 野菜科学コース3年 中島美里)

本校生徒が農業小学校の活動に参加させていただくようになって今年で3年目になります。生徒たちは活動のノウハウを先輩たちから受け継ぎ自主的に活動していました。この活動を通じて生徒たちは、学校で学ぶことができない農業を学び、地域の伝統・文化に触れます。さらに小学生にわかりやすく説明するために自ら学びます。また、小学生や地域の方々、信大生と交流し、コミュニケーション能力を養います。本校の生徒たちは、小学生たちが笑顔で来てくれることを楽しみに活動をしています。自分で理解していることをわかりやすく伝える。そのためにはどうするか。イラストや模型、ときには実物を用いて説明します。その説明がうまく伝わった時は本当に嬉しそうです。逆にうまく伝わらないと次回への活力になるようです。

今年は農業小学校出身の生徒が、本校に入学しました。そして、農業小学校に教える立場として参加しています。また、本校卒業生も農業小学校に参加しています。この活動は本校へ入学前から卒業後まで続いている活動となりました。

このような活動は、本校だけではできません。主催者である須坂市教育委員会をはじめ、地元の農家、信州大学の学生、そして何より参加してくれる小学生とその保護者のご理解とご協力があるからこそ可能なのです。このような機会を生徒に与えてくれた多くの方々へ心より感謝します。

須坂園芸高等学校 野菜クラブ顧問 丸山暢之

信州大岡ふるさとランド（3年目）

プラザ長 山越 俊（社会科学教育専攻3年）
副プラザ長 宮尾 亘（教育実践科学専攻4年）

○学生スタッフ名

宮尾 亘（実4） 市川 香織（実4） 藤田 裕介（社4） 新開 夏実（実4）
渋谷美奈子（実4） 鈴木 梢（理4） 岩本 芙美（障4） 藤浦 修司（社3）
服部 直幸（理3） 谷屋 俊（社2） 北沢 瑞樹（理2） 大木 拓哉（院2）

○連携団体

放課後子どもプラン「わらわらクラブ」 長野市立大岡小学校 農村女性ネットワーク
長野市役所大岡支所

○年間活動計画

〈大岡小学校との活動〉		〈わらわらクラブとの活動〉	
4月22日	職員にあいさつ	4月20日	わらわらで遊ぶ
8月19日	大根畑整備	10月3日～9日	第二回通学合宿
8月20日	大根種まき	10月30日	合宿報告会
10月2日	大根間引き	12月20日	わらわらに遊びに行く
11月9日	大根収穫		
11月10日	大根出荷	〈農村女性ネットワークの方との活動〉	
11月23日	大根販売	6月13日	たけのこ採りツアー
11月30日	大根収穫祭	10月24日	大岡ひじり三千石収穫祭

○プラザの概要

私たち「信州大岡ふるさとランド」は、発足してから今年で3年になりました。このプラザは、大岡という地域が温かく、そして寛大に「信大 YOU 遊世間」の活動を受け入れてくださっているからこそ成り立つ活動であり、また通学合宿や学生企画を行うに当たって、大岡小学校の先生方、わらわらクラブ職員の方、地域の方々、保護者の方々など、様々な方の「子どもに対する愛情」からくるご支援、ご協力のおかげで活動を行うことができました。私たち学生も大岡の方たちのお気持ちにこたえられるように活動を続けてきました。

○今年一年の活動の様子

1. 「わらわらクラブ」の方々と活動例

今年2回目を迎えた「わらわら通学合宿」は、子どもたちが親元を離れ、学生たちと生活を共にするというものです。この合宿は学生が主体となって進めていくものではありませんが、合宿を行う上でわらわらクラブ、大岡小学校の先生方、大岡温泉、ハッピー号の皆さまなど、多くの方に協力していただいたことで実現できた活動です。

今回の合宿で大切にしたいことは、①相手の立場に立って考えよう、②目標に向かって挑戦しよう、のふたつでした。今回は振り返りシートに一日の振り返りだけでなく、合宿中に達成したい目標を子どもたち一人一人に設定してもらい、一日一日目標達成に向けて自分は何ができたのか、明日は何をすべきか記入して目標をもって一週間を過ごす、という形式にしました。今回の参加児童は3年生から6年生、初参加、2回目の参加の15人でしたが、それぞれ

が自分なりに合宿中頑張りたいことを決め、多くの子が最終日には「達成できた」あるいは「達成できなかったけれど頑張れた」という声を聞くことができました。このようにリフレクションシートや目標を読むと、15人の子どもたちを相手にしている中で、学生が知ることのできる姿がほんの一部、それも行動で表していることだけだと感じました。また通学合宿報告会では、通学合宿後の子どもたちの様子を保護者さんからお聞きしたり、合宿についての意見や感想を寄せていただくとともに、合宿中の写真をもとに学生が作成したDVDを上映し、そのDVDと学生からの一人一言のアルバムをプレゼントしました。

〈保護者さんの感想・意見〉(原文引用)

- ・家族とは子どもを違った目で見てもらい、また接してもらうことで今まで自分で気付かなかった良いところ、悪い所に気づき、人との関わり方を知ることにつながれば良いと思っています。
- ・やったことのない経験が増え興味を持ってもらえるものが増える。
- ・昨年に引き続き「絶対に行きたい！」と本人が希望し、帰ってきたときも「超～楽しかった！」と言っていた。
- ・うまくいなくて当たり前。学生さんも子どもたちも時にはぶつかり分かりながら(一緒に生活していると互いのいやな面も見えます) 成長していくことが大切かと思えます。問題が発生したとき、どう解決していくかを、子どもたちは年上の大学生から学び、学生さんたちは、また、子どもを自分の意のままに動かすことの愚かさ(むなしさ)を知ったのではないのでしょうか?親も毎日そうですよ。子どもを自分の思い通りに動かしても親側の一時の満足に終わってしまい、結局何の解決にもなっていません。親も毎日子どもから試され、それで成長していくものだと思っています。

他にも「自分から手伝いをしてくれるようになった」、「年下の面倒をみるようになった」等の意見もありましたが、「目に見えては何も変わらなかった」等の意見もありました。この合宿は2回目なのですが、子どもの中で「去年と同じこと」になっているのかもしれませんが、まだ2回目ではありますが、来年に向けてできるだけ問題点を見つけ、改善していかなければなりません。常に学生が向上心を持ち、「おかげさま」の心と、「子どもが真ん中」であることを意識して活動していきたいと思っています。

2. 農村女性ネットワークの方々との活動例

4月に、たけのこ採りをお手伝いさせていただきました。この日は土井先生に車を出していただいて、大岡に向かいました。そこで私たちはツアーでのお昼ご飯の調理や、野菜やみそなどの販売をお手伝いさせていただきました。目標を持って、皆で何かをやり遂げるというおばあさんたちの姿を見ることができたのは、私たち学生にとって、子どもではなく普段ふれあう機会の少ない地域のお年寄りの方との非常に貴重な体験となりました。大岡は限界集落、過疎集落というお話を聞きますが、活動をご一緒したおばあさんたちからはそのような何かさびしい雰囲気は一切感じることができず、逆にこちらが圧倒されてしまうようなエネルギーにあふれた方たちでした。

3. 大岡小学校との活動例

「夢の種プロジェクト」

大岡小学校とはおもに大根を育てる活動を通して連携をさせていただきました。そして、大根の活動を通して、大岡の自然、地域の方々のご協力を知ることができました。大根の畑は学校から 20 分ほどの距離にあり、周囲を林に囲まれていて鹿と出会えるほど山に近い場所になっています。

畑の整備をさせていただいたことが、大岡小学校との活動の今年初めての連携でした。畑は地域の方のご協力で耕してありましたが、去年同様平らな地面が見えているだけで、まだ何も畑らしい姿ではありません。この平らな地面に畝を起こしていくことが仕事です。先生方と学生で畝を起こしている中での会話では、「どのような活動の形であっても子どもが主役である活動をしていくことが重要である」ということでした。そして、これらの作業は、学校の先生方と地域の皆様が連携している姿をつぶさに学ぶことのできる非常にいい機会となりました。

◇実践から得た「臨床の知」

信州大岡ふるさとランドの経験を通して

山越 俊（社会科学教育専攻3年）

今年度「信州大岡ふるさとランド」のプラザ長をやらせていただきました。昨年の第一回わらわら合宿に参加したことがきっかけでこのプラザを引き継ぎたいと思い、プラザ長に手を挙げました。しかしながら、今年は他のプラザと違い副プラザ長に当たる人がおらず、主に昨年のプラザ長の宮尾先輩にアドバイスをさせていただくという形で活動をスタートしました。

外部の方々と子どもに関わる活動をしていくというなかで、多くのことを学ぶとともに、自分の至らなさ、力の無さをいやというほど感じました。自分がプラザ長で企画して、運営ができるのは、子どもたちのためにと協力し、支えてくれる方々がいたからこそだったと思います。特に通学合宿では、わらわらクラブ、大岡小学校の先生方、大岡温泉、ハッピー号のみなさま、参加してくれた子どもたち、保護者様方、また参加してくれた学生スタッフが子どもたちのことを思って通学合宿の実現に向けて支えてくださったからこそその実現です。そして、その支えやご協力を子どもたちが感じてくれたおかげで、いい合宿を送ることができたと思っています。

今年一年間をこの「信州大岡ふるさとランド」で過ごしてきました。それができたのは、この活動をするにあたって小学校の先生方、わらわらクラブの方々、大岡の地域の方々、土井先生はじめ信州大学のみなさんのご協力、ご指導があってこそだと思っています。活動しているうちに、この支えになっていただける方々のことをそれが当たり前のように感じてしまうようになり、活動中の子どもたちの笑顔も自分たちの力だけで成り立っているように感じてしまいます。「子どもたちが真ん中」にある活動をするためにも、「おかげさま」の心を常に意識することが重要だと感じています。

この一年間本当に多くのことを学ぶことができました。本当にありがとうございました。

◇連携団体からの評価

通学合宿を終えて

大岡子どもプラザ施設長 金澤 仁

平成 21 年に始まった大岡小学校児童の通学合宿も、22 年 10 月、無事に 2 度目の合宿を終

えることができました。16名の参加者はそれぞれの目標に向かって学生の皆さんと共に有意義な日々を過ごしました。もちろん、初めて家族から離れる子供にとっては寂しい時もあったと思いますが、それ以上に学生の皆さんの存在が大きく、全員が楽しく思い出に残る経験となりました。

大岡小学校は全校生徒48名の小規模校ですが、特色ある学校運営により様々な経験を積みながら子供たちが成長しています。しかし、登校・下校もスクールバスという環境の中で育つ子供たちには、心の深いところに残る人間関係が不足しないと言い切れません。

そんな環境の中で毎年行われる通学合宿は、子供たちにとって楽しみの一つであり、挑戦の一つともいえるでしょう。そして、これから教職を目指す学生さんたちにとっても、大きな体験であることは言うまでもありません。まして、7日間をともに過ごし生活するとなればなおさらです。

お別れの日、自然に涙があふれて止まらない子供たちは、何を思っていたのでしょうか。そして、同じように涙が止まらない学生の皆さんは、何を思っていたのでしょうか。子供たちにとって憧れの先輩や先生、それは彼らのこれからの人生を大きく左右するほどインパクトのある存在であって欲しいものです。通学合宿に参加した子供たちが、自分も大きくなったら学生の皆さんのような活動してみたいと思ってくれたら、素晴らしいことだと思います。

これからも、子供たちにとって良いお兄さんお姉さんとして明るい笑顔で接していただき、近い将来、多くの子供たちに勇気や努力の大切さ、人を愛することや思いやることなどを伝えられる活動を行っていただきたいと思います。

また、子供たちが悩んだりしたときには、躊躇することなく子供たちの人生を変えられるような適切なアドバイスのできる人になって欲しいと思います。大学の授業の合間の活動は大変だと思いますが、これからも子供たちのため、そして自分自身の夢実現のために、精一杯の努力を続けてください。

出会いの中で生かされる

大岡小学校校長 小岩井彰

17期「YOU 遊世間」の皆さん、大岡の様々な場面にかかわっていただき、ありがとうございました。学校の現場でつくづく思うことは「子どもたちに生かされている」「地域の皆さんに支えてもらっている」ということです。本気になって学校を開くことで、多くの「縁」が生まれます。楽しいことばかりではない。苦しいことも多いのです。しかし、地域の宝である子どもの「育ち」を真ん中にしたとき、創造的な教育活動が生まれ、様々な問題の解決策が開けます。学校を開き、自分の願いを発信し、子どもの本当の育ちにつなげるために「一歩踏み出す」覚悟が、常に問われていると感じています。

大岡は「限界集落」などと呼ばれ、高齢化率は長野県トップです。しかし、大岡の「人を大切にしたいの深さ」も県下トップでしょう。それが子どもを育てるのです。

通学合宿も2年続けていただきました。おそらく、来年は中学生が参加する県下初の合宿になるはずです。皆さんが続けてくれたおかげです。3年目の合宿が楽しみです。

多くの皆さんとの出会いに感謝。熱に感謝。そして、これからの活躍を期待しています。

今年、大岡小学校の職員と地域の方々による「おかげさまの会」に参加した3名の学生諸君

からいただいたメールを紹介します。共に汗して進みましょう。

先生方や地域の方との飲み会で「子どもは地域の宝、学校は地域の砦、地域の方は学校にとって宝である」心に残りました。地域の皆さんが子どもたちのことを本気で考えてくれていることを強く感じました。子どもたちは、多くの人に見守られている環境だからこそ、人と関われ、人を好きになれる。また、子どもを認めてくれる大人に、教師や親だけではなく、地域の人もいるということの大切さを大岡の子どもたちの成長を見て強く感じます。

自分が教師になった時、地域の人が学校に入れる環境を作りたいと思いました。

大岡にかかわらせていただくことで、大学の授業では学べないことをたくさん教えてもらいました。「大岡に来てどうだったか」と聞かれたとき、真っ先に思い浮かんだのは、「おかげさまの気持ち」です。傲慢な自分、未熟な自分、無知の自分に気付かされ、謙虚に、そしておかげさまの気持ちで生きていくことの大切さを実感させられました。これからも「子どもたちにかかわらせていただいている」ということを常に頭の片隅に置き、常に夢を抱いて追い求めていける人になりたいと思います。

大きく温かい懐で私を迎えていただきました。乾杯の際に「80歳を過ぎて、子どもたちから学ぶことがある」という言葉をお聞きして、どーんと心を打たれ、私も普段子どもたちから学ぶと口にはしていますが、言葉の重みを感じました。地域で教育や子どもについて考え、育てている大岡の素敵な姿を目の当たりにして、もっと大岡に行っていればよかったと思いました。あのような席で涙を流し、翌日には大変なすがすがしさを得ていました。

教師、教育、将来についてさまざま考えるところがありましたが、先生方、地域の方々から貴重なお話をいただけたことや、大きく温かい懐で話を聞いていただき、ほっとして涙が出たのだと思っています。この感動を仲間に伝え、また大岡へ行きたいと思っています。

第9回 YOU 遊フェスティバル

実行委員長 藤浦修司 (社会科学教育専攻3年)

○実行委員名

藤浦 修司 (社3) 小賀坂佳子 (理3) 三石 梨沙 (理3) 内川 舜也 (実2)
佐藤美沙希 (実2) 町田 香帆 (実2) 松田 祐輝 (社2)

○講座長名

木内 浩司 (理2) 岩本 美美 (障4) 鈴木 梢 (理4) 平澤 里恵 (生3)
武藤 成美 (生3) 原科 勇希 (理2) 飯島 理沙 (理4) 市川 香織 (実4)
峰村 和裕 (理3) 服部 直幸 (理3) 勝海 公平 (社2) 太田 香子 (社3)
金井 和也 (心3) 佐久 理絵 (理3) 入澤 清里 (実3)

○参加者数 子ども約 120人 学生スタッフ約 230人

○連携団体

長野市 PTA 連合会 教育学部附属長野小学校ほか

○プラザの概要

「YOU 遊フェスティバル」は、年に一度、教育学部のキャンパスに子どもたちを集めて講座を開き、子どもたちと1日一緒に活動するイベントです。ただ、学生主体のイベントであり、実行委員会での話し合いでどのような「YOU 遊フェスティバル」にしていくかを決めていくので、その年々によって内容も異なります。

「第9回 YOU 遊フェスティバル」は、「つながる・ひろがる・笑顔の輪」をテーマに取り組みました。子どもたちも学生も、「できたよ」「わかったぞ」という子どもたちの一つひとつの成功や発見を参加者がみんな喜んで笑顔になれるようにという願いを込めました。さらに、はじめて出会う子どもたちや学生スタッフが交流をし、一つのことに取り組む中で、協力することの素晴らしさや達成感をともに味わうことで、笑顔がみんなに広がることを期待して取り組んできました。

今年の「YOU 遊フェスティバル」は、例年同様2日間の日程で行いました。1日目は、講座や講座以外の学生同士が交流を深め、同期や先輩後輩のつながりができるよう、学生レクリエーションや前夜祭を企画しました。学生レクリエーションでは、教育キャンパスを知らない1年生がキャンパス内をめぐれるようにしたり、グループ内で関わり合いながら取り組める課題にするなど工夫しました。

この「YOU 遊フェスティバル」には、信州大学以外にも、上越教育大学 (5人)、清泉女学院短期大学 (1人)、長野県短期大学 (17人)、文教大学 (1人)、松本大学 (1人)、横浜国立大学 (5人) の学生が参加してくれました。「いろんな話が聞けた」(信州大学2年)、「自分たちの大学とは違って楽しむことが一番にある」(上越教育大学3年) など、お互いに活動を通じて交流できました。

○当日の日程

<平成22年11月20日(土)>

9:00～	学生集合
10:00～	学生レクリエーション
13:00～	講座ごとに準備・打合せ
17:30～	前夜祭
20:00	解散

<平成22年11月21日(日)>

7:30～	朝食
8:30～	子ども受付
9:00～	開会式
10:00～	講座ごと活動
14:00～	閉会式
15:00～	子ども完全解散・片づけ
16:30～	リフレクション
17:30～	後夜祭
20:30	完全解散

○会計報告

収 入

学生参加費	562,700円
子ども参加費	37,200円
合 計	599,900円

支 出

運営・学生食事等	476,326円
講座物品等	118,895円
残 金	4,679円
合 計	599,900円

○講座一覧

	講 座 名	講 座 長	スタッフ
1	みんなで楽しく!!ソーラン節	木内浩司	27名
2	おばけやしきをつくろう! ～みんなを怖がらせることはできるかな!?～	岩本英美 鈴木 梢	19名
3	わたしたちのおやき屋さん	平澤里恵 武藤成美	23名
4	タイムトラベラー ～タイムマシン作っちゃいました～	原科勇希	28名
5	巨大人生ゲーム!!	飯島理沙 市川香織	25名
6	ドロリッチ!	峯村和裕 服部直幸	15名
7	ほくほく芋畑牧場 ～バターって作れるんだ～	勝海公平	30名
8	ぷっわぶわだよ バルーンワールド	太田香子	22名
9	つくってわくわく!楽しい工作	金井和也	11名
10	夢のマイホーム☆	佐久理絵	17名
11	子育てを語ろう ～学生の想い・親の想い～	入澤清里	16名

○一年間の活動

7月上旬	第9回 YOU 遊フェスティバル実行委員会 発足
7月下旬	講座長募集 第一回講座長会
10月中旬	学生スタッフ募集
10月中旬～	講座長会を随時開催
10月下旬～11月中旬	子ども募集
11月20、21日	第9回 YOU 遊フェスティバル

○講座内容

1 講座名 みんなで楽しく!!ソーラン節

講座長 木内浩司 (理数科学教育専攻2年)

○学生スタッフ名

石原加奈子 (実4)	渋谷美奈子 (実4)	黒澤 春香 (生4)	鈴木 文香 (生4)
邊田 卓馬 (心3)	国澤 結子 (生3)	稲川 沙良 (織3)	百瀬 友博 (織3)
岡本 侑子 (工3)	佐藤あかね (障2)	村松 春美 (生2)	伊藤 貴文 (経2)
政清まどか (経2)	原田 惇史 (医2)	井上 弘憲 (工2)	梅津 翔子 (理1)
森本壮一郎 (農1)	廣瀬 早織 (人1)	佐藤美沙希 (人1)	高橋 義明 (人1)
ソ・カンウ (工1)			

(注) 以下の“理”は理学部を指します。

下村えりか (理2) 新井 健 (理2) 日下部智也 (理2) 岩田真利江 (理2)
篠田 健太 (理1)

○参加者 子ども5名 保護者2名

○講座の概要

子どもたちとソーラン節の要素を取り込んだアイスブレイクなど、遊びを通して関わり、ソーラン節の振付を共に覚えていく。最後には、全体の前で発表できるところまでもっていく。

○当日の活動日程

9:45-10:00	自己紹介・アイスブレイク
10:00-11:40	午前の練習 (振り付け)
11:40-12:30	昼食
12:30-13:25	午後の練習 (振り付け)
13:25-13:45	仕上げ (フォーメーション)

○当日の子どもの様子

全体で子どもたちに自己紹介をしてもらいました。その後で、運営しやすいように3つのグループに分けました。次に、学生側から子どもたちに本日教えるソーラン節を演舞という形で披露しました。講座に参加してくれた子どもの中には、一昨年、去年と参加してくれたリピーターの子もいたのですが、中には初めての子もいたのでソーラン節の基本動作が入った、かにさんジャンケンというアイスブレイクを行いました。初めは自己紹介でも恥ずかしがっていた子にも、笑顔がこぼれていました。続いて、ソーラン節の細かい振り付けを教えていきました。12時前になった頃、いったんお昼休みを取りました。お昼休みは、班毎に食事をとりました。もうこの頃には、子どもたちも学生に心を開いてくれていて、一緒に鬼ごっこやサッカーをして遊んでいる姿が見受けられました。そして、午後の部は、お腹もふくれより元気になった子どもたちと最後の仕上げをしていきました。準備の段階で一番心配していたのは、当日子どもたちが私たちが考えたスケジュール通りに振り付けを覚えてくれるかどうかでした。ですが、細かいところまでしっかりと覚えてくれ、皆で一曲踊れるまでになりました。そして、閉会式時には堂々と遊フェス参加者の前で発表することができました。

○反省

感想として： 去年も参加したのですが、今回は講座長という立場で参加しました。準備段階で他の学生スタッフに助けられることが多く、迷惑もかけてしまいました。ですので、本当に講座長として機能できていたのかを問われると疑問ですが、当日の子どもたちや学生スタッフの笑顔が見られたときには、なんだかほっとしました。また、講座も終わり最後の発表も終わった時に、参加してくれた子どもの一人に「とっても楽しかったよ！来年もまた来るからね！」といわれた時は本当に嬉しく、目に熱いものがあふれてきました。

反省： 3つのグループ分けや初めのアイスブレイクについては去年のアレンジということであまりひねることなく済ましてしまったのですが、リピーターの子にとってはつまらないものになってしまったんじゃないかと思った。学生の方が子どもの数よりも圧倒的に多く、子どもを取り囲むような場面が見られ、子どもにとっては圧迫感・威圧感を感じてしまう時もあったのではないかな。もっと積極的に学生側から子どもに自己開示していければ、子どもともより仲良くなれたのではないかな。

2 講座名 おばけやしきをつくろう！～みんなを怖がらせることはできるかな!?～

講座長 鈴木 梢 (理数科学専攻4年)

講座長 岩本芙美 (障害児教育専攻4年)

○学生スタッフ名

新保亜沙子 (理4)	塚原 昌裕 (社4)	宮尾 匠 (社4)	一條 まな (言4)
菊池ゆかり (言4)	福田 朱里 (障3)	谷口美紗子 (障3)	石田 育恵 (障3)
高橋奈津子 (障3)	大井このみ (理3)	原田さやか (清3)	遠藤 恵 (芸2)
和田佳奈誉 (障3)	中沢 洋平 (社2)	関谷 将司 (社2)	
二本松雄太 (松院1)	渡辺 友紀 (上3)	林 源起 (横3)	

○参加者 子ども 17名 保護者 2名

○講座の概要

怖～いおばけやしきを自分たちでアイデアを出しあいながらつくり、みんなを思いっきり驚かす。

○当日の活動日程

9:55 はじめの会 (アイスブレイク、部屋決め、劇)
 10:15 おばけやしきづくり開始 (班ごとに作戦会議を行った後、制作)
 12:00 写真撮影 (班、全体)・昼食
 12:45 おばけやしきめぐり開始 おばけ役：さらやしき班 お客：はなやしき班
 13:05 おばけ役、お客チェンジ
 13:35 おわりの会 (劇、プレゼント)

○当日の子どもの様子

朝、まずアイロンビーズで作られた名札を受け取って、目を輝かせる姿があった。開会式の時は、友だちとばかり一緒にいた子も、班に入ってから自分の特技を生かし、楽しんでおば

け役をする姿が見られた。はなやしき班、さらやしき班両方とも、学生スタッフや、班の仲間と協力して制作する姿が見られた。初対面の子どもたちでおぼけやしきというひとつのものを協力して作るという点に不安があったが、それぞれ自分の持ち場や驚かし方を考えて、班で協力してとても怖いおぼけやしきをつくり、お互いのおぼけやしきを楽しむ姿が見られた。

○反 省

しらすきに絵具で色をつけたり、コンニャクを天井から吊るしたり、霧吹きを噴射しながら追いかけてきたり…子どもたちの発想のすごさや視点の意外さ、人を驚かしたときの何とも言えない嬉しそうな笑顔に出会えた講座でした。用意してある材料から自分で好きなものを選び、班の友達や学生スタッフと各々が工夫をしながら真剣に制作に取り組んでいる姿はとても楽しそうでした。笑顔があふれていました。当日このような子どもの姿に出会えたのも、事前の学生スタッフの準備や話し合いがあったからだと思います。通路や隠れる場所を作って用意しておいたり、置いておく材料や作戦会議のやり方をみんなで考えたりしました。各講座長が集めた知らない人だらけのメンバーだったと思いますが、準備を通して学生同士の仲も深まりました！また、導入と終わりの寸劇、子どもたちの緊張をほぐすアイスブレイク、アイロンビーズで作ったかわいい名札、集合写真入りのプレゼント…どれも子どもたちの心に響いたのではないかと思います。YOU フェス4年目で初めての講座長をし、支えてもらったり協力してもらったりすることのありがたさを感じるとともに、今までで一番の達成感を味わうことができました！おぼけやしきを作る楽しさに気づいてしまったので、またどこかでやりたいです。(岩本美美)

YOU フェスの企画を考えるのは夏なので、また今年も夏っぽい企画になってしまいました。でも、やってみるととても私たちに楽しい企画になったと思います。「おぼけやしきをつくろう！」という講座に決めてから当日まで、本当にいろいろな気持ちになりました。とても充実した時間でした。岩本さんとは、3年の時湯谷小子どもランドで1年間一緒に企画運営をしていました。あの1年間はとても大変だったけれど、もう一度、岩本さんと企画したくて誘いました。準備や話し合いの段階から本当に楽しく、ダイソーに1日2往復して段ボールをしこたまもらってきたり、どうしてもアイロンビーズの名札にしたいくて2人でガストで試作したけれど、アイロンなんて持っていなかったのでくっつけることができず、そうっと家まで持ち帰ったことや、当日のありとあらゆる想像をして笑い合ったことなど、何もかもが今思いだすと切なくなってしまうくらい楽しいことばかりでした。当日は本当に充実していて、おぼけやしきに入ると全力で驚かしてくる子どもたちの姿が見られ、ここまでやってきてよかった、スタッフのおかげだなあと、心から感じました。私の中で一生忘れられない、YOU 遊としての最後の企画になりました。学生スタッフ、参加してくれた子どもたちのおかげです。そして、一緒に講座長をした岩本さんについては、準備の時のことなどいろいろ思い出して、1人で運転しながら泣くほど感謝しています。何度一緒に苦しいことを乗り越えてきたか、また楽しい時間を過ごしたかわかりません。大学に入って、YOU 遊に入って、岩本さんに出会えたことは、私の最高のご褒美です。ふみちゃんありがとう。(鈴木梢)

3 講座名 わたしたちのおやき屋さん

講座長 平澤里恵 (生活科学教育専攻3年)

講座長 武藤成美 (生活科学教育専攻3年)

○学生スタッフ名

奥村 萌 (生3)	浅川 沙織 (生3)	三好 友世 (生3)	片原 範子 (理3)
太谷 春花 (言3)	浦嶋 宏一 (実3)	吉田 幸司 (社3)	田中いずみ (生2)
八木美由希 (生2)	赤羽 成美 (生2)	小林 友美 (実1)	羽田 鋭 (実1)
宮崎 成美 (言1)	北原 拓真 (生1)	春名 昌明 (生1)	斉藤 瞳 (生1)
平田 奈央 (生1)	上田亜紗子 (上3)	小澤笑美香 (横1)	

○参加者 子ども10名

○講座の概要

子どもたちが郷土料理のおやきをもっと身近に感じ、楽しみながらおやき作りをする。

○当日の活動日程

10:00	初めの会、アイスブレイク	12:00-12:30	焼く → 蒸す
10:30-10:50	生地作り	12:30	完成
10:50-11:10	生地を寝かせる		作ったおやきを班毎に食べる
	あん(じゃがチーズ)作り	13:00	片付け
11:10-12:00	生地を切り分ける、包み方の説明	13:20-13:30	リフレクション
	野沢菜・かぼちゃのあんを包む	13:30	終わりの会
	じゃがチーズのあんを包む	13:45	講座終了、体育館へ移動

○当日の子どもの様子

5つの班に分かれて、みんなで協力しながらおやき作りをしました。初対面同士の子どもたちは、最初は緊張している様子でしたが、アイスブレイクで学生スタッフの考えた『おやき太郎』が登場する劇や、○×クイズによって、たくさんの笑顔や元気な声を聞かせてくれました。調理室に入ると、率先的に自分のエプロンをつけて、手を洗い、おやきを作るのを心待ちにしている様子でした。講座長の説明もきちんと聞いて、生地作りに入ると、どの班も小麦粉の感触や生地をこねるのを楽しんでいました。水を含んで硬くなった生地をこねるのは力作業で、交代で協力しあいながらやっていました。あん作りでは、年齢や調理経験によってできることに差はありましたが、学生スタッフと協力しながら、自分にできることを一所懸命にやっている姿をみることができ、とても微笑ましかったです。完成したおやきをおいしそうに食べていて、おうちにも持ち帰りました。楽しくおやき作りをして、「自分にもおやきが作れるんだ」と、とても満足そうでした。

○学生スタッフの感想

年少さんから小学校5年生まで、いろいろな子どもが集まって、“おやき作り”という1つのことをやるのは大変でしたが、学生と子どもが正面から向き合って、一緒にやることでお互いに良い刺激になったように思います。子どもの「おいしい」という声、笑顔、それを見守る学生の姿が一番の収穫になりました。また、改善点として、それぞれの学生にうまく指示を出せ

ず、時間を有効に使えない場面があったので、どのように指示を出すのかなど、子どもの動きだけではなく、学生の動きももっと詳細に考えておくべきでした。直前になってお願いしたりすることも多かったので、指示・連絡は早め早めに行っていきたいです。全体を通して、“つながり”をいろんなところで感じた YOU フェスとなりました。ありがとうございました。(平澤)

去年は『本日開店！ミニパン屋さん』の学生スタッフという立場で参加して、「今度は郷土料理のおやきを子どもたちと作れたらいいな」という願いを1年前の YOU フェスで感じていました。その願いを今回の YOU フェスで実現することができて本当に嬉しかったです。しかし、講座長という立場は思っていたよりも大変で、学生や子どもたちに「楽しかった。この講座に参加してよかった」と思ってもらえるようにと、講座内容や動きをゼロの状態から考えて作りだしていくというものでした。料理講座のため、当日がメインであり、予行練習はできなかったのも、子どもたちや学生の動きをイメージして予定を組み立てていくというのがとても大変でした。当日もうまくいくか不安でいっぱいでしたが、予想以上に学生や子どもたちがスムーズにテキパキ動いてくれて、余裕を持っておやき作りを楽しむことができ、リフレクションでも一人ひとりの子どもたちから「楽しかった。〇〇のおやきが1番おいしかった」というような声をきくことができました。自分は直接的に子どもとたくさん関わることはできませんでしたが、学生スタッフと子どもたちが楽しそうに関わりあっている様子をたくさん見ることができて、とても嬉しかったです。リーダーとして指示を出したり、みんなを引っばっていくのが苦手な、こんな頼りない講座長でしたが、学生スタッフや子どもたちがたくさん支えてくれたおかげで、この講座が成功したのだと思います。講座の考案からずっと一緒に頑張ってきた平澤さん、この講座を選んでくれた学生スタッフや子どもたちへの感謝の気持ちでいっぱいです。学生も子どもたちもそれぞれ何か感じて得るものがあったようで、そういう“きっかけ作り”をできたことが自分の収穫でした。講座長を経験することができて本当に良かったです。ありがとうございました。(武藤)

4 講座名 タイムトラベラー ～タイムマシン作っちゃいました～

講座長 原科勇希 (理数科学教育専攻2年)

○学生スタッフ名

原科 勇希 (理2)	佐藤 裕文 (理2)	増田 雄樹 (理2)	早川 貴久 (理2)
松尾 海 (理2)	栗原 卓也 (理2)	栗岩 優 (理2)	鈴木喜多朗 (理2)
後澤 駿一 (理2)	高橋 涼介 (理2)	中村 直樹 (理2)	清水 省吾 (理2)
小谷 竜平 (理2)	塩入 由佳 (理2)	寺井 美穂 (理2)	菊池 智香 (理2)
廣田 美緒 (理2)	山口 千晴 (理2)	玉井 瑞紀 (数2)	北沢 瑞樹 (数2)
田中沙結美 (言2)	三石 早紀 (実1)	百瀬あきほ (実1)	坂口奈緒子 (障1)
塩澤 香奈 (障1)	田中 洋輔 (上1)	奥村 大樹 (横1)	

○参加者 子ども8名

○講座の概要

W 館を全フロア使用し、エレベーターをタイムマシンに見立てて各階各時代を旅し、様々な問題を子どもたち同士が協力して解決していく企画です。ゲームの内容は理科実験のようなものも多く、興味を持って楽しんでもらう企画です。

○当日の活動日程

9:45 午前の部開始	12:00~12:45 昼食
アイスブレイク	13:00~13:45 午後の部開始
10:15 各班ごと問題解決	

○当日の子どもの様子

班を3つに分け、それぞれ班つきの学生と一緒に各時代を回っている様々な問題をクリアしてもらいました。子どもたちもストーリーにのめりこんでいてすごく楽しそうに走り回り、真剣に課題に向き合っている姿は非常に印象的でした。1F: 研究所ではヴァンデグラーフを使っの「100人おどし」や、2F: 江戸時代ではサイホンの原理を使ったゲーム、3F: 中世ヨーロッパでは空気砲を使ったゲーム、4F: エジプトではパズル、5F: 未来では光の反射を使ったゲームなど、理科実験の要素を多く入れました。不思議な現象を目の前で見た時の子どもたちの目の輝きは忘れられませんでした。また、一緒に行動していくうちに子どもたち同士が協力しあう姿が多くみられるようになりました。子どもたちのたくましい姿が多く見られました。とても楽しんでくれたように思います。

○反省

去年も YOU 遊フェスティバルに参加させていただき、子どもたちの笑顔と先輩たちの努力を目の当たりにして感動しました。今年は、2年ではありますが講座長として参加させていただきました。不安は非常にありました。本番が近づくにつれ不安も増していきましたが、同じ講座の仲間に支えられ、結果大成功という形になりました。本当に人と人とのつながりを感じ、その力のすごさを実感しました。本当に感謝しています。また、今回も子どもたちの笑顔をよく見ることができました。理科のメンバーが多かったため、理科らしさを出そうと工夫したことも、子どもたちがすごく興味を持ってくれたのだと思われ、本当に良かったと思います。反省点としては、安全の面や集団行動の難しさなど、やってみて初めて気づくことが多くありました。今回の経験をしっかり生かしてまた、子どもたちの笑顔を増やすような活動をしていきたいと思います。この講座をやることができ本当に良かったです。ありがとうございました。

5 講座名 巨大人生ゲーム!!

講座長 飯島理沙 (理数科学教育専攻4年)

講座長 市川香織 (教育実践科学専攻4年)

○学生スタッフ名

鈴木 祐香 (理4)	布山 朋和 (実4)	藤田 裕介 (社4)	田畑隆太郎 (実4)
高池 亮輔 (保4)	島田英一郎 (理4)	滝澤雄太郎 (理4)	西澤 直城 (理4)
小松 静 (障4)	島崎 涼子 (芸4)	東野 千尋 (芸4)	早川 和宏 (理4)
園田 泉 (実4)	佐藤 悠司 (心4)	土屋 知毅 (心4)	井口 哲 (実1)
遠藤 颯 (実1)	岩瀬 由依 (言1)	田口 詩織 (言1)	榊原 典子 (生1)
石井 望 (障1)	小池 陽愛 (文4)	高橋 真依 (県短 OG)	

○参加者 子ども 19名 保護者 4名

○講座の概要

ボードゲームで有名な「人生ゲーム」を巨大化し、駒でなく、自分たちが実際に動く「巨大人生ゲーム」で遊びました。全員で遊ぶゲームも設け、ただ巨大にした人生ゲームで遊ぶだけでなく、チームで協力しながら賞金を狙うものも作りました。

○当日の活動日程

9:45 導入、チーム分け、アイスブレイク	12:30 人生ゲーム午後の部開始
10:15 人生ゲーム午前の部開始	13:10 結果発表、風船飛ばし
12:10 お昼	

○当日の子どもの様子

当日の子どもたちはとても楽しそうでした。チームは5つに分けたのですが、ほとんどが当日初めて会ったメンバーになるようにしてありました。最初は緊張していた子どもたちも、ルーレットを回す順番や、チームで協力するゲーム(イライラ棒、巨大神経衰弱、運命の赤い糸、巨大ジェンガ)などで打ち解け、みんなで協力していく姿が見られました。

他のチームが進む順番の時もきちんと待つことができる子どもたちで、学生の指示もきちんと聞いてくれ、みんなで楽しむことができましたと思います。

最後に自分たちの夢を書いた風船を飛ばしたとき、人生ゲームで負けてしまったチームの子どもたちも含め、みんなが笑顔になることができました。

○反省

<改善点> いろいろな場合を想定した事前準備や打ち合わせが必要だったと感じました。例えば、時間が足りなくなってしまったときのルール変更、各ゲームに時間がかかりすぎてしまった場合の対応などがあげられます。また、お昼休みが短くなってしまい、子どもたちを急がせてしまい申し訳なく思いました。食休みの時間や、広い体育館で自由に遊べる時間を持てたら、もっと子どもたちの笑顔を見ることができたのではないかと感じました。

<よかったこと> 準備の段階からスタッフ全員がそれぞれのいいところを発揮し、協力し助け合い、みんなで作り上げた講座でした。この講座を通して、みんなでひとつのものを作り上げていくことのすばらしさを改めて感じることができました。

当日は、盛り上がるのか不安な部分もありましたが、ゲームをしていく中で「がんば

れー！」と自然に応援し合ったり、一緒に喜び合ったりする姿を見ることができました。子どもたちのおかげで、とてもいい雰囲気の中でゲームを進めていくことができましたと思います。

この講座を支えてくださったみなさん、本当にありがとうございました！（市川、飯島）

6 講座名 ドロリッチ！

講座長 服部直幸（理数科学教育専攻3年）

講座長 峯村和裕（理数科学教育専攻3年）

○学生スタッフ名

井上 岳人（理3）	金箱 仁志（理3）	河住 恭兵（理3）	高見澤 誠（理3）
田澤 岳哉（理3）	土屋 克明（理3）	湯本 哲（理3）	木村彩乃（県短3）
谷屋 俊（社2）	有田 一意（理1）	遠藤 美奈（理1）	森田 文子（理1）
山口 響（横1）	山崎 卓也（上1）		

○参加者 子ども 18名

○講座の概要

メインの活動は「自分のオリジナルスライムを作ろう」として、午前中はスライムも無色のものから色をつけるというように段階を踏み、午後は班で1つの大きなスライムを作り、ゲームをして活動した。

○当日の活動日程

9:45～10:10 移動	12:00～12:45 お昼
10:00～10:15 説明（1日の流れとスライム作りの説明）	12:45～13:30 活動③ドロリッチタイム
10:15～10:45 活動①はじめてスライム	13:30～13:45 片づけ 終わりの会
10:45～12:00 活動②カラフルスライム	13:45～14:00 体育館へ移動

○当日の子どもの様子

この講座には比較的多くの子どもが集まってくれたが、当日の朝は学生一人ひとりが誰かしらの子どもに付き添い、子どもが一人きりであることが無かった。開会式から活動場所への移動の間も子どもと学生の間で多くの会話がなされ、全体的に明るい雰囲気の中で活動を開始することができた。

子どもたちは序盤からスライムを作ることに積極的だった。グループごとに用意された材料を使いどんどんとスライムを作る作業に取り組んでいた。ただ、同じように材料を混ぜ合わせても、うまくスライムができる子となかなか固まらない子がいた。後者の子どもたちは、周りの子どもがうまくスライムを作っている様子を見て、自分のスライムがなかなかうまくできないことで不安そうな表情を見せていた。しかし、グループについている学生の力を借りながら材料の量を工夫することで、だんだんスライムが固まりはじめると、楽しそうに材料をかき混ぜる様子が見られた。

スライムをひとつ作れるようになると、どんどん次のスライムを作ろうとする子どももいれば、そのひとつのスライムを混ぜ続けたりする子どももいた。前者の子どもは、用意された色水を使って様々な色のスライムを作り、子どもによっては一人分として用意した容器をすべて

使うほどスライムを作っていた。後者の子どもは、できたスライムを更に混ぜてみたり材料を足して量を増やしたりしていた。どちらの子どもにしても、はじめは決められた量を計りながら材料を混ぜていたが、慣れてくると感覚で量を調節しながら材料を混ぜてスライムを作っていた。

午後の活動でグループごとにひとつの大きなスライムを作ったときは、それまであまり直接スライムに触れていなかった子どもも自分からスライムに触れようとしており、実際にスライムに触れて楽しそうな表情をしていた。服や髪にスライムがついてしまう子もいたが、子どもたちはスライムに触れることに熱中しているようだった。

子どもがどれほどスライム作りに食いついてくるかが気になりだったが、普段の生活ではあまり体験できないと思われるスライム作りに対して子どもたちは楽しそうに取り組んでいるようだったし、スライムを作るときにはそれぞれの子どもが自分なりの工夫をして自分だけのスライムを作ろうとしていた。

○反省

スタッフより、以下の反省があげられた。

- ・最初はスライムに手で触れずにいた子どもが、午後の活動で思いきり手で触って楽しむことができてよかった。
- ・材料が目の前にあると、説明がうまく子どもたちに伝わらない。
- ・服にスライムがついてしまったりもしたので、着替えがあったほうがよかった。
- ・スタッフが手を出すことが少し多かったかもしれない。
- ・子どもたちの嬉しそうな顔が見れた。喜んでくれた。
- ・自分オリジナルのものがつくれるという素材がよい。
- ・十分かと思われた材料も、材料が不足したので、最初に「用意した材料の量はこれだけだよ」と伝えておいたら、作ったスライムをより大切にできたかもしれない。
- ・保護者さんもまざって活動できてよかった。
- ・学生間の雰囲気の良いさが当日の盛り上がりにもつながったと思う。
- ・他大学の意見が聞けていい機会になった。
- ・班決めは、はじめに決めといてもよかったかもしれない。
- ・お昼ご飯の時間も長くとれたので、子どもとの距離もさらに近くなった。
- ・子どもへの接し方や進行など、学生間での学びもあった。

○講座長のつぶやき

どこまで子どもたちがスライムを作ることに夢中になれるのかが不安でした。

学生が自分は今どうすべきなのかを判断し、スムーズに進行することができました。

学生は進行を把握しているので、子どもたちの動きが止まってくると次の場面にどのように展開したらよいか焦った。そこで学生が材料や素材の見方についての理解を深め、子どもたちがスライムについて深みを見出して活動できると、さらに充実した活動になったのではないかと思います。

「ドロリッチ！」大成功ということで、協力していただいた皆様に感謝しています。ありがとうございました。

7 講座名 ほくほく芋畑牧場 ～バターって作れるんだ～

講座長 勝海公平 (社会科学教育専攻2年)

○学生スタッフ名

佐塚 大悟 (生2)	藤橋 美月 (生2)	檜崎 亮人 (理2)	松原 僚 (理2)
土井 翔太 (理2)	山崎福太郎 (社1)	小松 一成 (理1)	杉木 亮太 (理1)
大川 真由 (芸1)	坂神 永美 (芸1)	渡邊 玲奈 (芸1)	櫻井 里菜 (生1)
富永 翔真 (生1)	藤本 千穂 (心1)	百瀬亜由美 (県短1)	岡崎 早香 (県短1)
細川 瑛李 (県短1)	小澤 沙枝 (県短1)	石井 怜 (県短1)	下平 綾音 (県短1)
本藤はづき (県短1)	花村ちひろ (県短1)	丸山 愛子 (県短1)	中村 里穂 (県短1)
馬場真奈実 (県短1)	常田 実里 (県短1)	岩波 佑果 (県短1)	武田 由佳 (県短1)

○参加者 子ども12名 保護者3名

○講座の概要

子どもたちの活動を主体にして焼き芋とバターを作る。

○当日の活動日程

10:00 アイスプレイク	12:00 昼食 (じゃがバター)
10:30 落ち葉集め	12:30 焼き芋完成・試食
11:00 焼き芋投入・点火	12:45 レク (クイズ)
11:20 バター作り	13:20 終わりの会

○当日の子どもの様子

子どもたちは、活発で元気な子が多かったです。子どもたち同士もさまざまな学校から参加してくれて、知らない子同士であっても徐々に打ち解けて学生と子どもの関わりだけでなく、子ども同士の関わりも生まれて良かった。特にバター作りでは、当初子どもが飽きてしまう可能性も懸念していたのだが、1つ完成品を提示したところ、子どもはバターが完成するまで一生懸命活動してくれた。完成したバターを使ったじゃがバターと子どもが集めた落ち葉で焼いた焼き芋と両方とも子どもたちはおいしいと言って食べていたのでよかった。最後の振り返りで、子どもたちが「楽しかった」と言って、笑顔を見せてくれてうれしかった。

○反省

今回、初めて講座長をやらせていただいて、1つの講座を運営するということを通じて責任感というものを強く感じた。そういった中で、周りの協力は不可欠なものであると感じた。ただ、みんなの上に立って運営するという点に関しては、自分の力不足を感じた。各係の分担や全体を見るためにあまり動いてはいけないということが、もっと必要であったと感じた。正直、子どもと積極的に関わることが多かった。欲を言えば、もっと各分担をより明確にして企画の段階からもっと関われるようなしくみで講座を計画すれば、更に講座内容が充実しよりよいものになったと感じる。しかし、当日は学生スタッフが自分には何ができるのかということを考えて行動してくれたこと、子どもと楽しそうに接することができていたということが良かったと思う。当日まで、プレをやっても芋が焼けるかといったような不安があった中で、うまく焼けて、何より子どもたちが楽しんでくれてよかった。今回の反省を踏まえ、来年も何らかの形で YOU フェスに参加したい。

8 講座名 ぷわぷわだよ バルーンワールド

講座長 太田香子 (社会科学教育専攻3年)

○学生スタッフ名

太田 香子 (社3) 藤森 麻衣 (社3) 中島 早紀 (社3) 清水 恒作 (社3)
井出 愛香 (実2) 駒村 瑞穂 (社2) 清水 龍来 (社2) 花見 直樹 (社2)
細田 春菜 (社2) 西本 克也 (社2) 和田 洋明 (社2) 芦沼菜々恵 (理2)
牧春 香 (言2) 池尻 亮介 (心2) 玉野 未来 (生1) 名倉 礼美 (言1)
栗林 詩菜 (芸1) 鷹野ふゆみ (社1) 月岡 優介 (社1) 小平 早紀 (地1)
根石ゆり恵 (県短2) 小林 佳奈 (県短2)

○参加者 子ども8名 保護者4名

○講座の概要

バルーンアートで犬や星などさまざまなものを自由に制作し、飾り付ける。

○当日の活動日程

10:00	アイスブレイク	13:00	制作
10:20	自己紹介、グループごと活動	13:20	飾り付け
10:30	制作開始	13:35	反省・感想
12:00	昼食、外遊び		

○当日の子どもの様子

はじめは緊張しているように見えた子どもたちであったが、アイスブレイクではとても盛り上がり、楽しむことができた。その後、グループに分かれ、制作に移った。バルーンアートは、コツをつかむまで学生でも少し難しい部分がある。小学生、ましてや保育園児にできるのかと不安であったが、小学生は1～6年生まですぐにできるようになってしまった。また、年長児も後半には親の補助なしに自分で風船をねじり、自由に形を作っていたことにはとても驚いた。どんどん進んだ制作に取りかかる女の子や、制作物で遊ぶ男の子など、それぞれの楽しみ方をしていたと感じる。最後には自分のお気に入りの作品をうれしそうに持ち帰った様子が見られた。

○反省

自由度の高い活動にしたことで、それぞれが楽しむことができたのはよい点であったと感じる。また、学生スタッフの数も多かったため、子どもを一人にさせてしまうことがなかったこともよかった。

反省点、改善点を主に3点ほどあげる。1つ目は保護者対応である。保護者の方にも一緒に班に入ってもらい、子どもと一緒に制作を行っていただいた。それはよかったのだが、お昼のときの外遊びなど、保護者の方が大変暇になってしまったように思う。その時どうすればよかったのだろうか。課題の1つである。

2点目は、子どもたちの横のつながりをあまり作ってやれなかったことである。初対面の子どもたちが、打ち解けることは多少時間を要するものである。まして、今回はかなり学年にばらつきがあったので、余計に難しかったのではないだろうか。数時間しかない活動の中で、どのようにしたら横のつながりを短時間で深めることができるのだろうか。課題の1つである。

3点目はプログラム自体に関して、である。多少時間があまり、だらだらと制作してしまったように感じる。風船を使ったゲームを途中取り入れたり、全体で大きなものを制作してみるなど、メリハリをつけるべきであったと感じた。全体で何か制作することで2点目の反省点も改善できるのではないかと、という可能性も感じた。

以上のことが私の反省である。今回もさまざまなことを学ばせていただいた。私が作った講座に、これほどの子どもたちや保護者の方が参加してくださり、楽しんでいただけたことは大変うれしいことである。また、集まってくれた学生スタッフにも感謝の意を表したい。今回の企画は自分にとって大変貴重な体験となった。

9 講座名 つくってわくわく！ 楽しい工作

講座長 金井和也（心理臨床専攻3年）

○学生スタッフ名

金井 和也（心3） 吉川 花純（心3） 小湊なおみ（社1） 加納 寛子（生1）
久保恵理子（生1） 星野 真保（生1） 秋元 雄喜（心1） 石島恵太郎（心1）
小河 輝信（心1）

○参加者 子ども7名 保護者3名

○講座の概要

身近にある物を使って、楽しく工作をしよう！

作ったもの：空き缶コロコロ、モンスターアタック、龍の舞

○当日の活動日程

9:45	はじめの会・作るものの紹介	12:30~13:30	制作続き・作ったもので遊ぶ
10:00~12:00	制作	13:30~13:45	終わりの会(発表)・閉会式の練習
12:00~12:30	昼食休憩		

○当日の子どもの様子

最初はみんな同じ缶と輪ゴムとストローのおもちゃから、いろいろなデザインへとその子の個性が加わって変化していく様子、そして、その過程で作品が出来上がったときの喜びを共有できていた。子どもたちは、学生の作った作品を参考に、どんどん自分たちで作品を作っていた。そのアイデアや発想の豊かさがすごく、学生も驚くような予想外（予定外？）な作品が完成した。上手くできたときや、おもしろい物が完成した時に、子どもたちはとてもうれしそうに作品を周りの人に見せて回っていた。お昼休憩のときもすぐにご飯を食べてしまい、「続きをやる！」と部屋で工作に熱中していた。

子どもたちが集中して自分の作品を作っている姿が印象的だった。作品も、それぞれ個性豊かなものができ、みんな満足していた。作品を通した子どもたちの交流があった。閉会式である子が、「来年もまた来たいなあ」とつぶやいていた。

○反省

- ① 個人で作るという形式だったが、せっかく知らない子同士が集まったのだから、みんなで一つのものを作るなどがあると、もっと交流が生まれるのではないかと思った。

- ② 特定の子どもとばかり関わりを持つことが多かったため、小規模という良さを活かして、全体的に回ればよかったと思った。
- ③ 材料や道具の取り合いで、ケンカになりそうになってしまった。クラフト系は、材料や道具を人数よりも多めに用意しておくことが重要だと感じた。
- ④ 子どもによっては、何から作っていいのかわからない子もいれば、自分でどんどん作って行きたい子もいた。手助けが必要なのか否か判断するのも上手くいかなかった。
- ⑤ 説明がうまく伝わらなかったため、練習が必要だと感じた。また、それぞれで個別に教えたときに、伝え損ねてしまったこともあったため、事前にみんなで共通意識を持つておくことが必要だと感じた。
- ⑥ 子どもが、他の子やスタッフの名前を覚えられなかった。はじめの会で、自己紹介やアイスブレイクなどの交流があればよかった。

10 講座名 夢のマイホーム☆

講座長 佐久理絵（理数科学教育専攻3年）

○学生スタッフ名

乗倉由香里（言3）	水間さや香（生3）	山崎 美炎（理2）	澗口 歩美（理2）
佐藤慧瑠奈（理2）	米沢 李紗（理2）	名取 亮介（実1）	山田 高弘（実1）
門脇恵里香（言2）	黒坂 彩乃（言2）	小林 美緒（言2）	橋詰 志織（言2）
水木 彩乃（横1）	小高 大樹（上3）	岡崎沙季（県短3）	

○参加者 子ども11名 保護者2名

○講座の概要

ハイジとおじいさんのために喜んでもらえるような家を協力して作る。

○当日の活動日程

9:45 アイスブレイク	11:25 作業
10:00 導入映像を流す	12:40 完成 写真撮影
10:05 作戦用紙に書く	12:45 昼食
10:15 作業開始	13:15 お家訪問
11:15 作戦会議	13:45 終了

○当日の子どもの様子

ハイジとおじいさんのために家を作ってあげることが目的として、2つのグループに分かれてそれぞれの家を仲間と協力して作り上げました。最初にそれぞれのグループでどんなものを作ってあげたいか意見を出し合い作戦用紙に書き込み、ベッドや机、椅子、テレビなど様々な意見が出ました。それを形にするために工作が始まりました。作業をしているともっとこうしたい方がいいというアイデアもどんどん生まれてきました。学年も関係なく、みんなよりよい家を作ろうと工夫をしており、学生スタッフもその子どもたちをサポートしていきました。どちらかの家が素敵な工夫をすると、それを真似したり、一層工夫をしていったりと、2つのグループはお互いのいいところを盛り込んで、良い方向に仕上げることができました。完成

したお家でお昼を食べて、お互いの家を訪問して終わりとなりました。初めは緊張していた子どもたちでしたが、最後は学年関係なく笑顔で活動できました。

○反省

初めて講座長をさせていただきましたが、準備や計画が十分でなかったこともあって、前日準備では本当に明日講座ができるのか不安でした。しかし、学生スタッフの協力でなんとか完成し、子どもたちの笑顔を見ることができました。子どもたちは本当に発想が豊かでした。こんなものを作るのではないかと勝手に予想して用意した道具や材料を使って、私たちの想像を超えるものを作り上げてくれました。「もっと沢山の材料を用意すればよかったなあ」と感じる場面が多かったです。学生スタッフも子どもたちの作りたいものを作る手段を一緒に考えて、サポートを一生懸命してくれました。小学1年生から6年生まで、そして保護者の方とも幅広く、一緒に同じものを作り上げることができ、一人でもいなかったらこんな素敵な家にはならなかっただろうと思います。

自分が小さいときにやりたかったことが目の前で実現して、本当に感動しました。学生スタッフ、子どもたちに本当に感謝しています。

11 講座名 子育てを語ろう ～学生の思い・親の思い～

講座長 入澤清里（教育実践科学専攻3年）

○学生スタッフ名

竹中麻由子（生3） 飯山めぐみ（言3） 高橋 りほ（芸3） 大井 香里（芸3）
渡辺かおり（社3）

○参加者

学生（上記学生スタッフ及び講座のみ参加の学生を含む）12名 保護者13名
野口愛由里（社3） 丸山 絹代（実3） 近藤 まい（言3） 盛合 早苗（心3）
西澤佑夏里（地3） 青木友佳里（言3）

○連携団体 ながの子育てネット

○講座の概要

子育てに関する2つのテーマ

- ①あなたが子育てで大切にしていること大切にしたいこと、
- ②あなたが小中学校の教育にのぞむこと、

に沿って、学生保護者混合で3グループに分かれての意見交換会と全体発表。

○当日の活動日程

10：00-10：10	講座の流れ説明	11：15-12：20	グループ替え 自己紹介
10：10-11：05	自己紹介		テーマ②でグループワークと全体発表
	テーマ①でグループワークと全体発表	12：20-12：30	感想発表
11：05-11：15	休憩	12：30	講座終了

○当日の講座の様子

学生3～4人、保護者の方4～5人ずつ3グループに分かれ、自己紹介をした後、意見交換のグループワークに移りました。意見交換の方法は、付箋にテーマについての自分の意見や考えをキーワード化して書いていき、1グループ1枚の模造紙の上に理由を説明しながら貼り付け、グループで出てきた付箋を系統立ててカラーマジックで囲むなどしてまとめていくという方法をとりました。1人7～10枚程自分のもつキーワードを書いた付箋を持ち（例：テーマ①についてであれば「あいさつ」、「自然と関わる」など）、どんどん発表していくので、1グループには60枚前後のキーワードが書かれた付箋が集まり模造紙いっぱいになりました。

系統立てが終わったところで、全体発表をして意見を共有する時間を設けました。グループごとに仕上がりが違っており、新たな視点を持ち合う貴重な時間を過ごせたと思います。時間が経つにつれて緊張がほぐれ、穏やかな雰囲気の中で意見交換が進みました。

★以下、意見交換でまとめた模造紙の内容を一部掲載します。

テーマ② あなたが小・中学校の教育に望むこと

【安心できる場】

- ・ほめてあげてほしい
- ・人間性のある対応
- ・子どもが相談できる先生
- ・安心して通える場
- ・おとなしい子の言葉もきく
- ・よく見る
- ・いじめに真剣に取り組む
- ・授業でクラス作り
- ・信頼 ・表現

【基礎学力と学習の楽しさ】

- ・基礎学力をもっと大事に！！
- ・基礎学力を大事にしてほしい
- ・基礎的な学力 ・わかりやすい授業
- ・「どうして？」に答える
- ・勉強のおもしろさ・わかりやすさ
- ・将来の仕事との関連性
- ・社会勉強（教育） ・体験
- ・課題意識を持たせる
- ・読書 ・自由にのびのび

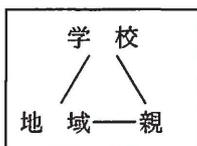
【友だちを大切に】

- ・友達の大切さ
- ・友達との関わり
- ・クラスだけでなく他のクラス、学年と交流

【先生の魅力】

- ・人生の魅力を伝える
- ・専門性 ・イキイキ
- ・先生を一人ぼっちにさせない運営

【連携】



- ・親も先生のサポート役 ・「親の力」も上手に活用して欲しい
- ・体験を通した学び ・環境に興味を持つ ・地域との関わり
- ・子どもの様子を親に知らせてほしい
- ・学校だけで枠の中で考えないほうがよい（問題や先生の悩みも）
- ・お父さんも大切に！上手に巻き込んでほしい ・親が横につながれる場を大切にしたい

○反省

企画の立ち上げが遅く参加者が集まるのかどうか不安でしたが、グループワークを行う上では適当な人数でした。しかし、参加者のうち男性は2名だけで、男性立場から子育てを見つめた意見が少なくなってしまうのは残念に思います。学生、保護者の方双方で男女の偏りをより少なくできれば、より多角的な意見交換ができたかと思います。あと、活動時間が予想していたよりも多くかかってしまい、参加者の皆さんにご迷惑をかけてしまいました。予想していたよりもずっと考慮に考慮を重ねて計画する必要がありました。

反省点も多く残りますが、学生にとっては、普段なかなか聞けない保護者の方々の貴重な意

見に触れ、自分の持つ教師像や母親像が具体化し、将来の展望を見つめ直すきっかけになったのではないかと思います。最後に、多くの保護者の皆様のご参加と学生のみなさんの協力があつて講座が成立したことに、お礼申し上げます。ありがとうございました。（入澤清里）

○ご協力者から

『子育てを語ろう～学生の想い・親の想い』を開催させていただいて

ながの子育てネット 稲村和美

あとわずか何年か後に家庭を持つであろう若者との対話の機会を切望していましたので、大きな期待を持って臨んだ講座でした。小学生の子どもを持つ親と教育学部の学生が混じったグループでのグループワークを行いました。この組み合わせで考えるとテーマが子どもの教育に傾いてしまい、良かったのかどうか。また、多少なりとも年長者である私たちは若者に何かプラスのものを伝えられたのかなと反省。見直す点は多々あると思いますが、異世代交流は大切だなとあらためて感じました。今回限りではなく、年に1回でも継続して学生と親とが同じテーマで顔をつき合わせて議論する機会がもてたらと期待しております。

土井先生をはじめ、信州大学の学生さん、ご理解とご協力を賜りありがとうございました。

◇実践から得た「臨床の知」

子どもたちの「できた」「わかった」をみんなで喜べる

藤浦修司（社会科学教育専攻3年）

「YOU 遊フェスティバル」は年に一度の開催ですし、学生と子どもたちが直接触れ合えるのはわずか一日だけです。ただ、子どもたちとの触れ合いを心待ちにしている学生、楽しみにしてしてくれる子どもたち、子どもの参加を快諾してくださった保護者のみなさん、「YOU 遊フェスティバル」の開催を支援してくださる教職員、地域のみなさん、それぞれの思いがいっぱいに詰まった企画です。準備から当日までの活動、さらにそれらの活動を振り返る中で、学生にとって「第9回 YOU 遊フェスティバル」はどのような経験になり、どのようなことを学んだのかを考えたいと思います。

1. つながる・ひろがる・笑顔の輪

まず、第9回のテーマである「つながる・ひろがる・笑顔の輪」に照らして、学生や子どもたちにとって「YOU 遊フェスティバル」がどのようなものであったのかを考えてみたいと思います。

《子どもたちの成功・発見をみんなで喜べる》

・堂々と遊フェ参加者の前で発表することができました。

（みんなで楽しく!!ソーラン節）

・しらたきに絵具で色をつけたり、コンニャクを天井から吊るしたり、霧吹きを噴射しながら追いかけてきたり…子どもたちの発想のすごさや視点の意外さ、人を驚かしたときの何とも言えない嬉しそうな笑顔に出会えました。

（おぼけやしきをつくろう！～みんなを怖がらせることはできるかな!?～）

- ・楽しくおやき作りをして、「自分にもおやきが作れるんだ」と、とても満足そうでした。
(わたしたちのおやき屋さん)
- ・ストーリーにのめりこんでいてすごく楽しそうに走り回り、真剣に課題に向き合っている姿は非常に印象的でした。
(タイムトラベラー)
- ・スライムを作るときにはそれぞれの子どもが自分なりの工夫をして自分だけのスライムを作ろうとしていました。
(ドロリッチ！)
- ・年長児も後半には親の補助なしに自分で風船をねじり、自由に形を作っていたことにはとても驚きました。
(ぷっわぷわだよ バルーンワールド)
- ・上手くできた時や、おもしろい物が完成した時に、とてもうれしそうに作品を周りの人に見せて回っていました。
(つくってわくわく！楽しい工作)

「どうすれば子どもたちに楽しんでもらえるかな」「子どもたちに何を伝えられるだろう」「失敗したらどうしよう」——多くの講座で、様々に模索し、たくさんの不安を感じながら準備をしてきています。しかし、学生の感想からもわかるように、子どもたちと対面すれば不安は楽しみや喜びに変わります。子どもたちが「できたよ」「わかったぞ」と、成功や発見を喜ぶ姿がたくさん見られました。そんな子どもたちに元気ももらい、学生の顔も笑顔へと変わります。「こんなものをつくるんだらうな」「これくらいはできるかな」。子どもたちの視点に立ってつくり上げて来たものは、良い意味で裏切られました。学生の想像を超える子どもたちの成功や発見がたくさんありました。子どもたちの可能性に驚かされ、つつい笑顔になります。子どもたちの眼の輝きに、多くの学生が感動したのではないかと思います。

《交流し、協力することの素晴らしさや達成感をともに味わう》

- ・子どもたちも学生に心を開いてくれていて、一緒に鬼ごっこやサッカーをして遊んでいる姿が見受けられました。
(みんなで楽しく!!ソーラン節)
 - ・知らない人だらけのメンバーだったと思いますが、準備を通して学生同士の仲も深まりました。
(おぼけやしきをつくろう!～みんなを怖がらせることはできるかな!?)
 - ・本番が近づくと不安も増していききましたが、同じ講座の仲間を支えられ、結果大成功という形になりました。本当に人と人とのつながりを感じ、その力のすごさを実感しました。
(タイムトラベラー)
 - ・ゲームをしていく中で「がんばれー!」と自然に応援し合ったり、一緒に喜び合ったりする姿を見ることができました。
(巨大人生ゲーム!!)
 - ・年齢や調理経験によってできることに差はありましたが、学生スタッフと協力しながら、自分にできることを一所懸命にやっている姿をみることができ、とても微笑ましかったです。
(わたしたちのおやき屋さん)
 - ・子どもたちが「楽しかった」と言って笑顔を見せてくれてうれしかったです。
(ほくほく芋畑牧場 ～バターって作れるんだ～)
 - ・普段なかなか聞けない保護者の方々の貴重な意見に触れ、自分の持つ教師像や母親像が具体化し、将来の展望を見つめ直すきっかけになったのではないのでしょうか。
(子育てを語ろう ～学生の想い・親の想い～)
- さらに、子どもたちの成功や発見をともに喜びあえたことも重要だったと思います。講座が

始まる前から、緊張した様子の子どもたちにも学生から積極的に声をかけていたことが印象的でした。講座の様子を見たときには、どの講座でも「これはどうするの」「一緒にしよ」と子どもたちからどんどん学生に話しかけていました。また、子どもたちが教えあったり、応援しあったりする姿も見られました。子どもたち同士の関わりを作りたいと苦心してきた学生スタッフの思いと子どもたちの協調性で、一つのことに取り組む素晴らしさやその達成感を感じられたのではないのでしょうか。

また、学生同士の関わりの中なかでも、協力して取り組む姿が随所に見られました。講座長はゼロから講座の活動を考えます。企画書には実行委員からの意見や指摘をたくさん書きましたが、何度も作り直し、学生スタッフや子どもたちの興味や関心に寄りそい続けました。学生スタッフも、講座の中で自分にできることを探し、講座長を支えていました。初めて講座に取り組んだ講座長やスタッフは、大変な思いをさせていただこうし、不安もあったと思います。それでも、仲間と支えあってやりぬいたことは大きな経験となると確信しています。

2. 学生スタッフの協力

「第9回 YOU 遊フェスティバル」は、学生スタッフの「力」が強く感じられたものでした。実行委員で全体の企画・運営を進めてきましたが、7人という人数でなかなか手が回らないことも多くありました。そんな中で、「YOU 遊フェスティバル」が成功したのは、学生スタッフが進んで協力してくれたからこそだと実感しています。

子ども募集では、多くの学生が知人・友人に声をかけてくれることで、市内の小学校や「YOU 遊世間」の活動プラザでたくさんのチラシを配布することができ、たくさんの子どもたちに「YOU 遊フェスティバル」の開催を伝えてくれました。200人を超える学生の食事の準備では、講座の準備で疲れている中、たくさんの学生スタッフが調理を手伝ってくれました。机の配置や食事の配膳も全ての学生スタッフが声を掛け合って準備をしてくれました。「たくさんの人と協力してつくっていくことってやっぱりすごい」と、立場をこえて支えあい、協力し合うことでつくり上げていく素晴らしさを多くの学生で確認できたと思うとともに、感謝の気持ちを大切にしたいと強く感じたのではないのでしょうか。

3. 「YOU遊世間」の連携団体や長野市PTA連合会、保護者の皆様の協力

多くの子どもたちの参加で「YOU 遊フェスティバル」が成功した裏側には、「YOU 遊世間」の連携団体や長野市PTA連合会、保護者の皆様のご理解やご協力があります。

「YOU 遊世間」でお世話になっている地域の方々や、先生方には、地域の小学校にチラシを配布していただいたり、プラザのなかで宣伝をする時間をつくっていただいたりしました。長年にわたって地域の方々と共に作りあげてきた「YOU 遊世間」の活動に信頼を寄せていただいているのだと思います。このようなあたたかな関係を築けていることに感謝をするとともに、今後も信頼を置いてもらえるように取り組んでいきたいと強く感じました。

また、長野市PTA連合会の皆様には、平成22年7月31日に行われた「夏休み親子体験教室」などで「YOU 遊フェスティバル」の宣伝をさせていただきました。事務局の皆様には長野市内の小学校にチラシを配布できるようご尽力していただきました。私たち学生の活動に関心をもって、協力してくださったことに心から感謝したいと思います。

さらに、保護者の方々には、「YOU 遊フェスティバル」の活動に関心と期待をもって子ど

もたちを快く送り出していただくとともに、当日の活動にも参加していただきました。学生にとっても、保護者の方々と関わる貴重な機会となりました。「うまく関われなかった」という学生もいたようですが、「今度はいろんな話をしてみたい」と次につながる経験となったようです。大切な子どもたちを学生の企画に預けてくださる保護者の方々の期待に応えられるよう取り組んでいく気持ちを大切にしたいと思います。

4. 教職員の方々の協力

「YOU 遊フェスティバル」の開催は学生だけではできないものです。準備の段階から、開催後の片付けやまとめに協力して下さった大学生協・学務係・会計系の職員のみなさんや土井先生はじめ先生方の献身的な協力なしにはなし得ないものでした。

会場となる信州大学教育学部キャンパスを使用させていただくとともに、机や椅子、ストーブ等の物品も貸し出していただきました。学生や子どもの参加が多い規模の大きな企画なので、会場や物品の確保も大変なことです。生協も本来休日は休業ですが、「YOU 遊フェスティバル」のために朝早くから開けていただいています。快く相談にもものっていただいた職員の方々がいてこそ開催できたことをしっかりと心にとめて、今後も取り組んでいきたいと思えます。先生方にも多大なご理解、ご協力をいただきました。調理室や西校舎エレベーター等の使用、企画への協力では大変ご迷惑をおかけしましたが、ご理解いただいて見守って下さいました。担当教員の土井先生には格別のご支援とご協力をいただきました。土井先生のご指導がなければ「YOU 遊フェスティバル」の成功はなかったと思えます。実行委員会発足前から私たちのとりくみを気にかけていただいていた。講座長の募集期間にも、土井先生自ら学生に声をかけてくださいました。講座長がなかなか集まらず苦心していたときにも「あなたたちの年の「YOU 遊フェスティバル」がある。講座の数が成功かどうかを決める基準ではない。自分たちの思いに自信をもっていれば、必ず成功する」と励ましてくださいました。子ども募集では、長野市 PTA 連合会と一緒に出かけ「学生の強い思いがこもっている企画です。子どもたちにチラシが行き届くようご協力ください」と頭を下げてくださいました。数か月に及ぶ準備のなかで、何度も声をかけ、激励してくださいました。土井先生の昼夜を分かたぬご尽力があったからこそ、私たち学生が自分たちの思いで主体的に取り組める企画となりました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

5. 最後に

「第9回 YOU 遊フェスティバル」を通して、人の温かさ、協力してつくりあげることの感動をあらためて感じました。「何か手伝えることはあるかな」「ちゃんと寝れてる」「今日はどんなことを話したの」と、私たち実行委員のとりくみをいつも心から気にかけてくれた友達や先輩方、土井先生の言葉一つひとつが、私たちの原動力となりました。また、当日は子どもたちや保護者の方々と一緒に活動する中で、200人の学生が一人ひとりに感じる事、学ぶ事があり、仲間と交流する中でそれらを深めていけたのではないのでしょうか。人と人が関わり、ともにつくり上げるという貴重な経験ができたと思えます。

「YOU 遊フェスティバル」は、私たち学生が自分たちの「思い」で創造していくものであり、その可能性は無限大です。学生の「思い」に期待して支えてくれる全ての方々への感謝を忘れず、その年々のカラーで新しい「YOU 遊フェスティバル」を創造して行ってほしいと思えます。

「信大 YOU 遊世間」にご協力いただいている団体・個人のご紹介

「信大 YOU 遊」の取組は、平成6（1994）年6月6日の実行委員会開催から始まり、その10年目（平成15年度）から「信大 YOU 遊世間」と改称し、以来、地域社会のさまざまな団体・個人と連携させていただいています。その際、大学側からお願いしていることは、次の4点です。

- ① 子どもの育成や世代間交流などのふれあい体験ができること。
- ② 学生も企画段階から参画できること。
- ③ 1年間単位での継続的な自然体験や社会体験ができること。
- ④ 子どもの安全等の責任は、その団体において受け持っていただくこと。

これらの条件を規準として両者の間で協議し、合意を形成しながら活動を進めてきています。学生は地域社会のご期待に応えられるよう汗と知恵を発揮することに努めています。

「YOU 遊」の取組をまとめた「報告書」も、本書で第17集となりました。この間、学生は陰に陽に地域社会からご厚誼をいただけてまいりました。それらのことは、いずれの「報告書」にも感動を持って記述されております。次に、これまで長年にわたって大変お世話になっている団体・個人の方々をご紹介します。感謝の意を捧げたいと思います。

1. JA 長野中央会・JA ながの・長野市農業公社

「人づくり」の智慧を「土づくり」の体験学習を通して学ばせていただいています。

学生はその豊かな感性で、農作業体験から実に多くのことを吸収しています。

2. 長野市茂菅地区農家

「信大茂菅ふるさと農場」の水利用にあたっては、4軒の農家の輪のなかに入れていただき、水管理のお世話になっています。特に地元農家の林部信造氏ご夫妻には、農場と地域社会の調整役としてお世話になっています。

3. 長野県長野養護学校保護者の会

お母さん方がお子さんに接しておられる姿を通して、学生は一步一步障害児との関わりを学ばせていただいています。

4. 長野市立湯谷小学校保護者の会

子どもの活動のために保護者と学生がどのように連携すればよいのかを試行錯誤しながら学ばせていただいています。

5. 長野県教育委員会・長野市教育委員会・青木村教育委員会・麻績村教育委員会・須坂市教育委員会

村や市をあげて学生を受け入れ、伝統文化が息づく環境の中で学生を育てて下さっています。

6. 長野市大岡支所・長野市立大岡小学校・農村女性ネットワーク・放課後子どもプラン

大岡地区で新たなプラザを立ち上げるためにご協力いただいています。

このほかにも多くの団体・個人の皆様のご協力をいただいています。どうぞ、今後ともよろしくお願い申し上げます。 (土井 進 記)

編集委員会規程

平成 18 年 3 月 16 日制定

平成 23 年 1 月 10 日改正

第 1 条 編集委員会の設置

「信大 YOU 遊世間」の実践記録を、学術的価値のある教師教育学研究として高めていくために編集委員会を設置する。

第 2 条 編集委員会の構成

「信大 YOU 遊世間」の運営委員（運営委員長、副運営委員長、各プラザ長）と「YOU 遊フェスティバル」の実行委員、その他編集委員会において必要と認めた者が編集委員となり、編集委員会を構成する。

第 3 条 編集委員長

編集委員長、副委員長は委員の互選によって決める。

第 4 条 編集方針

- (1) 各プラザの実状に即した編集を工夫する。
- (2) 学生の視点だけでなく、必要に応じて広く地域社会の協力者や専門家の意見も取り入れる。
- (3) 第 1 次原稿の提出は 1 月 10 日。発行は 3 月 3 日とする。

第 5 条 執筆要項

- (1) 執筆する際は、「信大 YOU 遊世間」の実践と「YOU 遊フェスティバル」の実践を通して、実践的指導力のどのような側面を養成することができたのかが明らかになるように、具体的に記述する。
- (2) 実践的指導力は、「子ども理解力」「教材開発力」「教師としての人間力」の観点から、次の 10 項目とする。
 - A：子どもへの興味・関心
 - B：子どもが秘めているパワーへの共感的理解
 - C：子どもとのコミュニケーション
 - D：広く豊かな人間力・社会力
 - E：大学における学問力
 - F：広場（プラザ）や講座の企画力
 - G：わかりやすい授業力、楽しくなる実践力
 - H：学生どうしの協働力
 - I：保護者、地域社会の人々との人間関係構築力
 - J：その他

第 6 条 この規程は、平成 18 年 3 月 16 日より施行する。

開かれた「信大 YOU 遊世間」の創造

第 18 期「信大 YOU 遊世間」運営委員長 服部直幸（理数科学教育専攻 3 年）

私が「YOU 遊世間」運営委員長を務めたいと思ったのは、大岡での人との出会いがきっかけでした。その出会いも、先輩からの参加募集の連絡がきっかけとなり、「行けば何かある」とビビッと感じたその直感に始まったことでした。直感はあたりました。地域の方が「80 歳になっても子どもから学ぶことがあります」とお話しされたことに、とても感動しました。そして、大岡小学校の先生方、地域の方々との交流を通して、地域で子どもを育てることの重要性に気がきました。この思いを広めていくのは自分の使命だという気持ちを抱きました。

私が感動することは、私でなければできないのかもしれませんが。学ぶことや体験できることは、人それぞれ違っていると思います。しかし、「そこには人がいる」ということは、全員に共通することだといえます。私たち学生にとって、社会で生きていくうえで大切な人との関わりや共に社会を築いていこうとする力、すなわち社会力を育むことがとても重要です。「信大 YOU 遊世間」は社会力を育てる活動の先頭に立って、より多くの人に参加してもらえるように頑張りたいと思います。

私の大岡での体験の多くは自分の中にとどめられ、「もっとこの思いを伝えたいのに」と感じていました。きっと、これからの「YOU 遊世間」に必要なことは、次の 2 点だと思います。

(1) 情報を共有できる「YOU 遊世間」としての存在感を示すこと。

(2) 伝えることよりも「まずは行ってみようよ」と学生に声をかけ、初めて参加した学生に対しても温かく迎え入れることのできる、開かれた人間関係を築くこと。

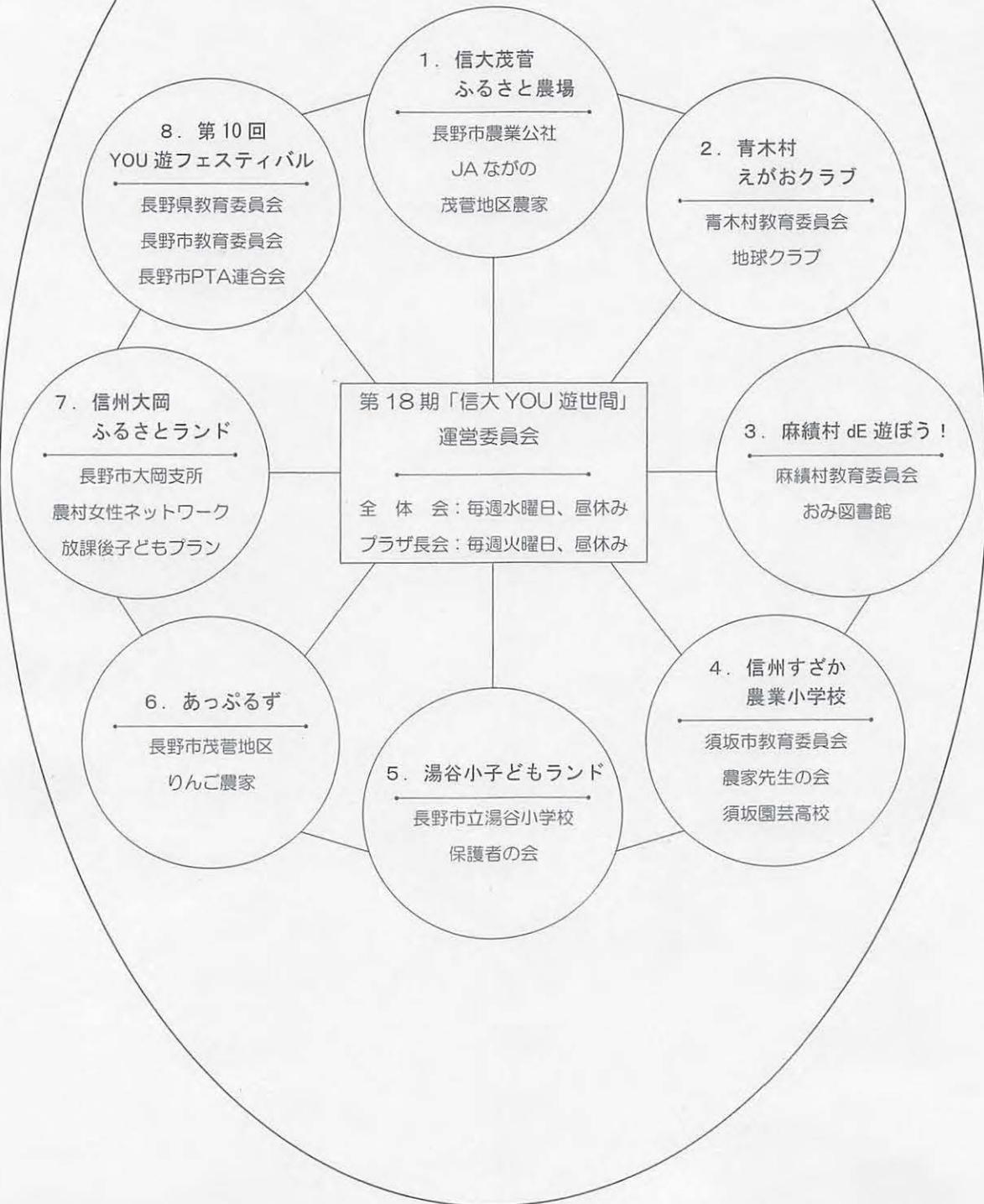
「YOU 遊世間は先輩の知り合いがいなくて参加しにくい雰囲気」がある、「プラザの横のつながり」がほしかった、という第 17 期での学生の声が何よりの証拠です。このような思いをのせて第 18 期をスタートし、新しい「信大 YOU 遊世間」を創造していきたいと思っています。

これまでの 17 年間、「YOU 遊世間」を受け継いできてくださった諸先輩に深く感謝するとともに、「私もやってみたい」と勇気をもって立ち上がってくれた下記の学生スタッフの皆さんに心から感謝しています。全員で「YOU 遊世間」の意義を見つめなおし、地域に入って、キャンパスの中だけでは経験できない数多くの出会いを大切に、自ら学ぶことはもとより、地域貢献ができる「信大 YOU 遊世間」になるように、新しく力強い第一歩を踏み出したいと思っています。どうぞ、よろしく願いいたします。

第 18 期 「信大 YOU 遊世間」スタッフ一覧 (2011.02.08 現在)

運営委員会	委員長	服部直幸 (理数 3 年)	副委員長	土屋克明 (理数 3 年)
	副委員長	赤羽成美 (生活 2 年)	副委員長	高坂 泉 (生活 2 年)
信州大岡ふるさとランド	プラザ長	北沢瑞樹 (理数 2 年)		
信大茂菅ふるさと農場	プラザ長	井出愛香 (実践 2 年)		
	副プラザ長	菊池智香 (理数 2 年)・澗口歩美 (理数 2 年)		
麻績村 dE 遊ぼう!	プラザ長	佐塚大悟 (生活 2 年)		
	副プラザ長	藤橋美月 (生活 2 年)		
湯谷子どもランド	プラザ長	鈴木喜多朗 (理数 2 年)		
	副プラザ長	佐原啓太 (社会 2 年)		
YOU 遊フェスティバル	実行委員長	松田祐輝 (社会 2 年)		
	副実行委員長	勝海公平 (社会 2 年)		

第18期「信大YOU遊世間」の概念図



おわりに

土井 進 (教育科学講座 教授)

今年度も教育学部長裁量経費からフレンドシップ事業経費を充てていただき、本報告書を発行することができました。温かいご理解とご協力に対し衷心より御礼を申しあげます。本当にありがとうございました。お陰さまで報告書は平成6年度の第1集以来 17 集目となり、内容面においても充実を図ることができました。

編集方針としては今年度も学生一人ひとりの感想を並列的に配置した形態から脱皮するために、各プラザ長が自分のプラザに関わってくれた学生の原稿をとりまとめて、「臨床の知」としてどのような学びがあったのかを分類、整理して、プラザごとに1本の実践報告として執筆することにしました。地域社会の子どもたちや保護者の皆様との1年間にわたる活動を通してどのような学びを得たのか、しっかりと省察して記録に残し、次へのステップとしていきたいと思えます。

「信大 YOU 遊世間」の実践はフレンドシップ事業と名付けられているように、活動を通して学生同士が切磋琢磨し、肝胆相照らす仲へと友情を深めていくことが大きな目標の一つとなっています。この点においては、学生は苦勞を共にすることによってお互いに「善き友」となり、強い絆を結んでいます。「YOU 遊世間」の活動に見られる明るさ、元気良さ、積極性は、この強い絆の現れと言えましょう。

「善き友」を得ることの大切さについて、釈尊の次のような話があります。ある時、釈尊に、弟子の阿難（梵名アーナンダ）が尋ねました。「善き友を持てば、仏道を半ば成就したことになると思いますが、いかがでしょうか？」と。すると、釈尊は答えた。「それは違う。善き友を持つことは、仏道の半ばではなく、仏道のすべてなのだ」と。

1年間にわたる「YOU 遊」の活動を通して尊い友情の絆を結ばれた皆さんに、心からの祝福を申し上げたいと思えます。

【編集後記】

後期に入り、各プラザの活動がだんだんと少なくなっていく中、『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究 (第17集)』の編集作業が始まりました。リーダー会の中で、各プラザ長に原稿を依頼し、日頃協力していただいている地域の方々にも原稿の執筆を依頼し、原稿ができていきました。お忙しい中、時間を作っていただき原稿を書いていただいたことに深く感謝しています。ありがとうございました。また、「YOU 遊世間」で学生が1年間で学んだことを、自分たちの言葉で書いてほしいという願いから、公的な文章として不適切な部分もあるかと思えます。ここでお詫びを申し上げますと共に、ご容赦下さいますようお願い申し上げます。

最後に、この実践記録を作成するに当たり、協力していただいた編集委員の皆さん、「YOU 遊世間」に積極的に参加してくれた学生の皆さん、出版社の春日さん、優しく見守ってくれた土井先生、そして、日頃私たちをサポートし、いつでも温かい心で協力してくださる地域の方々。この実践記録に携わっていただいた全ての皆様に、心から感謝申し上げます。

2011 (平成23) 年1月11日

編集委員長 片原範子

表紙解説

私は今年度、「信大 YOU 遊世間」の「大岡通学合宿」に参加しました。この通学合宿をテーマとして表紙絵を作成しました。楽しさや優しさを身につけながら成長していく子どもたちや大学生の様子が伝われば幸いです。

昨年に続き今年度も表紙絵を描くように薦めて下さった土井進先生、より魅力的な表紙づくりのためにご指導下さった上田秀洋先生、そして「信大 YOU 遊世間」の活動に関わってこられた皆様に心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

(阿部由季 芸術教育専攻 美術分野4年)

<第17集編集委員会> (◎委員長 ○副委員長)

◎片原 範子 (理3) ○三石 梨沙 (理3)

○高見澤 誠 (理3) ○藤浦 修司 (社3)

荻原 知子 (実3) 小賀坂佳子 (理3)

山越 俊 (社3) 入澤 清里 (実3)

肥野沙也加 (野4) 土井 進 (教員)

学部長裁量経費

平成22年度教員養成学部フレンドシップ事業 報告書

授業科目名：「社会体験実習」「社会教育演習」

「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究 第17集

2011 (平成23) 年2月28日印刷 ©

2011 (平成23) 年3月3日発行

編 集 第17集編集委員会

発行人 土 井 進

E-Mail : doisusm@shinshu-u.ac.jp

発 行 信州大学 教育学部 教師教育学研究室

〒380-8544 長野市西長野6-10

TEL 026-238-4260 FAX 026-238-4260

制 作 オフィス春日

E-Mail : xmbxp210@ybb.ne.jp



● 「臨床の知」 ●

信州大学教育学部は、学校、家庭および地域社会の諸問題にコミットし、他者や事物とのいきいきとした関係や交流を保つ「臨床の知」の理念を核とした新しい教育体制に生まれ変わりました。